

太陽戦姫プリキュア外
伝キュアスター・オル
タナティブ香川英里の
初任務

のうち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太陽戦姫対ブレイブソウルで仲間になったキュアスター・オルタナティブ、香川英里がバルカンベースより、ブレイブソウルプリキュアの応援に向いてくるお話です。

目次

プリキュアクロニクル編

第1話	1
第2話 キュアスター・O対ルリ	5
第3話 プリキュアの伝説、その起源	8
第4話	13
第5話 意外な出会い	17
第6話 放浪者	20
第7話 再開したいのは英里の同級生は プリキュア!	23
第8話 英里の同級生は消防士	29

第9話 謎の忍者は英里の家臣!!?

34

第10話 5人揃ってプリキュアオツ

レー!
39

第11話 SPP
43

第12話 2本目の勇者のガシヤット
46

第13話 新たな敵?、キュアエクスプ

レス・ブラックマックス
53

第14話 香川舞亜
59

第15話 始まりのラボ
64

第16話 予測不能のハザード超えて

69

第17話動き出した伝説	73	な姿	105
第18話伝説と喜びの御使い	77	第25話ゴットエンペラーの実力とも	
第19話伝説の力、甦るはもう1人の		う1人の玲央、キュアカイザースカル	
自分	81	110	
第20話オルタナティブの目的		第26話オルタナティブ対ハンニバル、奇跡のタック復活!	114
86			
第21話玲央の思い	90	第27話カイザー対スカル、現れた至	
第22話 英里の想い、善性のスパロ		高神	119
ボバグスター	93	第28話終幕	124
第23話奪われた超力、英里新たなる		プリキュアバトル編	
変身!	99	復活のプリキュアバトル	129
第24話キュアゴット&エンペラー対		新たな戦士達キュアサージ	132
スファイアバグスター エンペラーの新た		新たなプリキュア達、最も危険な女、占	132

い師とゲーム好きな女達 ————— 135

ゲームマスターを名乗るもの、キュア

ライノス ————— 139

エンペラー対ライノス、ゲイラー、待つ

ていたのは新たな世界への旅立ち

142

勇者の世界を回る旅、冥王ゆかりん編

冥王ゆかりん登場、奪われた勇者の力、

エクスカイザーの世界 ————— 148

エクスカイザーの世界 ————— 153

発現英里の新たな力、エクスカイザー

との共闘 ————— 161

マイトガインの世界、まどかと旋風寺

舞人 ————— 168

まどかと舞人、親子の絆が起こした奇

跡 ————— 173

ROAD TO RURIの別世界は皆

チグハグの世界の香川英里編

ROAD TO RURI編

183

香川英里と綺麗なキュアフエンリル、

弟子の弟子キュアフエンサー ————— 187

英里と龍璃の修行、早まるな龍璃

192

英里とルナ、12闘士を起こしに行く。

————— 198

黄泉比良坂 死を司る蟹達	207
聖戦を生き抜いた奴らの実力	211
決着とその後	215
英里と玲央のデート 別世界に飛ん じやった。	219
ボクっ娘玲央対サキモリツシュ玲央	222
Z E E D 編マガキキュアサイド	228
英里の逃亡生活	231
鬼教官、北村静対ブレイブソウルプリ キュア	234
北村静の実力	237
キュアカイザー 新たな強化形態	
戦いの報告	241
カイメラ隊の襲撃、黒い竜巻の実力	246
250	
諜報部の女	254
偉大なる勇者の誕生	257
私は悪を断つ剣なり	262
英里の2人目の娘!?!、クスハ	266
マガ社襲撃	270
香川英里、出生の秘密	275
ニコラ研襲撃	278
チームSRX	282

ブレイブソウルプリキュア達の1000

人組手 | 285

救世主編 天空島の襲撃、プリキュ

ウス対キュアゴツド | 291

太陽戦姫プリキュア キュアイーグル

対アナザープリキュア | 298

プリキュアクロニクル編

第1話

ブレイブソウルプリキュアとの共闘から3日が先日ゲンムコーポレーションの壇黒人の死が好評され、彼の葬儀の次の日、一時は発売中止にまで追い詰められた。プリキュアクロニクルが販売され、ゲンムコーポレーションには新社長が就任した。

そして今、グランガードから聖都大付属病院のCRにブレイブソウルプリキュアが、派遣されたのをうけバルカンベース側で誰かを出向させなければ行けないと誰をあらによこすか、嵐山森夏長官は頭を悩ませていた。太陽戦姫はブラックマグマとの戦いで手が離せない、ということとバルカンベース所属のプリキュアのあと1人を執務室に呼び出した。

英里「香川英里、開発室室長入ります。」

森夏「よく来てくれた。実は君に折り入って頼みたい任務がある」

英里「はあ、それは一体？」

森夏「君には、今、世間で問題になっているプリキュアクロニクルの問題を解決するまでの間、聖都大付属病院のCRに出向してもらおう。」

英里「なぜ私なのでしょう？」

森夏「手の空いている。プリキュアが君だけだったからだ。」

英里「わかりました。直ちに」とこうして英里はプリキュアクロニクルを解決すべく

CRへの出向が決まった。

そして翌日英里は聖都大付属病院のCRを訪れた。

英里がCRの扉をくぐると

? 「あなたは? ?」

英里「君は?、確か覇波龍璃だったか。」

龍璃「何で貴女が此処に、玲央達から今度こそ死んだって聞いていたのに」

英里「そうか、確か君はキュアオルタナティブの被害者だったな。私はこの世界の香

川英里、それに私はもうキュアオルタナティブじゃない。」

龍璃「この世界の香川英里?」

英里「そう、確かに私はキュアオルタナティブだった3日前までは、まあ、詳しい話

は玲央達にでも聞いてくれ。」

龍璃「そうわかったわ。これからよろしく英里!」

英里「私はこれでも19歳何だが」

龍璃「そうなら、英里さんね。よろしく」

英里「まあ、君と別の世界とはいえ私との確執は取り除いておこう。

龍璃くん、私と手合わせ願おうか。」

龍璃「わかったわ。よろしくお願いするわ。」

英里はガシヤットを取り出す。

そして起動させる『スーパーロボット大戦Z!』

龍璃「それは新しいガシヤット。」

英里「そうだな。」ともう一度ガシヤットのボタンを押す

『ステージセレクト』と荒野に変わる

英里「さあ、変身したまえ。」

龍璃はプリキュアクロニクルガシヤットを取り出す

『プリキュアクロニクル!』

キュアプレイヤーリへと変身する。

英里「そう来るか、ならば私も」と持っているガシヤットを起動させ

英里「超力転身・オルタナティブ!」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ!」

そしてガシヤットを起動させてスロットに差し込む

スター・O「実験第2段階」

『ガシヤット！、レベルアップ！ガン、ガン、ガンレオン、ガンレオン、ガンレオン、ガン、ガン、ガンレオン、ガン！ランドクラッシュャー！』

スター・O 「ヒート・クラッシュャーゲーマーレベル2」

第2話キュアスター・O対ルリ

ルリ「キュアスター・O、ヒート・クラッシュシューター」

スター・O「ああ、さて今回は小手調べだ。お互い実力を知る程度といこう。」

『ギーグガン!』

スター・O「さあ、行くぞ!」

ギーグガンをルリに向かって放つ。

ルリ「危なっ!」とギーグガンの攻撃をギリギリのところでは避ける。

ルリも攻撃するが、余裕で避けられてしまう。

ルリ(つよい!なら)とボルケーノカスタムに変身して遠距離攻撃するが避けられてしまった

スター・O「甘い、こちらが遠距離なら自分も遠距離というのはいい判断だ、だが即座に距離を詰めて近距離に切り替える、その切り替え判断も重要になってくる。」

『チェイン・デ・カッター!』

チェインソー二刀流で距離をつめてルリを斬りつけようとす寸前で足払いをして

そしてチェイン・デ・カッターをルリに向ける。

スター・O「及第点だな。だがこれはあくまで君のそのキュアプレイヤーの素の実力をはかっただけだ。まだ手数はカオスに変身すれば私に勝つことはできるだろうが私もそう簡単にやられるつもりはないぞ。」

と武器を消して変身を解いて、ルリに手を差し出す。

ルリも変身をといて龍璃に戻り、手を取る。

龍璃「これからよろしくお願いします。英里さん！」

英里「ああ、よろしく頼むよ。」

そしてささやかながらも英里の歓迎会が開かれた。

さして司会が英里を紹介する。

英里「暫くの間、此方でお世話になります。香川英里です。此処でささやかではあります、プレゼントを用意してきました。」そう言う手にもっていたガシャットケースを開ける。

英里「玲央君にはコレを」

スパロボJと書かれたガシャットを渡した。

玲央「英里さん、僕、このゲームのガシャット持つてるよ。」

英里「コレは別バージョンだ。このゲームは主人公の乗る機体を選択することが出来

るのだが、ガシヤットでは一本につき一機分のデータしか入れられなかったのですね。色々と試して欲しくてね。」

玲央「ありがとうございます。」

英里「陽奈君にはこれだ。」

魔装機神サイバスターと書かれたガシヤットだった。

陽奈「サイバスター？」

英里「コレは、風と鳥をイメージした魔力で動くロボット、サイバスターのデータで造ったガシヤットだ。」

陽奈「ありがとうございます。」

そしてブレイブソウルの面子全員にガシヤットを渡し、龍璃の番がやってきた。

英里「龍璃君にも、ガシヤットを渡したいがまだ開発中だな。実は君に後日ある場所についてきて貰いたい。」

龍璃「分かりました。」

こうして龍璃の翌日の予定していた、バグスターとの戦いは一旦中断し、英里と共に出かけることになった。

第3話プリキュアの伝説、その起源

歓迎会の次の日、英里は龍璃と列車に乗ってある場所に向かっていた。

龍璃「あの英里さん、私達は今どこに向かっているんですか。？」

英里「ん、そうだなあ、てゆうか君に言ったじゃないか、ガシャットデータを集めに行くって」

龍璃「それはそうですね、それがいきなり今日だつて聞いて何にが何だか。」

英里「そうか、なら君にもきちんと説明しないとな。」

と英里は先程まで自分が読んでいた本を龍璃に見せてきた。

龍璃は本のタイトルを読んだ。

龍璃「キュアゴツトの伝説？」

英里「そう、キュアゴツト、私は君のガシャットのデータにその力を入れて渡した
いのだ。」

龍璃「それでキュアゴツトって一体誰なんですか。」

英里「さあ、私にもそこまではわからない、妖精達の国のプリキュアの伝説において
プリキュアの誕生について書かれた場面には必ずと言っていいほど、この名前が出てく

るのだ。だがその正体はいくつかの候補が上がってはいるが、殆どが謎の戦士だ。」

龍璃「本当にそんな戦士が存在していたんですか。」

英里「ああ、伝承ではキュアゴットのもたらす奇跡の光を浴びた心正しい者がプリキュアに変身したと言う話がある。我々がプリキュアという存在になれるのもそのキュアゴットのおかげというわけだ。そこで、この世界にもキュアゴットの伝説が伝わる遺跡があるらしいんだそこで私達は今からキュアゴットに関する調査をしにく。」

龍璃「へえ、プリキュアの誕生起源にそんな話があったなんて知りませんでした。そう言えばさつき候補が上がっているって言いましたけどそれって誰なんですか。」

英里「そうだな、一番有力な候補としては、ホーリーナイトプリキュアって知ってるか。」

龍璃「知ってるも何も何度も一緒に戦った、戦友よ。」

英里「しかし、超プリキュア大戦を境に様々なプリキュアの世界が融合した世界が生じたが、ホーリーナイトプリキュアのメンバーを見たことはあったか、あったことはあるか？」

龍璃「ないわ。」

英里「それにキュアゴットは大地の精霊パワーアニマルを使役していたとされる。」

龍璃「なるほど、確かにホーリーナイトプリキュアの三人もパワーアニマルを使役していましたし、こうして考えると確かに共通点が多いですね。」

英里「だろ、そして私なりにホーリーナイトプリキュアについての調べてな。今から行く遺跡は千年前の遺跡はそこで見つかった壁画からホーリーナイトプリキュアが千年前、大魔王と戦い、大魔王諸共自らを封印したと言う、遺跡でな大魔王が地底のそこマントルに達する寸前のところに封印され、プリキュア達の身体も石像となって封印を守るように遺跡の奥深くに安置されているらしい。」

そして駅につき、英里と龍璃は目的の遺跡に到着、

龍璃「ここに八重さん達が」

英里「まあ、必ずしも彼女達と決まった訳ではない。それに代々受け継いできたプリキュアだというし、完全に比企谷八重達という訳ではないだろう。」

龍璃「そうですね。じゃあ行きましょう。」

そして2人は遺跡の奥地にたどり着いた。

英里「ここが1番奥か。それで龍璃くん、この石像と君の知る彼女達と一致するかね。」

龍璃「八重さん、陽乃さん、シルヴァさん！」

英里「どうやら確定なようだな。」

龍璃にガシヤットを渡す英里

龍璃がキュアパラディンの石像の手を握ると龍璃は光に包まれる。

？「龍璃ちゃん、龍璃ちゃんっ！」

龍璃「ここは？、んっ？八重・・さん」

八重「久しぶり、今はキュアゴットつて名乗った方がいいかしら、それで貴女は何をしに此処へ？」

龍璃は事情を話す。

八重「なるほど、わかったわ。但し、私たちにも力を貸してちょうだい」

龍璃「はい、私に出来ることならなんでもします。」

八重「別の世界の私達を救ってほしい、キュアゴットの使い過ぎで死ねなくなる前に、私達の過去を変えることでもあるけれど、大魔王はこのまま封印していい存在ではないの。あの時代で倒し切らないと行けない相手なの。」

龍璃「それは、」

八重「大丈夫。」と龍璃の額に指を当てるするとなんだろうか。

私が八重さん達と戦っている映像が頭に流れてきた。

八重「上手くいったみたいね。」

龍璃「八重さん、まだ私、何もしてないのに八重さん達と一緒に戦った記憶が。」

八重「ありがとう。貴女のおかげで、私達も本来の仕事に戻れる。大魔王は倒され、私達は自分達諸共封印することはなく今でも、プリキュアとして長い千年という時を天空島の守護者として生きているはずよ。私達も貴女のピンチの時には必ず駆けつけるわ。さあ、私の力受け取りなさい。」再び光に包まれ

英里「・・・つり、・・・る・・・、龍璃くん！」

龍璃「此処は？」

英里「遺跡の外だ。君はいきなり倒れたもんだから中止して出てきたんだが、遺跡から出たあとあの遺跡は消えてしまった。」

龍璃「あれは夢!?!？」とポケットに入れたガシャットを取り出すと遺跡に入る前にはブランクだったガシャットにキュアゴットが描かれていた。

ゲームのタイトルは

龍璃「プリキュア伝説！」

こうして龍璃達はキュアゴットの力の入ったガシャットを手に入れた。

第4話

英里と龍璃はガシヤットを手に入れ、帰りの電車にゆられ、そして大貝駅についた。英里と龍璃の2人は駅の広場で無数の雑魚バグスターに襲撃を受けた。

スター・O「此方は遺跡探索で疲れているというのに。」

ルリ「本当に空気の読めない連中ね。」

スター・Oがガシヤットを取り出す。

『スーパードボット大戦Z!』

スター・O「今回は、バルゴラで行くぞ。」

『ガシヤコンカーバー!』とガシヤットの装填する場所とABボタンがつくガナリーカーバーがアイコンをタツチしてカーバーを手取る。

手と足の部分がバルゴラ・グロリーSのものにかわる。

ガシヤットをセットする。

スター・O「プリキュアグロリースター・フルバースト!」

と雑魚バグスターは一掃された。

スター・O「随分とあっけなかつたな。」

『ふっふっふ』ともう一人青い髪の青年が出てきた。

スター・O 「お前はジ・エーデル・ベルナル！」

マガエーデル 「私はマガエーデル。よろしく頼むよ、獅子と乙女の力を持つものよ。」

スター・O 「そうか、やはりスパロボのバグスターも存在していたか。」

マガエーデルがレムレースに変化した

スター・O 「レムレースか、モードチェンジだな。」

『スーパードロボット大戦Z！』

スター・O 「実験第3段階！」

『負けな〜いぜ！、負けな〜いぜ！、負けないぜ！、ガーンレオン！』

スター・O 「ヒート・クラッシュシューターレベル3マグナムモード！」

『ガシヤコンライアットジャレンチ！』

ライアットジャレンチを取り

レムレースに攻撃する。

ルリ（強い！、あんなに重そうな武器を軽々と持つてしかも上手く使いこなしている。）

スター・O がガシヤットをジャレンチにセットする。

『決め技！、スパロボ！、クリティカルフィニッシュ！』

スター・O「プリキュアヒート・クラッシュャー！」
とレムレースに当たり

『会心の一発！』

レムレースはマガエーデルに戻る。

マガエーデルは消えかけていた。すると

マガエーデル「やるな、私が死んでもまた私は蘇る。！」

とマガエーデルは消滅した。

何処かのオフィス

？男性「この世界の私としてね。」とそこに居たのはジ・エーデル・ベルナル、この世界の彼だった。

そして場面は英里達に戻る。

英里「さっきの言葉が気がかりだが。しかしゲームの中の話だしな。」

ルリ「やりましたね。英里さん。どうしたんですか？」

英里「やあ、あのキャラは平行世界の自分達と意思疎通をし、平行世界ごと滅ぼそうとしたキャラだ。」

ルリ「へえ、つてことはまた蘇ってくるかもしれないってことかもしれないね。」

英里「怖いことを言わないでくれ、あれはあくまでゲームの中の話だよ。」

再び何処かのオフィス

エーデル「さて、それはどうかな。」とエーデルはパソコンを通して英里達を見ていた。

第5話意外な出会い

英里はプリキュアクロニクルのもとになった。仮面ライダークロニクルの事件の資料をCRに置いてあるパソコンで調べていた。衛生省のサーバーをハッキングしてその資料を読んでいた。

英里「ふうん、壇黎斗は、仮面ライダークロニクルの時、プロトマイティークションXレベル0の力でバグスター化して、コンティニュー能力を得て蘇った、ねえ、という事は、本当に壇黎斗は死んでいるのだろうか。黎乃のオリジンガシャットと同じ能力を有しているのなら

何故、未だに姿を現さないのだろうか。」

？「余計な、詮索は身を滅ぼす事になるぞ。」

英里「あなたは、壇黎斗?!?」

黎人「違う、その名はもう捨てた。生まれ変わったこの私は新壇黎斗だ!。」

英里「それで、新壇黎斗が何のようかね。」

黎人「ゲームマスターの私の許可なく、ガシャットを製造した事に対する制裁を与えに来た。」

英里「知らんな、文句があるなら、つくった別の私に言うんだな。」

黎斗『マイティーアクシオンX!』

『デンジヤラス!ゾンビ!』

ゲームドライバーにガシヤットを装填する。

黎斗「変身!」

仮面ライダーゲムムレベル0、ゾンビゲーマーに変身する。

『ステージセレクト!』とCRの風景は墓場にかわる。

英里「墓場とは、随分貴方に御誂え向きな場所を選んだもんだ。」

英里も変身する。

英里「超力転身!、オルタナティブ!」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ!」

スター・Oもガシヤットを使う。

スター・O『スーパロボット大戦Z!』

スター・O「実験第2段階!」

『ガン、ガン、ガンレオン、ガンレオン!、ガン、ガンレオン、ガンランドクラツシャー

!』

キュアスター・Oヒートクラツシャーゲーマに変身した。

ゲンムとスター・Oの激しい闘いが続く、ガシャコンハンマーをガシャコンスラッシャーに変形させスター・Oに斬りかかり、スター・Oも

チェイン・デ・カッターで受け止める。

キックとパンチ、重なるカウンター、そして

ゲンム『デンジャラス！、クリティカルフィニッシュ！』

『スパロボ！クリティカルフィニッシュ！』

スター・O「プリキュア、ライアットジャレンチ！」

『『会心の一発！』』

と、お互いが必殺技を受けたと同時に変身を解除した。

黎斗「流星だな。私に此処までさせて置いて引き分けとは。」

英里「そちらこそ！、貴方も随分噂と違って丸くなったものね。」

黎斗「娘の手助けをしてやってほしい。同じ科学者として」

英里「ああ、任せてください。必ずプリキュアクロニクルおわしてみせますよ。」と言
うと黎人は笑いいつの間にか消えていた。

第6話放浪者

英里は黎斗との戦いの後、帰って来たカイザー達の手当てをしたあと自分少し、見回りに出ていた。

英里（おかしい、何かがおかしい）先程からみたことのある道をぐるぐる回っている気がする。

？「ふつ、気がついていいるなら、さっさと声をかけるべきではないのかな。」と攻撃をする。

英里「どこだ、てゆうか、隠れていながら、声をかけるとは間抜けな奴だ。」

？「今のが聞こえていたとは中々、鋭い感覚の持ち主のようだな。」

英里「先程から、声だけなんて奇妙な奴だ。さっさと姿を現せ。」

と英里はガシヤットを取り出す。

『スーパードボット大戦Z！』とステージをセレクトする。そこはルーベックシティーをもとにしたステージだった。

英里「超力転身！、オルタナティブ。」

スター・Oに変身する。

「ふつ、ではご招待に預ろう。」とステージのある位置が歪み、黒い霧が発生し、霧が晴れると、そこには

スター・O「アサキム・ドゥーイン！」

マガアサキム「いや、今は第二次スーパーロボット大戦Z!のバグスターマガアサキムと名乗っている。」

スター・O「ふつ、だが此処には君のかつて望んだスフィアはもうないぞ。」

マガアサキム「いや、スフィアはなくとも、スフィアの力を真似た代物はある。君の使っているガシャットだよ、それを僕に渡して貰おうか。」とマガアサキムは彼の愛機、シユロウガへとかわる

スター・O「渡せと言われて、渡すバカがいるか!」

『第二次スーパーロボット大戦Z!』とミレイのガシャットの予備を取り出すそして

スター・O「実験第3段階!」

『揺れる天秤、それは選択!さあ選べ!、それが宿命!』

マガアサキム「まさか、彼の力も使えるとは思っていなかったよ。そうだな、君のガシャットを回収するのはやめた。君は彼と違ってその力をまだ完全に使いきれではない。だがその力で、せいぜい僕を楽しませてくれ!」

スター・OはRAPTORショットを取り出し撃つがマガアサキムは余裕で避ける。

マガアサキム「詰まらないな。彼はこんなものでは、なかったよ。

キュアスター！、僕に今できる最大の攻撃をしろ。取り敢えずは君の攻撃で消滅する
としよう、だがしかし、僕が再び蘇って来た時、そんな体たらくをさらしてみろ、今度
は確実に殺し、ガシヤットを貰う。」

スター・O「プリキュア！ジ・アンブレレイカブル・フルクラム！」

マガアサキム「それでいい、それでいいんだ！」とマガアサキムは浄化の光に吞まれ
消滅した。

スター・O「アサキム、恐ろしい相手だった、私も研究にかまけてばかりではいられ
ないかな。」

第7話再開したいのは英里の同級生はプリキュア！

英里は一人、ヴァーチャルシステムを使い、アサキム、さらにはアサキムの力の源になった敵キャラを相手に模擬戦をしていた。

アイムライアードのアリエティス、ユーザー・インサラームのジ・インサー、アサキムの三連戦、英里は惨敗した。

英里「ぐっ！」バタツ！英里の過度な特訓による披露で倒れてしまった。

英里「ここは、CRの治療室か。」そしてベットの脇をみると、

英里「玲央くん、その顔を見る限り、大分お怒りの様だな。」

玲央「英里さん、僕、今すぐ怒ってます、なんでかわかりますか。」

英里「いやあー、何のことだかわからんなあ。」

玲央「ふざけないでください。」と玲央は脇から何かを取り出す。

英里「そっ！、それは！」

玲央「そうです。サヤさんから譲り受けたハリセンです。」

英里「わかった！、わかったから、私が悪かった！だから、それはしまってください。お願いします。」

玲央「ふんっ！」

英里「いったああああああああああああああああああああ！」

「

玲央「これに懲りたらもう二度と過度な特訓は禁止です。いいですね。」

英里「ちなみに徹夜は？」

玲央「これ以上、僕を怒らせたいんですか。」

英里「わかった。もうやめます！」

その翌日の昼、英里は皆に迷惑をかけたと近くの食べ放題の店で昼食をとっていた。

英里「さあ、今日はどんどん食べてくれたまえ。」

まどか「いいんですか、こんなに」

英里「ああ、昨日は君達に迷惑をかけたからね。今日は私の奢りだ。」

陽奈「前から思ってたんですけど、英里さんの財源はどこから出て来るんですか、世界平和守備機構の給料だけじゃ、ガシャットの制作とか賄いきれない量だと思うんですけど。」

英里「それはあれだ。高校時代、嵌ってた株で儲けてた。たのが未だに使いきれないくらい大量にあってな。預金通帳が五冊くらいはゼロで一杯の額は入っているのだよ。」

葵「さすがというか、何というか、この人のあらゆる無理をしない以外での才能って恐ろしいわね。」

？「んっ、英里！、英里じゃない！、久々だね。」

英里「んっ、おお！、君は恭子くん！、久しぶりいやあーこうして会うのは高校のとき以来か。」

恭子「ああ、そうだな。」

佳子「あの英里さん、その人は一体」

英里「彼女は陣内恭子、学生の頃はレーサー志望でレースチームに入っていた。今は自動車会社でテストドライバーしてる。」

恭子「よろしく！」

一同（英里以外）「よろしくお願いします。」

するといきなり何かのブザーがなる。

恭子「これは！」

英里「まさか！」

と恭子は店を飛び出し、英里も諭吉を5枚テーブルに置いて店を出た。

そして7人も同じく店を出る、するとそこには

英里「貴様だったのか。アイムライアード！、貴様までバクスターになっっているとは

！」

マガアイム「ふくんその様子だと、私を知っているようですが、私の目的は貴女のがシャットです。香川英里。」

英里「ここでもスフィアを狙うか。」

するとアイムはアリエティスに変化し、アリエティスを三体に分身し、本体のアリエティスは消えた。

英里「取り敢えず、こいつらを何とかする。行くぞ、恭子くん！」

恭子「うん、それじゃ、久々に行くよ。」

英里「超力転身！、オルタナティブ！」

恭子「プリキュア！、アクセルチェンジャー！」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ！」

アクセル「戦う交通安全！、激走戦士！キュア！アクセル！」

スター・O「一気に決めるぞ！」とアクセルチェンジャーにメモリスティックをさす。

アクセル「これは」

スター・O「手順通りに！行くぞ！」

スター・O「スター・ライトサンダー！」

アクセル「アクセルサンダー！」

スター・O「プリキュアの疾風怒涛の魂が！」

アクセル「邪悪な心を吹き飛ばす。」

スター・O・アクセル「激走マーブルスクリュー！、フルスピード！」

とアリエティスは爆散し、アィムライアードが出てきた

マガアィム「やりますね、今回は小手調べです、それではさらば！」

とアィムは消えた。

一同「英里さん！あれは一体なんですか。」

変身を解いた英里が答える

英里「彼女は私を入れた5人の仲間の1人、戦う交通安全を自称するキュアアクセル

こと陣内恭子だ。」

恭子「よろしく、後輩ちゃん！」

すると英里が突然声を上げる

英里「思いついた！」

玲央「どうしたんですか。英里さん！」

英里「思いついたんだよ。アサキムや他に出て来るであろうスーパーロボット大戦の

バクスターへの対抗策が！」

恭子「それってまさか」

英里「そうだ。恭子くん、いや恭子あと3人、あいつらを集めるぞ。」

恭子「わかった。英里のやることなら協力するよ。私はあの子を訪ねてみるから、英里はタツミの方を当たってみて」

英里「了解だ。」

第8話 英里の同級生は消防士

ここは大貝町の世界平和守機構所属の消防所である。

ここに英里とまどかはやってきていた。

まどか「英里さん、ここに英里さんの仲間がいるんですか。」

英里「ああ、19の若さで消防隊の隊長に成るんだから、私達の中では1番の出世した奴かな。」

そして消防所の中のある部屋の前につく、部屋の表札には所長室と書かれていた。

コンコン!

? 「どうぞ!」

英里「失礼するよ。」

タツミ「なんだ、いきなり面会の電話が来たから何かと思ったら英里か、どうしたんだ。」

英里「実はな……」

と英里は今回の事件のこと、その解決の為に高校時代の仲間を集めている事を話した。

タツミ「そうか、そんなことが、悪いけど断らせて貰うわ。」

英里「何故だ。」

タツミ「私も協力してあげたいのは山々だけど、プリキュアクルの被害の所為で各地で火災の発生が激増してるの、だから英里達の援護にまで手が回らないの。」

英里「こちらこそ、無理を言って悪かったな。」

タツミ「また何かあったらいつでもいらっしやい。」

とその時『バグスター並びに、近隣に火災発生。』

タツミ「お茶でも出してあげたい所だけど、ごめんね。」

とタツミは下の階へと棒を使って滑り落ちる。

英里「まどか、行くぞ。」

まどか「はい！」

と駐車場に停めてある英里のバイクに乗る、そしてバグスターの出現した現場まで飛ばして行った。

タツミは火災現場の火消しをしていた。

タツミ「まだ、火の手は弱まらないの！」

隊員「隊長、まだ中には女の子が！」

タツミ「なんですって！」

タツミは手にあるキュアブレスをみる。

タツミ「仕方ないわね。各員へ、私は今から単独で救助者を救出する。ここはもうそんなに長くない、全員退避！」

隊員達「了解！」

隊員達がそう言うのとタツミはキュアブレスを起動させ、変身コードを音声入力し、変身コマンドを起動させる。

タツミ「着装！」

タツミにアンチハザードプリキュアスーツが装着されて、タツミを、プリキュアへと変身させる。

そう変身した彼女の名は

レスキュー「キュアレスキュー！」

プリキュアに変身し、火の中へと飛び込んだそして、女の子のいる部屋に辿り着く
レスキュー「誰か、誰かいないの、お願い返事をしてと」後ろから物音がする、どうやらクローゼットの中のようなのだ。

クローゼットが崩れてきた瓦礫に塞がれて開けられなくなっていた。

レスキューは瓦礫を退けて女の子を救出する。

レスキュー「大丈夫？」

女の子「ありがとう、お姉ちゃん。」

レスキュー「それじゃ行くわよ。捕まってるね。」穴の空いた窓から飛び降りるそして変身を解いて隊員達の元に行く。

タツミ「要救助者、確保バイタル確認してちょうだい。」

バグスターが現れる。

タツミ「あなたが今回の原因のバグスターね。」

マガエーデル「マガエーデルだ。」

タツミ「あなたが放った火のせいで人一人がなくなるところだったのよ。人の命は地球の未来なのよ。」

英里「タツミ！」

タツミ「英里！」

英里「事情は見えて理解した。蘇っていたかマガエーデル！、まどか、タツミ、行くぞ！」

タツミ・まどか「ええ！」「はい！」

まどか「プリキュアブレイブコンバイン！」

タツミ「着装！」

英里「超力転身・オルタナティブ！」

エクस्पレス「動輪の勇者戦士、キュアエクस्पレス！」

レスキュー「人の命は地球の未来！」

スター・O「燃えるレスキュー魂！」

スター・O「2人はプリキュア、オッレー！」

第9話謎の忍者は英里の家臣!? ?

名乗りを決めた3人

スター・O 「エキスプレス、これを！」 エクスプレスにガシャットを投げ渡すスター・

O

エキスプレス 「これは！」

スター・O 「それは勇者特急マイトガインガシャットだ。君の動輪のモデルになった勇者の力だ。君なら存分に使いきれはるはずだ。」

エキスプレス 「ありがとうございます。使ってみます。」

『勇者特急！、マイトガイン！』

エキスプレス 「最強駆動！」

『勇者で特急マイトガイン、回せ駆動が尽きるまで、最大全速マイトガイン！』

エキスプレス 「正義の翼に望みを乗せて、灯せ平和の青信号、キュアエキスプレス！
グランドマックス、定刻通りにただいま参上！」

エキスプレス・GM 「これは！すごい力が溢れてくる。」

スター・O 「何とか相性だけで持っていったな。」

エクस्प्रेस・GM「えっ！、そんなに危ないガシャットだったんですか。」

スター・O「うん、相性100パーセントじゃないと確実に暴走する。」

エクस्प्रेस・GM「それを不確実なのに渡したんですか。」

スター・O「君なら出来るとわかっていたからさ。」

エクस्प्रेस・GM「嘘くさいですがまあ、いいでしょう。いきますよ。プリキュアパーフェクトキャノン！」肩の砲塔が開きマガエーデルとその周りのバグスターを焼き払う。

マガエーデルは復活する。

だがしかし、残りの残機が10と書かれていた。

マガエーデル「なんと、さっきの攻撃で残機ごと、焼き払われたというのか。」

スター・O「そうか、貴様の復活の謎は他のバグスターと同様にコンティニュー、しかしそのコンティニューを使い切るごとに、黒のカリスマすなわち、並行世界の自分の姿で残機がリセットされた状態で復活するというわけか。」

マガエーデル「ふん、私の秘密を暴いた褒美だ。今回は引きさがらう。」とマガエーデルはその場から消える。

そしてその場にいたプリキュア3人は変身を解いた。

英里「やあ、ぶつつけ本番でうまくいって良かった。」

スパーンツ！と英里の頭はハリセンによって叩かれた。

英里「痛い！」そして後ろをみるとそこにはハリセンを持って怒りの表情をみせるまどかとタツミでいた。

そして追いかけて回されそして追い詰められる。

すると英里の中で何かが弾けた。英里はポケットのの中にあつた笛を吹くピィ〜ツ！と

するとタツミとまどかのもつハリセンがクナイで手から落とされた。

？「私の主人に手を出す不逞の輩は貴女達ですか。つてタツミ！」

タツミ「メリル！」

メリル「やつと呼んでくれましたね、英里様、ロングタイムノーシー！」

英里「私としてはあまり呼びたくなかったんだがな。」

メリル「何を言いますか、英里様。ノープロブレムすでにそちらの事情は存じております。」

タツミ「メリルも相変わらずね。」

とタツミに連絡が入る

タツミ「はい、はい、つて私がバルカンベースの所属のプリキュア部隊に転勤、このプリキュアクロニクルの解決に当たれですか。」

英里はこの話に聞き耳をたてながらニヤついていた、何故ならこの転換を仕組んだのは英里なのである。

頭の固いタツミを丸め込むために事前に事前に森夏長官に進言し転属命令を出してもらったのだ。

プリキュアの腹黒さナンバーワンを囁かれる英里の黒い笑みだった。

そしてCRにて

タツミ「そういう訳で、纏タツミです。よろしくお願いします。」

メリル「メリル・天海だよっ！、よろしくオネガイシマス！」

一同「よろしくお願いします！」

CRにバグスター発生の連絡が入る、なおバグスターは複数の地域に同時に発生した模様とのこと。

そしてオツレーのメンバー3人も現場に向かっている。

そして現場に到着した3人は並びお互いの変身アイテムを出す。

英里「超力転身！オルタナティブ！」

タツミ「着装！」

メリル「天空！、シノビ変身！」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ！」

レスキュー「人の命は地球の未来、燃えるレスキュー魂は世界を救うキュアレス
キュー」

スカイ「I amニンジャ・オブ・ニンジャ、天空忍者キュアスカイ参上！」

スター・O・レスキュー・スカイ「3人揃って、プリキュアオツレー！」

第10話5人揃ってプリキュアオツレー！

バグスターの撃退を終えた英里、タツミ、メリルは昔と変わらぬコンビネーションを見せつけた3人であった。

英里「忘れていていると思っていたが案外覚えていたもんだな。」

タツミ「ホントね。」

メリル「お互い、ダテに年取ってないネ！」

英里・タツミ「余計なお世話だ（よ）。」とゲンコツをくらわす

メリル「痛いネ！」とメリルは涙目だった。

英里「さて、取り敢えずCRに帰るぞ。」

とCRの医師たちの待機室に戻ると恭子ともう1人女性がいた。

英里「ミナト！」

ミナト「英里、久しぶり、サヤの時からあったのは」

英里「ミナト、それ割と最近だからあんまり久しぶりとは言えないな。」

ミナト「そうか、サヤの葬式にこれたの英里以外、私とメリルだけか。」

他の2人は俯いた。

英里「まあ、気にするな。3人ともこの件が終わったらサヤの墓参りに行こう。」
タツミ「そうだな。」

恭子「必ずだよ。」

そしてCRでミナトの紹介があった。

ミナト「結城ミナトです、よろしく。」

一同「よろしくお願いします。」

そして翌日再びバグスターが大量出現しているらしい。

現場から送られてきた映像には10体以上のアリエティスだった。

英里「あいつだ。マガアトム、みんな行くぞ。」

とCRにいた、メンバーが頷く。

そして現場に到着。

英里「超力転身・オルタナティブ!」

恭子「プリキュアアクセルチェンジャー!」

タツミ「着装!」

メリル「天空シノビ変身!」

ミナト「プリキュアクロスチェンジャー!」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ！」

アクセル「戦う交通安全キュアアクセル！」

レスキュー「人の命は地球の未来、燃えるレスキュー魂、キュアレスキュー！」

スカイ「I am ニンジャ・オブ・ニンジャ、緑の光弾、天空忍者キュアスカイ！」

コンドル「キュアコンドル！」

スター・O「等々揃ったこの5人！」

スター・O・アクセル・レスキュー・スカイ・コンドル

「5人でプリキュアオツレー！」

ブレイブソウル7人「プリキュアブレイブコンバイン！」

カイザー「原初の勇者戦士、キュアカイザー！」

ファイニクス「太陽の勇者戦士、キュアファイニクス！」

アース「地球の勇者戦士、キュアアース！」

エクスプレス「動輪の勇者戦士、キュアエクスプレス！」

ゴルティ「金色の勇者、キュアゴルティ！」

ポリス「警察の勇者戦士、キュアポリス！」

コマンド「特命の勇者戦士、キュアコマンド！」

カイザー「勇気を胸に闇を払う！」

『ブレイブソウルプリキュア!』
スター・O「さあ、戦闘開始だ!

第11話SPP

プリキュアオツレーの5人は倒せば倒すほど分裂する、マガアイムの怪人態アリエテイスの大量に手を焼いていた。

広域の技を使えるものが少ないこのチームではあるが、1人、1人の実力がたかく、大群相手にも連携が取れずとも善戦していた。

コンドル「でええい！」

アクセル「うりやあああ！」

スカイ「セイツ！、ハツ！」

レスキュー「でりやあああ！」

スター・O「フツ！」

アリエテイス「中々やりますね。ならさらにプレゼントです。」と

アリエテイスのオリジナルの周りにさらに数体のアリエテイスとあともう2、3人新たな敵が現れた。

スター・O「なっ！、キュアオルタナティブ！」

コンドル「キュアスターまで！」

スター・O「さっ、サヤ！」

スター? 「英里ちゃん、なんで、英里ちゃんが生き残ってるの?、なんで！」

オルタナティブ? 「ふっ、死ね！」

スターとオルタナティブが切り掛かるが、

スター・Oはスターを切り捨てた。

スター・O「舐めるな、マガアィム貴様がスターの姿をみせることは偽りの黒羊の力だけでは無理だ。この姿を知ることが出来るのは知りたがりの山羊の能力、であれば答えは簡単だ、正体を表せ！」

とオリジナルのアイムに攻撃する、するとアイムの姿が変化した、

スター・O「やはり貴様か、アサキムドゥーイン！」

マガアサキム「ふくん、あの姿で戦っているのを見ていたけど、君も君なりに答えを見つけたようだね。」とアサキムはシュローガに変身、シュローガが姿を変え、シュローガ・シンの姿になる。

スター・O「シュローガ・シン、更にパワーアップしているか。」そのレベルは99オーバーと表示されていた。

レスキュー「レベル99オーバーだと!?」

マガアサキム「さあ、今回は君達5人の力試しだ。」

とアサキムが

手を横に払うするとシュローガが大量に出現する。

シュローガ、一体、一体がアリエティスを上回っていた。

1人を倒すだけでもかなり消耗していた。

スカイ「倒しても、倒してもキリがアリマセン！」

レスキュー「それに、さっきのアリエティスって奴よりかなり強くなってる。」

コンドル「強すぎ、つて、きやあああ！」

スター・O「このままでは、ジリ貧だ、何とかしなくては」

すると光が空から降ってきた。

その光から2人の女性が現れた。

？「エマーージェンシー、プリキュア！」

？「プリキュア、チェンジシグナル！」

マスター「悪がこの世にはびこる限り、私が悪をぶった斬る！、地獄の番犬、キュア

マスター！」

シグナル「プリキュアクロニクルの裏に暗躍する、悪を逮捕するためやってきた本官

の名は、キュアシグナル！」

第12話 2本目の勇者のガシヤット

カイザー「キュアマスターっ！」

マスター「確か君は、チームブレイブの。」

スター・O「何故貴女がここに？」

マスター「妖精界の刑務所に捕まっていた。アリティアという羊妖精が逃げ出したんだ。」

シグナル「我々はそれを追ってここまでの来たのだ。」

マスター「だが、この世界に来て見た奴の姿は力を最大限まで抜き取られて死んでいく姿だった。」

ポリス「その力って一体何だったんですか？」

シグナル「嘘を実現させる力、相手の心や頭の中を知る力だ。」

スター・O「まさか、それって?!？」

シユローガ・シン「ああ、あのアイム・ライアードもどきのことか、彼の力が余りにも私の力に酷似していてね。何かしら強化に繋がらないかと寄生して力を吸い取っていたんだよ。そしたら案の定私の力は増幅されて私は完全体としてこの姿になること

「ができたというわけさ。」

コンドル「何ということだ。」

アクセル「お前それでも人間か！」

シュローガ・シン「人間じゃないね。」

アクセル「ガクッ！、そうだった。」

レスキュー「アクセル！、こんな時にボケない！」

そしてシュローガ・シンが再び、シュローガの大群を召喚する。

その数100体

マスター「ここは私に任せてくれないか。100体か、勘を取り戻すにはちょうどいい数だ。」

マスターはCソード・ベガを抜き封印を解く。

マスターはジャケットを脱ぎシュローガの大群に突っ込み、そして一体、また一体となぎ払っていく。

ポリス「なっ、めっちゃ強い！、速い！」

カイザー「しかもあの動き、超プリキュア大戦の時より、はるかに強い！、マスターさんも成長したってこと！」

ゴルティ「本人の成長もあると思うけど違うね。あの人、あの大会のとき、体に何重

にも重ねてリミッターが掛けられていたんだよ。その証拠にあの人、オルタナティブのジャイアントハザードとの戦いの時以外ジャケツトを脱いでなかった。」

コマンド「んじや、あれか俺たちが本気で戦ってる時に手加減してたってことか。」

シグナル「それは違う！、私達妖精警察のプリキュアは妖精犯罪者の取り締まりにあるだから同じ正義の心を持ったプリキュアと戦うことはあまり認められてはいないんだ、もしそうなった場合にもいくつもの制約が付きまとう。」

コマンド「そうか、そっちにも色々あるのにあれこれ言って悪かったな。」

シグナル「気にするな、こちらムキになって悪かったな。」

そしてそんな事を言ってる間に最後のシュローガをたおし、そしてシュローガ・シンにも攻撃を仕掛ける。

そしてシュローガ・シンはその自身おも上回るスピードに反応出来ずにもろに攻撃を受けてしまった。

シュローガ・シンはマガアサキムに戻る

マガアサキム「やるようだね、ここはひとまず退散と行こう。」

マガアサキムは消えた。

そしてその場にいた全員が安心し、そして変身を解除する。

サヤカとシグナが英里を見た瞬間。

サヤカ「香川英里、プリキュアの殺害の罪で逮捕と」サヤカが罪状を告げシグナが手錠をかける。

玲央「待つてください。英里さんは貴女の知るオルタナティブじゃ、ありません。」
ブレイブソウルのメンバーに、オツレーのメンバーの必死の説得と説明により、英里は何とか釈放されたのだった。

翌日CR

英里「昨日は酷い目にあつた、あむ！」とそんな事を呟きながらケーキを一口

メリル「英里様あーん！」

英里「メリル、自分で食べれる。」

メリル「ガーン!?!?」

英里「メリル、私はガシヤットの調整があるからラボに言ってくる。」

メリル「あつ、私もお供シマース！」

英里「やつ、佳子の事を頼む。」

メリル「了解ネ！」英里が退室した少しあとに

佳子が入ってきた、メリルの買ってきたシャルモンのケーキを食べてお茶を一緒にしている

佳子「それにしても本当に良かったんですか。メリルさん、ご馳走になって。」

メリル「オツケーね！、どうせ皆で食べようと思ってたし、それに英里様の一件のあとサヤカさんに呼び出されてからの佳子の様子が変だったからそれも気になってから」

佳子（あつ、メリルさん、あたしの事心配してくれてたんだ。）

佳子「あの実は……」

と佳子は昨日はあつた事を話す。

回想

サヤカ『佳子くん、実は君に話があるんだが少し良いだろうか。』

佳子『はい、大丈夫ですよ。』

そして2人は喫茶店に入り、プリキュアの話、これまでの事を話をして

サヤカ『それじゃ、本題に入ろう、佳子くんはSPPに来る気はないかな。』

佳子『えっ、あたしがですか!?!』

サヤカ『ああ、君のような人材は本当に稀だ。一部署を預かる者としても私はそれを大きく評価してる。』

佳子『そんな、あたしなんてそれにあたしにはブレイブソウルの皆がいますし』

サヤカ『まあ、君ならそういうと思ったよ。返事はいつでも構わんよ。断つてくれても、ゆつくり考えればいいさ。』とレシートを持ってレジに向かう。

サヤカ『それじゃ』と

・ ・ ・ ・ ・
佳子「つとそういう訳なんです。」

メリル「そういうことデスカ。でもそれは佳子、貴女が一人で抱えていい問題ではないと思いません。」

CRの扉が開いて英里が入ってきた。

メリル「あつ、英里様オカエリナサイ！」

英里「ただいま、おつ、佳子その顔だと憑き物は取れたらしいな。」

佳子「はい！」

そして英里の超力プレスに通信抱えて入る。

英里「はい、こちら香川」

森夏『英里、そちらにモンガーの量産型が何体かそちらに向かっている、君の任務もあるかもしれないがその場にモンガーはプリキュアクロニクルのガシャットを持っているという報告があがってるの、至急そのガシャットの回収もしくは破壊を頼めるかしら』

英里「了解です。」

英里「メリル、佳子、悪いがひとつ走り付き合ってもらおうぞ。」

メリル「オツケーね！」

佳子「はい！」

プリキュアに変身し、現場に向かうと量産型のモンガー軍団がいた。

そしてその手には一つづつ、プリキュアクロニクルのガシャットがに握られていて、そのスイッチを押すするとモンガー軍団がキュアモンガーへと、変化した。

いや正しく言えばキュアプレイヤーモンガーカスタムである。

スター・O「キュアモンガー！」

スター・Oのキュアモンガー達を見る目が明らかに違ったが、

スター・O「ポリス、これを！」とガシャットをポリスに向かって投げ、それをキャッチするポリス

ポリス「勇者警察ジエイデッカー！」以前まどかから聞いた勇者の力のモデルになったら存在のガシャットの話聞いていたポリスはガシャットを起動させる。

『勇者警察！、ジエイデッカー！』

ポリス「緊急通報！」

『レベルアップ！機械と人との絆の物語、警察所属の勇者ロボ！、

ジエイデッカー！』

ポリス「ホールド・アップ、ブレイブソウル、キュアポリスブレイブ！」

第13話新たな敵？、キュアエクスプレス・ブラツクマツクス

ポリスB「これが勇者の力！体の奥底から力が溢れて来る。」

スター・O「ポリス、いいか、その力を無闇にふるつてはいけない。今回は試し乗りということで使わせたがあまり頼り切らないように」

ポリス「わかってます。そんな事！プリキュアファイナルバーニング！」

キュアモンガーはあつという間に一掃されたが、1人討ち漏らしていた。

そしてブレイブモバイルと超力プレスに覇波龍璃誘拐の報告が入った。

ポリスBは変身を解除し、ポリスに戻る。

スター・O「ポリス、君はブレイブソウルと合流するんだ、私はキュアモンガーの生き残りを追う、ちようど報告にあつた場所に偶然か、必然か向かっている事だしな。」

ポリス「わかりました。スター気をつけてくださいね。」

スター・O「ああ、そつちもな。」

とポリスとスター・Oは三丁目の倉庫に迎う

そしてポリスは覇波龍璃の救出に迎い、スター・Oは途中合流した、オツレーのメンバーがモンガーの後を追う。

そしてキュアモンガーが倉庫街の行き止まりに付くと、キュアモンガーの1人とその脇にもう1人見慣れたシルエットのプリキュアがいた

アクセル「エクスプレス?」

レスキュー「なんでエクスプレスが!?」

キュアモンガー「こいつはエクスプレスを完全にコピーして創られたダークプリキュア、キュアエクスプレス・ブラックマックスだ。さあブラックマックスよ、邪魔なプリキュアどもを排除せよ。」だがブラックマックスは従わなかった。

あろうことかキュアモンガーを攻撃した。

キュアモンガー「何故だ。何故我々の言うことを聞かない。」

スター・O「あはははっ!、君はそんな単純なことも気づかないのか、エクスプレスを完全にコピーして創られたのならその正義の心も完全にコピーしてしまったということだ。」

キュアモンガー「何だと!」ガクつうな垂れていた。

アクセル「それじゃ、一気に決めようか。RVソード!」

アクセル「プリキュアRVソード激走斬り！」

キュアモンガー「モンガー！」とアクセルの必殺技によりキュアモンガーは浄化され、クロニクルガシヤットは回収され、そしてブラックマックスも変身が解除され、小学生くらいの綺麗な銀髪の女の子になっていた。

そしてその子をC Rに運び。

ブラックマックスだった女の子を英里が看病をしていると、玲央達と無事に救出された龍璃を伴い帰って来た

英里「お帰り、龍璃くんも随分と久しぶりだね。」

龍璃「はい、お久しぶりです。」

玲央「つてゆうか、英里さん、ベットにいる女の子……」

英里「ああ、実はな。」

玲央「どこからさらって来たんですか！」

英里「その他一同（ガクッ！）」

と誤解を解くために事情を話す。

まどか「私のコピーをつくるとは……一体どうやってつくったのよ！」

玲央「何処かで僕達のデータを取ってたのかも知れないよ。」

銀髪の女の子「あれ、ここどこ？」

英里「すまない、気持ちよく眠っていたところを起こしてしまったか。」

銀髪の女の子「うん、大丈夫だよ、お母さん。」と英里に向かっていう。

英里「うん、お嬢ちゃん、今なんて誰に言ったのか、指をさしてもう一回言つてごらん。」と言い、

銀髪の女の子は即座に英里に向かって指をさして。

銀髪の女の子「お母さん！」

英里「どうして私がお母さんなのかな。」

銀髪の女の子「私のプリキュアの力の元になったデータはお母さんがつくつたの。だからお母さん！」

英里ははてと考え込んでいた。

英里（そう言えば、マイルトガインのガシャットの製作中に試作品でつくつたブラックマイルトガインのガシャットがいつの間にか無くなっていたが、そのデータと一緒にガシャットが盗み出されていたわけか、

つて、これやばくないか、そう言えばこの前に玲央くんに注意されたばっかだ、それにそれ以前の話とはいえ、バレたらまずい。）

そんな事を考えながら、冷や汗をダラダラとかいている英里を見て、玲央は何かに勘づいた。

玲央「どうしたんですか、英里さんもしかして心当たりがあるんですか、もしそうなら今のうち言っておいた方が得策だと思えますけど。」

英里「やあ、知らないな、何のことかな。さっぱりだよ。」

玲央「本当ですか、本当に何も知らないんですか。」

とその時の玲央の目はすわっていた。

そしてその右手には当然の様にいつの間にかハリセンが握られていた。

英里「玲央くん、一体何処からハリセンを取り出したんだい、何でサヤみたいなことができるだ。」

玲央「さあ、何でしょうね」とジリジリと英里ににじり寄る

英里「わかった、わかったから話すからそのハリセンを下げてくれ。」

と涙目になる英里であった。

そしてことの顛末を玲央に話す英里そして

玲央「やつぱり原因は英里さんじゃないですか。それに僕言いましたよね、盗まれたりしない様に気をつけてって」

英里「やあ、でもそれは君に言われる前の話だし」

玲央「問答無用！」とふたたび玲央の手にはハリセンが握られ、そして一気に英里の頭に振り下ろされた。

英里「いったあああああああああ！」と頭を抑え床を転がり回る英里であった。
そしてこんな騒がしいそうどうはあったもののこの銀髪の女の子の名前は舞亜と名
付けられ、英里が養子縁組の母親として登録されたの言うまでもない。

第14話 香川舞亜

CRにて昨日の件があつてからその次の日

英里が昨日の件を報告書に纏める為にパソコンに目を向けて作業をしていると舞亜が入ってきた。

舞亜「お母さん、おはよう！」

英里「おはよう舞亜、そうかもう朝か、よしちよつと遅めかも知れないが朝ごはんにしよう。」

舞亜「うん！」

舞亜を抱っこして食堂に迎うため、CRを出た。

そして病院の廊下でタツミとメリルに出会った。

英里「おはよう2人とも」

タツミ「おはよう、舞亜、英里、英里あなた目の下の隈がひどいわよ。また徹夜したの？」

メリル「舞亜ちゃん、おっはよー！」

舞亜「おはよう！、タツミお姉ちゃん、メリルお姉ちゃん！」

英里「今から朝食を食べに行くところなんだ。2人ともどうだね。」
タツミ「朝食って、もう10時よ。食堂の朝の部は閉まったわよ。」

英里「そうか、なら仕方ない。ちようど今日は舞亜の買い物を済ませようと思ってたところだし、2人とも付き合ってくれると嬉しいのだが」

タツミ「まあ、良いわよ」

メリル「英里様のためなら、火の中海の中ネ！」

と舞亜も入れた4人は、大貝町へと繰り出した。

そして色々と買い込んで、お昼ご飯を食べる為にファミレスに入る。

英里「舞亜、何が良い？」

舞亜「私ね、これが良い！」とメニューを見てさしていたのはお子様ランチだった。

英里（やつぱり舞亜もまだ子供だな。）と思いつながら

自分もメニューを決めてメリル、タツミも料理を頼む。

舞亜「お母さん、これ美味しいよ。」

英里「ほら舞亜、口にケチャップがついてるぞ。」

とハンカチで舞亜の口を拭う。

タツミ「英里ったら、すっかりお母さんね。」

メリル「本当に初めてとは思えません！」

「ゴンツ！、メリルの頭に英里の拳骨が落ちる
英里「余計なお世話だ。」

メリル「オー、英里様痛いデース！」
すると超力ブレスから警報がなる。

英里「メリル、タツミ！」

メリル・タツミ「うん！」

と英里はレジに一万円札を置き店を出るのだがしかし、この時舞亜も一緒について行っていることに気付いていなかった。

現場に到着する。

英里「超力転身・オルタナティブ！」

タツミ「着装！」

メリル「天空シノビ変身！」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ！」

レスキュー「キュアレスキュー！」

スカイ「キュアスカイ！」

従士型バグスターの大量である。

スター・O「試してみるか。」とジェニオンのデータのガシヤットを起動する。

『第3欠スーパーロボット大戦Z!』

スター・O「実験10段階!」

『スフィアの力、禁断の叡智いがみあう双子の力、使いこなすには2つの感情、ファイタージェニオン!』

スター・O「ジェニオン・ファイターゲーマーレベルX」

変身を終わるとやつとのこと追いついた舞亜が出てきた。

舞亜「お母さん!」

スター・O「舞亜?!?、危ないから隠れていなさい。」

舞亜「お母さん、助ける。」

舞亜があるガシヤットを出し手にはブラックブレスが巻かれるそしガシヤットを起動させる。

『黒き勇者特急、ブラックマイトガイン!』

舞亜「プリキュア・グレートダーツシユ!」

舞亜の体をレールと黒い4両連結の列車が走るそしてその列車の各パーツが舞亜に装着されそして肩と腕部と脚部以外に黒いキュアエクスプレスのプリキュアドレスに変わる、

ブラック・マックス「黒い翼にのぞみをのせて、灯せ悪への赤信号、

キュアエクスプレス・ブラック・マックス、……沈黙破ってただいま参上！」

第15話 始まりのラボ

スター・O「ブラックマックス」

ブラックマックス「お母さん、行くよ。」

レスキュー「そういえば、この子プリキュアだったわね。」

スカイ「イエース、私達もすっかり忘れてました。」

ブラックマックス「行くよ、ブラック動輪剣！」

スター・O「取り敢えず、決めるぞ！」

と従士型バグスターに向けて

スター・O「プリキュア超力ライザー！」

レスキュー「プリキュア・ビクトリープロミネンス！」

スカイ「プリキュア地獄の千本ノック！」

ブラックマックス「プリキュア・ブラックマックス動輪剣！」

従士型バグスターの大群は消滅した。

4人は変身を解いた。

英里「やあ、びっくりした。」

タツミ「まさかね、舞亜がついてきていたなんて」

メリル「でも私達も、舞亜のことをすっかり忘れていたわけですし、誰かを責めることなんて」

英里「舞亜、こんなダメな母親ですまないな。」

舞亜「お母さん？」と不思議そうな、顔をしている舞亜を連れて今日はCRへと帰った。

そして次の日、英里は自分を含めたオツレーのメンバーとブレイブソウルのメンバーと舞亜が集結していた。

英里「諸君、よく集まってくれた。今日集まってもらったのには訳があるんだよ。恭子達は覚えていると思うが、マックスエリアCCの封印を解く。」

タツミ「えっ、でもあそこはもう」

恭子「海の底のはずよ。」

英里「大丈夫だ。いくら海に沈んでたって、あれには中から浮上スイッチを押せばなんとかなる。それに私の設計した基地だ、浸水したりだとか、ペしやんこになつてるとかはまずありえない。」

ミナト「それで、どうやってあそこまで行くんだ。」

英里「大丈夫だ、直通のモノレールをモンドさんとあれを製作した時にタツミの実家

に造つてある。」

タツミ「お父さん、また英里と変なもの造つて」

英里「モンドさんとは、タツミのうちに居候していたとき以来だからな。この前連絡を取つてモノレールの整備をしてくれていたそうさ。早速行くぞ。」

と電車を乗り継ぎ、タツミの実家にやってきた。

そして玄関から中には入ると

モンド「やあ、おかえりタツミ、英里くん、そして話は聞いたとるぞ、君達がブレイブソウルプリキュアのメンバーかね、香川くんに聞いていた通りの面構えをしとる。」

玲央「香川司令をご存知なんですか!?!」

モンド「ああ、グランガードの基地を建設する時の設計をしたのはわしだからな。その時に知り合つてたまに飲みに行くなからだ。」

陽奈「流星は防災研究所の所長さんですね。」

モンド「さつ、君達も目的にここに来たんだろ、早速行こうか。」

モンドは地下への階段へ皆を案内しそして一同がモノレールのある階層まで到着する。

モンド「さあ、これに乗り込むんだ。」

と一同はモノレールに乗り、モノレールは発進した。

そしてモノレールは海底トンネルの中を進み目的地に到着する。

そして発着場につき、モノレールから降りる。

英里「ふうーん、思ったより深くに落ちてたな。モノレールのトンネルが結構ずれてたからダメかと思ったぞ。」

タツミ「そうね、あの戦いの時とか、やむなく封鎖して放棄したんだったわね。」

恭子「苦しい戦いだっただ。」

ミナト「まさか、あんなことになるなんてな。」

英里「さあ、辛気臭い話はお終いにしてさつきと封鎖を解いて浮上させてしまおう。」
と英里は舞亜を抱っこして、皆を案内する。

英里「おつとここだ、ここがコントロール室、さつき、開けるぞ。」

タツミ「やつぱり変わってないわね。」

英里「舞亜すこし、おとなしくしてるだぞ。それじゃ封鎖解除のためにこの施設の電源を入れる、恭子、メリル、タツミ、ミナト手伝ってくれ。」

タツミ・恭子・メリル・ミナト「おっけー！」

玲央「あの私達に何か手伝えることは？」

英里「うん、いやこの分野に関しては我々の領分だ、ここを出たところにサヤと私の部屋がある、そこにはサヤの集めたぬいぐるみや何かわからないものと私の思考のコ

レクションがある。いいか、私の部屋のもので遊ぶときは布教用の書かれたものの中から出すんだぞ。」

と玲央達ブレイブソウルのメンバーと舞亜はコントロール室を出てサヤと英里の部屋という部屋で遊んでいると、電気がつき、アナウンサーが入る。

英里『あーあー、聞こえているかな、玲央くんたった今電源を入れなおしてあらかたの封鎖解除と設備の復旧は済んだ端末に私のラボの場所までのナビゲーションを送っておいたから、舞亜と一緒に来てくれ。』

とブレイブモバイルのナビゲーションに従って英里のラボに到着する。

玲央「英里さん、入りますよ。」

英里「玲央くん達よく来てくれたこれからマックスエリアCCを浮上させる。」と英里はスイッチを入れた。

そして英里のラボのスクリーンにマックスエリアの浮上の様子が映し出されていく。そして

英里「よし、完了だ、ようこそ、私の始まりのラボとプリキュアオツレーの秘密基地マックスエリアCCへ！」

第16話予測不能のハザード超えて

マックスエリアCCの封印が解かれた翌日この基地の英里のラボ、そこには英里が持ち込んだ、玲央達ブレイブソウルの強化用のまどかと佳子のぶんを除いた、残りのメンバーのガシヤットが遂に完成したのだ。そしてとうの英里本人は徹夜続きのためか俗に言うナチュラルハイな状態だった。

英里「ああっはっはっ！、私は私の才能が恐ろしい！」

と朝から馬鹿笑いをしているとちやうど英里達と一緒にマックスエリアCCに泊まった。玲央と舞亜が入って来た。

玲央「英里さん、おはようございます、外にまで声が聞こえてましたよ、朝なんですからもう少し静かにしてください。」

舞亜「お母さん、おはよう！」

英里「あ、おはよう、舞亜、それに玲央、等々君達の勇者のガシヤットが完成したのだ。やつとだ。徹夜続きの甲斐があつたつてもんだな。」

そう言い切った英里は、自分で言い切った後に後悔した。

玲央「へエ、英里さん、また徹夜したんですか、あれだけ怒られておいてまだやれ

るなんて流石ですね。」

とハリセンを取り出し、黒いオーラを後ろから放つ玲央が立っていた。

英里「玲央くん、落ち着きたまえ、舞亜もいるんだ、教育状よろしくない！」

玲央「問答無用、天誅！、徹夜してばっかりで倒れまくる母親の方がよっぽどよろしくないですよ。」

スッパアーン！

英里「いったあああ！」

と痛みに耐えかねて床を転げ回る英里だった。

そしてその痛みも終わり、暫くして食堂スペースにて食事をとる一同

英里「ブレイブソウルの諸君、兼ねてより、まどかや佳子達に渡していた勇者シリーズのガシヤットが全て完成した、そしてそれを今から君達に渡す。」そして英里のテーブルにあるスイッチを押すするとテーブルがブレイブソウルのメンバーの前で開きそこからガシヤットが出て来た。

陽奈「これが!?？」

葵「俺達のガシヤット」

玲央「本当に無理すぎです。」

ほむら「やっと私達もパワーアップ出来るんですね。」

と色々な意見が飛び交う中で朝食が終わり、

英里は格納庫にてそこに格納されているマシン達に再び火を入れる準備を終えて一休みしていると

そこに緊急通報がなり、コントロールルームに行くと既に場所が特定されていた。

そして現場の映像が出る。

英里「エルミレニウムか、だがバグスターの反応が出ている。しかも今回は実物大と来たもんだ。仕方がない、今しがた整備が終わったところだが仕方がないかもしれんな。」
皆が入って来た。

玲央「英里さん！」

タツミ「英里！」

英里「ああ、状況は見ての通りだ。タツミ、ミナト、メリル、恭子あれを使うからプリキュアに変身してくれ。」

メリル「了解です！」

ミナト「まさかまたあれを使うことになろう敵が現れるなんてね。」

タツミ「全くよ！」

恭子「さあ、行くわよ」とオツレーのメンバーはプリキュアへと変身した。そしてボックスにある赤いレバーのようなものを手に取る。

スター・O「そうだ、玲央くん、これを」とそれは説明書のようだった。その中身を確認する。

玲央「これは」

スター・O「まあ、詳しくはそれを見てくれ、君達の勇者ガシャットはその説明書の中身の起動キーになる。」

とスター・Oは格納庫の搭乗室に向かい自分の担当する車両に乗る。

スター・O「よし、皆準備は出来たか！」

アクセル・レスキュー・スカイ・コンドル「二「オッケー！」」

スター・O「グランドライナー、発進！」

とマックスエリアCCの各車両の格納庫からそれぞれ線路を走り車両が連結、レインボーブリッジが変形しマックスエリアCCの途切れた線路橋と繋がる。

そして駅を突っ切り、敵の元に到着する。

プリキュア・オツレー「連結合体！」

グランドライナーの車両の連結が解除されそして1つのメカへと変形する。

スター・O「連結完了、グランドライナーロボ！」

第17話動き出した伝説

エルミレニウムとの戦いは最初の方は勢いを見せていたグランドライナーロボだったが、エルミレニウムの力はグランドライナーロボだけで抑えきれような出力のものではなかった。

コクピットに電流が走る。

プリキュアオツレー「うわああ！」

するとコクピットブロックにカイザー達から通信が入る。

カイザー『スター、皆さん聞こえますか、私達も援助に入ります。一旦ライナーに戻ってください。』

スター・O「しかし、今更ベースに戻っている時間はないぞ。」

カイザー『大丈夫です！、だって』

ブレイブソウル『救急マシンの中に皆既に搭乗しているからです！』

スター・O「いや、しかし君達を危険な目に合わせるわけには・・・」

カイザー「スター、私は前に言いましたよね、仲間を頼ってくださいって、だから貴女が仲間を集めるっていつてくれた時本当に嬉しかった。昔の仲間に頼る事が出来る

なら私達も頼ってください、私達も仲間じゃないですか。」

レスキュー「スター？」

スター・O「ライナーモードへと一旦戻すぞ。」

スター以外「うん！」

とエルミレニウムと距離を置き、グランドライナーロボはゴライナーに戻り、

スター・O「救急マシン発進スタンバイ！」

スター・Oのその一言により、ブレイブソウルのメンバーは乗っている救急マシンの操縦席にガシヤットをセットする。

スター・O「発進！」

ブレイブソウル『発進！』

とそれぞれのメカが合体し、カイザー、エクस्प्रेस、アース、ゴルティの乗るビクトリーロボが飛んで飛来したライナーボーイと合体し、マックスビクトリーロボに合体し、フィニクス、ポリスコマンドはビクトリーマーズに搭乗し、ゴライナーは再びグランドライナーロボに戻る。

スター・O「何だか、すごい事になって来たな。」

スター・O「行くぞ！」

全てのマシンを発進させたことで稼働時間に問題の出るグランドライナーロボ、その

ことを考えスター・Oは一気に勝負を決めに行く。

カイザー「マックスノヴァ！」

スター・O「グランドファイヤー！」

フィーニクス「マーズプロミネンス！」

とエルミレニウムは爆発した。

そして各マシンをゴライナーに積み込みマックスライナーに連結しそしてマックスエリアCCに帰るために飛び立とうとした時、突如エルミレニウムの破片が集まり合体しエルミレニウムが再生し、エネルギー弾を放とうとするが、それは空から虹の道を降りてやって来た赤い巨大なライオンがエルミレニウムの攻撃を蹴散らし噛み付く、そして組み合った戦いの後離れるとき何者かの攻撃により敵は真つ二つにその核ごと切断される。

今度こそエルミレニウムは撃破された。

・・・そしてとあるビルの上上に1人の少女が立っていた。

そこに先程の赤いライオンが降り立つ、

そして光を放つとライオンはともグラマラスで美しい女性の姿に変わる。

？「お疲れ様、ランド」と少女はライオンが変化した姿に話しかける。

ランド「八重、いやパラディン、本当に話さなくて良かったのか。」

パラデイン「ええ、大丈夫、いくらあのオルタナティブと同じ顔だからって違いくらい理解してるし私達が表舞台に立つのはまだ早いわ。それに他の2人が咲やラブの所に向かったのなら私もなぎさたちの所に顔を出しに行かないと」言うどビルから飛び降りる

ランドとパラデインは路地裏に降りて人混みの中へと消えていった。

第18話伝説と喜びの御使い

比企谷八重、ホーリーナイトプリキュアのリーダーキュアパラディンである、今日彼女は何百年かぶりに地上に降りて来ていた。

八重「千年か、だいぶ長生きしたわね、と言うかようやく私の知る風景になったってところかな。」

と歩きながら1人ごちる、彼女は今ある場所に向かい歩みを進めていた。

彼女はとあるアパートの一室の前に到着する。

そしてインターホンを押す

ピンポン！

？「はい」

とドアから1人の女性が出て来た、彼女は美墨なぎさ、キュアブラックである。

なぎさ「八重先輩!?」

八重「なぎさ、久しぶりね。」

なぎさ「ぶっちゃけありえない！、なんで八重先輩がここに？」

するともう1人、女性出て来た。

彼女は雪城ほのか、キュアホワイトだ、

ほのか「どうしたのなぎさ、あんまり騒ぐと近所迷惑になるわよ。」

なぎさ「ほのか、八重先輩だよ、八重先輩！」

ほのか「えっ、八重先輩」

八重「ほのかも、久しぶり、2人と会うのは千年ぶりくらいかな。」

と2人とこれまでの話をしながら、八重の中の時間では千年ぶりに3人

で出かけた。

なぎさ達も八重の後に咲達の他にプリキュアの後輩ができたこと、その後輩達と力を合わせて強大な敵と何度も戦い、その度に勝ってきた事を八重と話しながら、カフェのテラス席で話していた。

すると世界は静寂に包まれ何者かの結界がはられ、世界は真っ白になる。

なぎさ「これって!?!?」

ほのか「グランガードから報告のあった」

メップル「なぎさ、何か邪悪なものじゃないけど、とてつもなく嫌な気配を感じるメ

ポ！」

ミップル「ほのか、気をつけるメポ！」

八重「どうやら、この前の奴の親玉みたいね。」

ほのか「先輩は何か心当たりが」

八重「うん、まあ一応ね。」

？「君がこの前の精霊の主人かい？」

といきなり金髪の青年が現れた

八重「ええ、そうよ。ところで私にはあなたが今起きている件の黒幕の1人に見えるのだけど、それに名乗って欲しいのなら、そちらから名乗るべきでは、ミスター、どこか薄ら笑いの感じられるその貴方よ。」

？「これは失礼、僕はアドヴェント、神の御使い、喜びの感情を司っている。」

八重「そう、でもさっさと姿を見せたら」と八重は魔法を時、本来のプリキュアの姿になる。

パラディン「光を司りし聖なる騎士、キュアパラディン！」

なぎさ「ほのか！」

ほのか「ええ！」

なぎさ、ほのか「デュアルオーロラ・ウェーブ！」

と2人は手を繋いで変身する。

ブラック「光の使者、キュアブラック！」

ホワイト「光の使者キュアホワイト！」

ブラック、ホワイト「2人はプリキュア！」

ホワイト「闇の力の僕たちよ！」

ブラック「とつとお家に帰りなさい！」

ここにこの世界の現代に現れたプリキュアの原点とも言える2人、ブラックとホワイトの2人が先輩であるパラデインを救うべく変身した。

パラデイン「ブラック、ホワイト！」

ブラック「先輩、行きましょう！」

パラデイン「ああ。」

アドヴェント「さてこの姿でどこまで戦えるのか、僕は楽しみにさせてもらうよ。」

第19話伝説の力、甦るはもう1人の自分

キュアブラック、ホワイト、パラデインは怪人態にすらならないアドヴェントに有利に立ち回っていた。

アドヴェント「ふうー、やるね。ヘリオースの姿にならなくても、ここまでやられることはあまりないんだがな、今日の所とは様子見だ。

またの機会にさらばだ。」とアドヴェントは消えその代わりに緑のアスクレプスが3体現れる。

パラデイン「ブラック、ホワイト、エクストリームルミナリオを使うわよ。」

ブラック「えっ、でもルミナスが」

パラデイン「大丈夫、あの技はデュークたちとも真似して使ったことあるから、私はルミナスのポジションだけじゃなくて、ブラック、ホワイトのポジションも行けるけどね。」

ホワイト「ブラック、パラデインがこんなにいるんだからやってみましょう。」

ブラック「うん！」

ブラック「あふれる勇氣！」

ホワイト「漲る希望！」

パラディン「光り輝く絆とともに！」

ブラック、ホワイト「エクストリーム！」

パラディン「ルミナリオ！」

とアスクレプスは消滅した。

そしてそれを千里眼を使い、離れた位置から見通すアドヴェント、

アドヴェント「なかなか、油断ならない相手だ。かの至高の神を再び彼の地に呼び出すにはまだ、すこし時間がかかるかもな。」

すると傍らから1人の少女が出てきた。

アドヴェント「ああ、君か私はしばしの間力を蓄えなければいけない、私の代わりに頼んだよ。」

？「了解した。」

とアドヴェントはその場からさり、その少女も姿を消した。

そして場所が変わってマックスエリアCCの英里のラボ

英里はこのエリアを復旧させる際にデータベースに覚えのないデータファイルを解析しているとラボに陽奈が入ってきた。

しかも何か、怪しげな笑みを浮かべて

英里「何か用かね、陽奈くん。」

陽奈「はい、実はですね。」

と陽奈は要件を伝える。

何でも、素直になる薬が欲しいみたいなものを作ってほしいらしい

英里「わかった、作っておくから明日の朝取りに来てくれ。」

(さて、口ではこう言っているが、何をされるかわからんからな。)

陽奈「わかりました、明日ですね。」と翌日、陽奈にたのまれた(英里のトラップ)薬を用意してラボにやって来た陽奈に渡した。

英里(さて、あとは裏にいる玲央がどんな風に仕掛けてくるのかな。楽しみにしているよう。)

と英里はこれから大変なことになるが、それはまた別の機会に

英里が先日見つけた、システムはヴァーチャルシミュレーター形式のゲームだった。

玲央「英里さん！」

英里「玲央くん、ちょうどいいところにゲームは好きかな。」

玲央「えっ!?!」

英里「そうか、好きか」と首筋に手刀をおとされ意識を刈り取られた玲央にヴァーチャルシミュレーションのようなメガネをかけさせ、自分も同じものをかけてゲームスタート

のボタンを押す。

そして再び目を開けるとそこは何処かの研究施設だった。

そして私、香川英里の脇には先程、一緒にきた、玲央がいた。

英里「玲央くん、玲央くん、」

玲央「英里さん、ここは」

英里「うん、いつの間にか、次第にマックスエリアCCのシステム系統をとあるシステムデータファイルに掌握されつつあってね。ここはそのファイルの電脳空間というわけさ。」

玲央「それで何で、僕と英里さんが2人でここに？」

英里「覚えていないか、まあ、いい我々はおそらくデータの最深部である目の前の研究施設のラボに向かう。とりあえず用心の為にプリキュアに変身しよう。」

と2人はプリキュアに変身して研究施設に入り奥へと進んでいく。

カイザー「スター何でそんなに迷うことなく進めるのよ。」

スター・O「ああ、構造自体は、この世界や別の世界線の私のラボと酷似していてね、ある程度道順は把握してるんだ。とここが最深部のラボだ。」

そして2人はラボに入るとそこには、

カイザー「英里さん!?!?」

スター・O「どうやら、その様だ。おい貴様！」

英里？「誰かと思えば貴様か。」と英里？は変身する。

その姿は

カイザー「そんな！」

スター・O「やはりか」

カイザー、スター・O「キュアオルタナティブ」

第20話オルタナティブの目的

カイザー「オルタナティブ！」

スター・O「まったく、あいも変わらずしつこい奴だ。」

オルタナティブ「まあ、落ち着きたまえ、私は確かに君達のしるオルタナティブだが、今は君達に構っている暇はない、帰リたまえ」

スター・O「帰れと言われておいそれと帰れるか！、それでも私かお前は！」

オルタナティブ「まあなんだ、私にも色々とあるのだ。そうだそういえば、黒い勇者特急は気に入つて貰えたかな。」

スター・O「ブラックマイトガインのガシヤットを盗んだのは」

オルタナティブ「そう私だ。ブラックマグマの研究施設は未だに私が使っているのだから、まあせつかくここまでできたんだ、昔話に付き合え。」

スター・O「昔話？」

オルタナティブ「お前達が今、解決しようとしている案件、プリキュアクロニクルだったか。あれはな私の世界でもあつたんだ。」

スター・O「ほう、それで」

オルタナティブ「あれはプリキュアバトルが終わってすぐあとだった。バグスターウイルスだの何だのが流行り、人間はまるで砂山を崩すかのように死んでいった。それでもその世界の人間はそのゲームをやめなかった。だが当然私はこれが気に入らなかつた。私にとってはプリキュアだけが憎むべき敵だった、だがどうだそのゲームが流り世界中の人間はプリキュアの劣化版に成り果てた。そう世界が今度は私の敵になった、私は殺して、殺して殺し尽くした。バグスターも全て焼きはらったよ。だがそれをする頃には私はもう人と呼べるような存在ではなかつた。耳を閉じれば殺したものの達の憎悪の声が聞こえる気がしてならなかつた。とうとう私本来の世界では、私を殺しきれなかつた。気が付けば超プリキュア大戦の世界にいた。」

カイザー「それがプリキュア大戦に参加した経緯だったんですね。」

オルタナティブ「ああ、今度こそプリキュアを全て抹殺して私も死ぬつもりだった。カオスに倒された時には私もサヤのもとにいけると一時は覚悟を決めていたが、呆気なくその覚悟は覆り、キュアスター・オルタナティブ、あんたの体を奪ってまでみつともなく生き残り、この世界のサヤとお前の手によりようやく私も生きることから解放されたと思つた。だが実際はどうだ。あの世の門をくぐる寸前に神の御使をなのる、気色悪い笑みを浮かべた奴が私をあの世から汲み上げやがつた。そして私はそいつのところろに連れていかれ、私の世界のサヤをあの世から汲み上げるための触媒にされた。サヤは

姿は見せないがあいつの手駒として洗脳されている。私は体のバックアップはこの世界中のコンピュータの中に存在している。だから私の体を現実の実態を持つ体に仕上げる必要があった。」

するとオルタナティブは変身を解き、スター・Oとカイザーの前に膝をつき土下座をしたのだ。

英里（オルタナティブ）「頼む！、私と一緒にサヤを取り戻してほしい！、私はどんな迫害だろと辱めだろうと受ける、今まで犯した罪も償うだから・・・だから！」

スター・Oも変身を解き、自分に駆け寄る。

英里「わかった、わかったから、私も同じかもしれない、確かに私とお前は同じ存在だ。だが辿ってきた道は違う、私もサヤが死んだ時はお前と同じ道を辿るのも悪くないなどと思ってしまった。だから、お前のことを攻める資格は私にはない。私も香川英里だ。君の罪でもある、一緒に償っていこう。」と英里は英里（オルタナティブ）を抱き寄せた。

英里（オルタナティブ）（何だろうか、同じ私のはずなのにこんなにも心が温かくなる。これは自分だからか、いや違うなこれはサヤの暖かさだ。これを感じるのはこの世界の私がキュアスターとなったからなのか、それとも私が私に惹かれているのか、そうだと

したらこの世界の私は相当な女たらしだな、なんせ並行世界の自分まで惚れさせるんだからな。）

カイザー（英里さん、ずるいです、あんなこと、私だって抱きしめてもらったことないのに、つて！、私は何を考えてるんですか。英里さんは女の人ですよ！、そのはずなのに何で今の英里さんを見ると心がモヤモヤするのよ!!?）

そして3人は電腦空間を出た。

英里「さて、ラボの話は何とかなったが、私（オルタナティブ）の件はどうしようか。」
英里（オルタナティブ）「そうだな、私は君の双子の妹という立場に甘んじよう。名前はそうだな、香川英里奈とでも呼んでくれ。」

英里奈「よろしく頼むぞ、姉さん！」と英里（オルタナティブ）もとい英里奈は英里の腕に抱きつく。

玲央（英里奈さん、ずるい、僕だって英里さんとあんな風に……つてまた、そうだ昨日、陽奈から没収したあのちよつとの時間だけその人のことが好きでたまらなくなる薬をつかって……つてまた僕は何てこと考えてるんだああ！）

と玲央は自分の中で強くなる、英里への思いと女同士ということにたいする間違っているという考えが頭の中でこんがらがってパニックに陥っていた。

第21話玲央の思い

玲央は先日、陽奈が英里に制作を依頼し、手に入れたところを没収した粉薬を今ラボで作業をしている英里さんのぶんのお茶に入れる。

玲央がこんなことをするのは訳があった。

つい先日、キュアオルタナティブ、香川英里もとい香川英里奈さんが仲間に加わりました、僕達の中には未だに納得していない人がいるようで、それを英里さんはみんなを説得し、何とかことなきを得た。

その時の英里さん、かっこよかったな。

それからというもの、英里さんへの英里奈さんの視線とベタベタしているのを見ているとものすごく、心がモヤモヤしてくるのです。

そのことをバルカンベースの森夏長官やミカド先生、はたまた光や六花などに話を聞いて貰うと、あなたも若いわねとか、それは玲央自身が見つけることよ、などと言われではぐらかされてしまった。

玲央は最終手段としてほのかさんや舞さんを訪ねて挙句の果てには異世界通信まで使いらビリンズにいるセツナさんに話を聞いた結果、この気持ちは恋なんだと改めて実

感させられた。

そしてその気持ちを実感した途端、玲央は壊れた

玲央「ふつふふ、英里さんがいけないんだよ、僕というものがありませんが、他の人にも尻尾を振るんだから」と怪しい目つきをしていた。

以後、玲央は普段皆の前では見せることはないが英里のことを考えて脳内でニヤニヤしている日々は続き、このことが陽奈にしれ危うく戦争になりかけたのはいうまでもない。

そしてお盆に自分のぶんのお茶と英里のぶんのお茶を入れてラボに運ぶ。

玲央「英里さん、僕お茶を入れましたよ。一緒に休憩しよ。」

英里「ん、玲央くんかそう言えば、朝からずつとぶつ続けて作業してたんだつたな。」

玲央「もう英里さん、本当にそんなにぶつ続けてやってたら徹夜してなくても疲労でたおれちゃうよ。」とお茶をテーブルに乗せる。

英里（何かあるな、よしとりあえず湯呑みを取り替えていくか。）

英里「玲央くん、入り口側の戸棚に茶菓子があったはずだ、すまないか出してもらえませんか。」と

玲央「はい、わかりました。」

と玲央がお茶菓子を探しにあらをむいたすきに茶碗をすりかえる。

玲央がどら焼きを持って戻ってきた。

玲央「英里さん、持ってきました。」

英里「うん、ご苦労様、それじゃお茶をいただくとするか。」

と英里と英里がお茶を飲む。

玲央「英里さん！」

英里「どうしたんだね。玲央くん、いきなり」

玲央「英里さん、好きです。ちゅっ！」と英里の唇に自分の唇を重ねていた。

英里「玲央、ちゅっ、くっ、ちゅっ！、ちゅばっ！、あっ」

玲央「英里ちゃん、ちゅばっ！、れるれる、くちゅ、ぐちゅ！」

と玲央は英里の唇を食った。

第22話 英里の想い、善性のスパロボバグスター

玲央と英里のキスは2人の呼吸の限界まで続き、玲央は英里の唇から顔を離す、そして2人の間に銀色の糸が繋がっていた。

玲央「何だか、お茶を飲んだら、英里さんのことがとつても魅力的に見えて、そして何故か、英里さんに……」

英里「そうか、玲央が入れたのは陽奈に渡したはずの惚れ薬か。」

玲央「英里しゃあーん」と腰に抱きついていた。

英里（どうしたものか、どの道効き目はあと五分程度だ、しかしこのままでいるのもなあ、そうだ、確かあの戸棚に解毒剤が）

英里「玲央くん、すまないが戸棚にある薬を取ってくれ。」

玲央「わかりました。」と戸棚にあつた粉薬を英里の前に持ってきていつの間にか出したのか、ライターで燃やしていた。

英里「玲央くん、なんて事を！」

玲央「英里さん、僕は今、嬉しいんですよ。僕英里さんが湯呑みを入れ替えたのを知ってたんです。嬉しいかった、僕に薬を飲ませたことは、僕が好きってことなんです

よね。僕が素直に英里さんへの告白が出来て良かったです。」

英里「やばい、やばい、やばい！、このままでは何故か知らんが確実にやばい陽奈あたりと絶対に揉めることになる！」

英里奈「姉さん、ピークルの整備が終わったぞ……、つて貴様、玲央、私の姉さんに何をしてる！」

すると英里奈のツツコミを受けて玲央は正気に戻った。

玲央「あれ、僕、うわああ、僕はなんて事を！」

と顔を真っ赤にしてラボから出ていった。

英里奈「それで、姉さん一体どうゆう理由であんなになったのか、教えてくれ。」

英里「ああ、それが……」

英里奈「そんなことか、姉さん中々女たらしだな。」

（そういうことか、だがしかしな玲央の姉さんを見る視線は中々に熱のこもったものだったしな。）

英里「何だか、知らんが玲央くんには悪い事をした。ちよつと追いかけてみる。」

そしてマックスエリアCCの屋上で……

玲央「いくら、惚れ薬が入ってたからってあれは、さすがに嫌われちゃったよね。でもこのモヤモヤしてた想いを英里さんにぶつけることが出来たのはよかったかな、陽奈

の気持ちも今なら少しは理解できるかも」といつの間にか、玲央の頬には涙が、

英里「どうしたんだね。そんな浮かない顔をして、君には涙目は似合わないな。」

玲央「でも、僕、あんなことして英里さんに嫌われちゃったかもしれないし」

英里「そんなことはないさ、確かに多少は驚いたが」

玲央「つて英里さん！」

英里「いや、私もすまなかつたな。何かあると思いつい、君には辛い想いをさせてしまった。」

玲央「いえ、そんなこと」

玲央「英里さん、僕、英里さんのこと好きだよ、それだけは本当のことだから、それだけは覚えておいてください。」

英里「ああ、その心意気しかと受け止めた、今ここで君のそのどこまでも純粋な想いに応えるでしょう、星川玲央くん、私も君に少し惹かれていた場面があったのかもしれない、そりや、最初はサヤの面影を重ねているだけだと思っていた。だが私は今日の君の言葉で実感したのかもしれない、私は君のことが好きだ、私と付き合ってはくれないだろうか。」

玲央「英里さん！」と英里にいつの間にか抱きついていた。

それを影から見ている、英里奈

英里奈「おめでとう、姉さん、姉さんはサヤのことを振り切ることが出来たんだな。私もいつかは……」と英里奈の手には二本のガシャットが握られていたそのガシャットにはジャイアントハザード、バッドエンドオルタナティブと書かれていた、その二本のガシャットを壊し海に投げ捨てた。

そしてその次の日、英里と玲央はなんと買い出しの名目でデートに出ていた、そしてその後を影からおう、陽奈、そして陽奈を止めるべく

それに付き添う英里奈

陽奈「英里さんとはいえ許せません、よくも私の玲央を！」

英里奈「まあ、落ち着け、せっかくあんな関係になつたんだ。優しく見守ろう。」

とそんなことを陽奈を抑えつけながらいう英里奈

そしてそんなことを知らずに英里と玲央は歩いているとそこには一人の女性が倒れていた。

英里はその顔を見て驚いた。

何故ならその顔は

英里「セツコ・オハラ」

玲央「英里さん、この人って」

英里「ああ、この女性はセツコ・オハラといってスーパーロボット大戦Zシリーズの

主人公の一人でバルゴラという機体のパイロットだ。」

玲央「ということはこの人も」

英里「恐らくはバグスターだろう、だがこの傷をみるに何かあったな。」

？「ふっふふふ、ようやく見つけたよ。セツコ」

英里「貴様が件のマガバルビエルか」

マガバルビエル「僕を知ってる、そうか、君がキュアスター・オルタナティブか、アサキムのやつから話だけは聞いている、恐ろしいことにスファイア搭載機の力を再現するとは、更にそれは今反乱分子とされてる奴らの力だ。そこにいる、セツコもそうだ。」

英里「ということはランド・トラビスやクロウ・ブルースト、カミシロ・ヒビキもいたということか。」

マガバルビエル「ああ、あいつらか、あいつらならそのセツコを逃す為だけに無駄死にしていったよ。」

英里「貴様、同じゲームの系列のバグスターだろ、バグスターといえど、パラドやグラファイトには仲間意識があった、貴様にはそれが無いのか。」

マガバルビエル「僕の力は怨嗟の磨羯、人を憎めば、憎むだけ力が増していく、それにもとより僕は人を信用していない。」

とマガバルビエルは怪人態アンアーレスになる。

英里「いくぞ、玲央！」

玲央「はい！」

英里「超力転身、オルタナティブ！」

玲央「プリキュアブレイブコンバイン！」

スター・O「キュアスター・オルタナティブ！」

カイザー「原初の勇者戦士キュアカイザー！」

スター・O「カイザー、ブレイブモバイルを貸してくれ」

カイザー「わかりました。」とブレイブモバイルを渡す

スター・OはカイザーのブレイブモバイルにUSBを指す。

スター・O「よし、インストール完了！」

スター・O「オルタナティブサンダー！」

カイザー「ブレイブサンダー！」

スター・O、カイザー「2人のこの手が想いを繋ぐ！、お前を倒せと轟き叫ぶ！プリ

キュア！マールスクリュー！、ブレイバー！」

と2人の攻撃はアンアーレスに直撃し、アンアーレスはマガバルビエルに戻り、撤退した。

第23話奪われた超力、英里新たな変身!

マガバルビエルとスター・O、カイザーとの戦いを近くのビルから見ている1人の少女がいた。

「へえ、あれがこの世界の英里ちゃんか、この世界の私の超力を受け継いだんだね。それなら私が使ったっていいよね。」とその少女はそのビルから姿を消した。

翌日玲央が英里と舞亜の寝室に朝食が出来たと呼びにきていた。

玲央はまだ寝ている2人を見てベットの脇の椅子に座りしばらくの間自分の恋人とその娘を眺めていることにした。

すると舞亜が起きた。

舞亜「ふあーあ、あれ玲央お姉ちゃん、なんでいるの?」と眠そうな顔をして、舞亜は玲央に聞いた。

玲央「おはよう、舞亜ちゃん、ご飯ができたから呼びにきたんだけど、2人とも気持ちよさそうに眠ってたから」

英里「ん、うくん、舞亜おはよう、玲央くんもおはよう毎朝すまないね。」

舞亜「お母さんおはよう!」

玲央「おはようございます。僕は好きでやっつてることなので大丈夫ですよ。」

英里「よし、それじゃあ、朝ごはん食べに行こうか。」

と、3人は食堂に行き朝ごはんを食べ始めた。

玲央「そう言えば今日は、皆さんほとんどいないですね。」

英里「ああ、オツレーの面子は本格的にバルカンベースの所属になるための手続きがあるから私以外の4人は出かけてる。英里奈今日は私のかわりにあるものを仕上げてるから徹夜すると言っていた。」

玲央（はあ、やっぱりどの世界でも英里さんの徹夜癖って治らないんだね。）

玲央「ブレイブソウルのメンバーもクエスト達と訓練をするとかでCRの方に行ったんですよ。」

英里「そうか、玲央くんは行かなくてよかったのか。」

玲央「僕は英里さん達と一緒に行くからって言ったら皆気を使ってくれて陽奈が最後の最後まで自分も残るって言ってたんですけど、結局連れて行かれました。」

英里「そうか、それじゃ、今日は英里奈を起こして4人でCRに行こう。」と3人は朝食を食べ終わり、英里奈をラボから起こして着替えさせて、私達はモノレールにのり、聖都駅に着いた。

駅から出るすると4人の目の前に1人の少女が現れた。

？「久しぶりだね。英里ちゃん、おっと今は英里奈ちゃんか、とこつちの世界の英里ちゃんは初めましてだね。」

英里、英里奈「サヤ！」

玲央「サヤさん!?!」

サヤ？「そう、星野サヤ、そこにいる英里奈ちゃんの世界のが着くけどね。」

英里奈「サヤ、どうしてそうなってしまったんだ。どうして」

サヤ？「英里奈ちゃんこそ、どうしてそんなになまっちよろくなったのかな、少なくとも私が死んだ後の英里奈ちゃんは今の私にとつては尊敬に値する人だったのに、ジャイアントハザードやオルタナエンドの力を捨てた英里奈ちゃんじゃ、絶対私には勝てないよ。」

英里奈「確かに私はオルタナエンドやかつての力を捨てた、だがな私はそれに勝るとも劣らない仲間とのいや、この世界の香川英里、今の私の姉さんとの強いつながりをつくった、だからこそ、私は後悔はしていないし、もう再びあの力を求めることもない。」

サヤ？「そっか、それじゃもう英里奈ちゃんにもうようはないよ、英里ちゃんはこの世界の私から超力を受け継いだんだよね。ならそれ私にちょうだい」とサヤは変身アイ

テムを出す。

サヤ? 「プリキュア、リッポーション!」

ハンニバル 「キュアハンニバル!」

英里 「行くぞ!」

英里奈、玲央、舞亜 「ああ」「はい!」「うん!」

英里 「超力転身・オルタナティブ!」

英里奈 「プリキュアチェンジオブオルタナティブ!」

玲央 「プリキュアブレイブコンバイン!」

舞亜 「プリキュアグレートダツシュー!」

スター・O 「キュアスター・オルタナティブ!」

オルタナティブ 「キュアオルタナティブ!」

カイザー 「最初の勇者戦士、キュアカイザー!」

ブラックマックス 「キュアエクスプレス・ブラックマックス!」

ハンニバル 「変身したところ悪いけど、その超力もらうね。」とハンニバルは魔法陣を描きその魔法陣が光るとスター・Oの身体中から超力は抜かれスター・Oは英里に戻ってしまった。その超力はハンニバルの中に入っていた。

英里「これは何?」

ハンニバル「ふーん、さすが私の超力を受け継いだだけあって私とも相性ばっちりだね。」

カイザー「英里さん!」

ハンニバル「それじゃ、その英里ちゃんにも用事が無くなったから、そろそろお別れかな、この世界の私よろしくね!」

英里「アツハツハツハツハ!」

と攻撃しようとするが英里の高笑いに遮られる

ハンニバル「何がおかしいの」

英里「サヤ、いやキュアハンニバル、私が今でこそ超力を使って変身するがもとはどうやってプリキュアに変身したのか、忘れたのか。そう私は科学の力を使いキュアオルタナティブになった、その私が変身できなくなった時の保険をかけていないとも思っただか。」

すると英里は懐からあるものを出す。

ハンニバル「それは何?」

カイザー「ブレイブモバイル!」

英里「違うな、これはマジンモバイル、私が君達のブレイブモバイルを参考に開発し

たものだ。行くぞ！」

英里「プリキュア!、ファイヤー・オン！」

そして英里の体を光が包み、英里は黒いプリキュアスーツになり髪色は銀髪になり、赤い鳥のような形のカチューシャがつきカチューシャの両端には、後ろには皇帝を思わせる、マント、そしてブイの形になった赤い胸部パーツが装着される。

「偉大なる勇者皇帝、キュアエンペラーG！」

第24話キュアゴット&エンペラー対スファイアバグスタ ター エンペラーの新たな姿

カイザー「キュアエンペラーG」

エンペラーG「カイザー行くぞ。ここに2人の皇帝が揃った、ならあとは勝つだけだ。」

カイザー「はい！」

ハンニバル「ふん、何人王様になったって無駄よ！」

エンペラーG「それはどうかな。」

エンペラーGとカイザーはハンニバルに懐に入り同時に拳を入れる。

カイザー、エンペラー「ダブルカイザーパンチ！」

ハンニバル「がっ！」

エンペラーG「カイザー、力を貸してくれ。」

カイザー「はい！」とカイザーが頷く。

エンペラーGとカイザーの周りに光が落ちた、すると巨大な剣がそこにはあった。

エンペラーG「エンペラーソード！」

カイザー「ファイナルカイザーソード！」

エンペラーG、カイザー「皇帝剣、十文字斬り！」

2人の合体技がハンニバルに炸裂する。

だがしかし煙が晴れるとそこには無傷のハンニバルとその周りには

ガンアールレス、尸逝天、プレアデス・タウラ、ヴィルダークがバリアーをはり、ハンニバルを守ったのだ。

ヴィルダーク「ハンニバル、今のうちに撤退しろ。」

とハンニバルは黙りを決め込んでいたがその言葉を聞くとハンニバルはその場から消えた。

プレアデスタウラ「さあ、ここからは私達が相手をしようか。」

スフィアバグスター達は一齐に攻撃を開始する、その攻撃にカイザー、オルタナティブ、ブラックマックスが攻撃があたり、変身が解除される。

エンペラーG「玲央、舞亜、英里奈！、なんてこった数が違いすぎる。」

ガンアールレス「さあ、邪魔者は消えた、目的はお前のガシャットだ。」

いがみ合う双子、傷だらけの獅子、揺れる天秤、悲しみの乙女の力を宿したガシャットを渡してもらおうか。」

スパロボZのガシャットは善性バグスターセツコが他の善性バグスターから預かっていた力を英里に託して消えていった。

エンペラーG「それは出来ないな。これはセツコが私達に残してくれた。力を渡してなるものか。」

？「その通り、そんな奴らに力を渡す必要はないよ。」

ガンアールス「なんだ貴様は!?？」

？「私が誰かって私は、私の名前は」

デューク「風を司りし、聖なる騎士キュアデューク！」

パラディン「デュークだけじゃないのよ。」

？「その通り」

パラディン「光を司りし、聖なる騎士キュアパラディン！」

グラディウス「百獣を司りし、聖なる騎士キュアグラディウス！」

パラディン、デューク、グラディウス「聖なる騎士の力で闇の中から光を拾う、ホー

リーナイトプリキュア！」

パラディン「行くぞ！」

パラディン、デューク、グラディウス「三神合体！」

ゴット「天空島を守りし聖なる騎士、キュアゴット！」

玲央「キュアゴット！」

ゴット「これだけじゃないわよ。」とゴットから2つの光が現れてそれがプリキュアになる。

ハンターBM「天空島に満ちる蒼き月、キュアハンターブルームーン」

イカロス「焔の鳥神キュアイカロス！」

ゴット、ハンターBM、イカロス「ガーディアンズ・プリキュア！」

ゴット「エンペラー、これを」

と3人、手から光を出すとそれをエンペラーGに投げた。

エンペラーG「これはガシヤット！」しかもそのうち一本は龍璃に渡したはずのプリキュア伝説だった。

エンペラーG「なぜ、プリキュア伝説のガシヤットが」

ゴット「この力があなたのもとに自らきたのよ、つまりこの力があなたを選んだのよ。」

ハンターBM「私達の力を使って」

エンペラーG「よし、やるか」

マジンモバイルのカセット部分にプリキュア伝説のガシヤットを入れる。

エンペラーGのドレスは黄金とキュアゴットを意識した彩色になる。

エンペラー「キュアエンペラー、ゴットエンペラーフォーム！」

第25話ゴットエンペラーの実力ともう1人の玲央、 キュアカイザースカル

キュアゴットから授かった力は凄まじかった。

拳の一撃はヴィルダークの障壁を破り、守りはプレアエデス・タウラの突撃を片手で抑え弾き飛ばす。

そしてエンペラーは右手を上げ、その上にエネルギーを収束させる、

そして黄金の拳が幾重にも出来上がりそれが集まり1つの巨大な右手となる。

エンペラーGE「これぞ、神の一撃、これが究極の一発受けよ、バグスター、いやスファイアリアクター達の哀れな残骸よ！、貫けビックバンパンチ！」

と尸逝天、ガンアールスが、攻撃を受けそして消滅するがその後から出た光を同じくヴィルダーク、プレアエデスが取り込む。

そしてプレアエデスはエルーナルーナに、ヴィルダークはアウストラリウスになる。

エルーナルーナ「これが2個もちになった力か、すごいね、こりや私のオリジナルが味わえなかった力だ。私はオリジナルの到達し得ることの出来ない力を手に入れた。」

ヴィルダーク「ストラウス、今宵は帰るぞ。これ以上は我々も力になれていない以上

は無理はできん。」

エルーナルーナ「あいよ、それじゃ、またね。エンペラー、それに玲央ちゃん！」

そして4人はCRに向かい他のメンバーが集まったところで黒乃から遂に幻夢コーポレーション殴り込み計画が発表された。

なお舞亜は先の戦いで結構な深手を追ってしまいバルカンベースに運ばれ、そしてそこで留守番になった。

そして翌日カイザー達や集まったプリキュア達とともに幻夢コーポレーションに乗り込んだ。

エンペラー、カイザー、オルタナティブはそれぞれの戦いのあとカオス達に合流すべくそれぞれが上の階を目指していたのだが、何故か3人とも一緒にいた仲間とはぐれてしまった。

そしてあたりを見回すとそこは暗黒空間で構築された迷路だった。

3人とも違う場所に1人で立っていた。

そして3人はそれぞれの道を進んで行く。

そしてエンペラーが1番最初に迷路のゴールにたどり着くとそこには

エンペラーG「やれやれ、随分とベリーハードなラスボス戦だな。」

そこにはヴィルダーク、アサキム、エルーナルーナそしてジエーデルがいた。

アサキム「ようこそ、君の終わりへ」

エンペラーG「万事休すか」

そして場面は変わりオルタナティブもようやくゴールにたどり着く

ハンニバル「来たね、オルタナティブ！」

オルタナティブ「ハンニバル、いや、サヤ！、決着をつけようか、私がお前という過去を振り切るために！」

ハンニバル「そう来たか、いいよ、その勝負乗った！」

とオルタナティブとハンニバルの2人だけの最終決戦が幕を開けた。

そしてエンペラーG、オルタナティブが戦いを始めたのと同じ頃カイザーも迷路を抜け、最深部のゴールにたどり着いていた。

カイザー「ここで行き止まりみたいね。一体ここは？」

？「ここは、オルタナティブ、エンペラー、そして君キュアカイザーのために用意された最高の死に場所だよ。その中でもカイザー君は飛びつきりの地獄がお出迎えだ。」

カイザー「あなたは!?」

玲央？「そう、僕、星川玲央、つまり別世界の君だよ。今の君が妬ましいからつい邪魔したくなっちゃったよ。」ともう1人の玲央は変身アイテムブレイブモバイルではなく玲央の世界線に置いて英里がカイザースカルのガシャットともに残した予備のマジ

ンモバイルを取り出す。

カイザースカルのカシヤットをマジンモバイルのカセットに差し込み変身コードをいう。

玲央「プリキュア、カイザーコンバイン！」

カイザーS「私は髑髏の皇帝、キュアカイザースカル、見せてあげる、私が、私こそが地獄だ！」

第26話オルタナティブ対ハンニバル、奇跡のタック復活!

ハンニバルとオルタナティブはお互いが全ての攻撃やその癖を知り尽くしているために、剣で斬り合っても、体術でも中々両者の攻撃は当たらずに激しい攻防が続く。ハンニバル「さすがだね。英里奈ちゃん、いや今は2人だけだし、

英里ちゃんでも、いいか、でもね英里ちゃん、私みたいな天然物と英里ちゃんの人工的なものでは決定的にエネルギーが違うんだよ。前の英里ちゃんならそれをバッドエナジーを集めることでそのパワー不足を解消してた、だけど英里ちゃんはそれを捨てたんだよ。それなら闇の力、ダークプリキュアの力を手に入れた。今、英里ちゃんのオルタナプレスにはUDCシステムが搭載されてないのだから知ってるんだよ。」

オルタナティブ「ふん、サヤ、お前がいくら、そんな力を手にした所で私は捨てた力の代わりに、それよりも確かな仲間を手に入れた、それはサヤを失った前の世界での私では手に入れることのできなかつたものだ。そもそも私の根幹は正義だ、最初はお前に巻き込まれる形だった、それに私はお前が死んだことによつて復習に身をやつすようになった、お前のせいにする気はないがそういう要因もあるというわけだ。」

ハンニバルはオルタナティブに斬りかかるがオルタナティブも剣で止める。

ハンニバル「だけど、プリキュアとしての力なら、私は英里ちゃんを超えたんだよ。自分の力でプリキュアに変身できるようにして、私の方が先にプリキュアになったのだから私より強くて、それでも見捨てないで私を助けてくれた。英里ちゃん大好きだったよ」

オルタナティブ「私も大好きだった、お前がでも、お前は死んだその時から私はお前を理由にしてプリキュアを殺し続けた。だから私はお前が私の悪の心を依り代に召喚された存在だというのなら、私の手で幕を閉じる。」

オルタナティブ「サイエンスが未来を切り開くとき、マーブルスクリューオルタナティブ！」オルタナティブの両手に黒と白の稲妻が渦巻き、1つになりハンニバルに襲いかかる。

ハンニバル「プリキュア超力ライザー！」

ハンニバルも剣に超力をまとわせて斬撃を飛ばす

2人の必殺技は拮抗し、ハンニバルもう一発斬撃今日を飛ばし、オルタナティブは黒と白の稲妻ではなく、虹色の稲妻を拳にまとわせ、攻撃を殴ることで攻撃は強化される。お互いの力は打ち消しあい、オルタナティブは剣でハンニバルに斬りかかり、ハンニバルもそれにあわせるそしてついにオルタナティブの剣はハンニバルを切り裂いた。

ハンニバルは倒れる。

ハンニバルの変身は解かれ、そして邪悪なオーラが消えた。

オルタナティブも変身を解き、サヤを起こした。

英里奈「サヤ……」

サヤ「英里ちゃん、私、英里ちゃんに倒されて本当に眼が覚めたよ。英里ちゃんの心を依り代に召喚された時、私は英里ちゃんの記憶が入ってきたの、辛い思い、させてたよね、ごめんね、えっ……りちゃ……ん」とサヤは瞼をとじサヤの体は超力となり何処かに消えていった。

英里奈はオルタナティブに変身し、闇の晴れた幻夢コーポレーションの社内を進んでいく。

一方その頃、キュアエンペラーはピンチだった。シン・シクロウガにスファイア2つの力を得た、プレアエデス、ヴィルダークの多勢に無勢のこの戦法になんとか、ジ・エーデルは倒したものの他の3人はそれほど甘くなく、あまりの猛攻にエンペラーはフォームチェンジもできない状況にあった。

そして等々、一定ダメージをうけたことによつて変身が解けマジンモバイルも試作段階のものであるためにオーバーヒートを起こしていた。

英里「万事休すか。」と英里は諦めかけたその時、英里の周りに2つの光が降り立つ1つは英里の中に入る、そしてもう1つは人型を形成するとそして光が収まるとそこに1

人の少女が立っていた

英里「あつ！、あいつは!?？」

サヤ「英里ちゃんのピンチに応じて、星野サヤ、今回限りの大復活！、英里ちゃん助けに来たよ。」

英里「サヤ、お前は確かにあの時に」

サヤ「うん、私もあの世で冥界を護る仕事についてただけど、別の世界の冥界からその世界の私の魂が組み上げられて、私達の世界のに召喚されたってらきいて、冥界を護るプリキュアのリーダー、キュアハデス様にこれつきりだけど現世に送り出してくれたの」

英里「サヤ、そうか、そうか」

サヤ「それじゃ、やろうか英里ちゃん！」

英里「ああ！いくぞ！」

サヤ、英里「超力転身！」

スター「星の超力、キュアスター！」

スター・O「代替えの星、キュアスター・オルタナティブ！」

スター「私達の正義は」

スター・O「お前達の悪を！」

スター、スター・O「ぶち抜くぜ！」

第27話カイザー対スカル、現れた至高神

スター・O「さあ、2人が揃ったんだ、こいつを使うか」

スター・Oはガシヤットを取り出すそれには「進化の化身、真ゲッター」と書かれていた。

スター「オルタナティブ！、いくよ。超力合体！」とスターの姿は消えたそしてスター・Oの体に入る。サヤは今、超力の塊であるためにスターとスター・Oは合体する。スター・O「キュアスター・オリジン！」キュアスター・オルタナティブは初代スターとの融合により一時的に強化形態、キュアスター・オリジンへと変身する。

スター・Oはガシヤットを起動させる。

『進化の化身、真ゲッター！』

スター・O「実験最終段階！」

『熱くなれ、夢見た明日を、必ずいつか捕まえる。走りだせ振り向くことなく、お前を変える風になれ！』

スター・Oのスーツに真ゲッターのブーツや手の部分に代わり背中にはゲッターバトルウイング、そして胸部には緑のリボンがつく、

スター・O「スター・O、レベルアップゲームレベル99」

スター・Oは真ゲッターの進化の力は自身をもう1つ上の段階に引き上げた。アサキム、ヴィルダーク、プレアデス、の3人を相手にしてスター・Oの方が押していた。

そして

スター・O「プリキュア、ストナーサンシャイン！」

特大のエネルギー弾が

3人に直撃し、そして爆発する。

そして煙が晴れると

スター・O「おまえは!?？」

一方その頃、カイザーとカイザースカルも激しい戦いを繰り返していたが、スカルの方が戦闘経験は豊富らしく、カイザーの攻撃をかわしたり、カウンターを入れたりしている。

カイザー「はぁぁー！」と剣で斬りかかるが

スカル「甘いわね。」と剣で鍔迫り合いをしていることなど関係ないとばかりに蹴りを入れる。

カイザー「かはあっ！」

スカルは倒れているカイザーを持ち上げ、腹を殴る。

カイザーはその衝撃で壁に激突する。

スカル「まだまだ、甘っちょろいわね。」と

スカル「あなたからブレイブモバイルを取りあげて私が貴方に成り替わるっていうのもありね。こっちの世界の英里さんも可愛いしね。」

カイザー「それを聞いたら尚更負けるわけにはいかなかったわね。」

スカル「いい目をしてるわ。でも今回はここまでか、それじゃ、また戦いましょう。」とカイザーとスカルのいた空間は晴れていてスカルはいなくなっていた。

そして場面は再びスター・Oのいる部屋に戻る。

スター・O「おまえは!?？」

煙が晴れた先にいたのは

アドヴェント「ふっ、ふっふ、君達がキュアスターか。バグスターになっっているとはいえ、この3人を相手によくやったものだね。そこに転がっている奴らは私が再利用してやるでしょう。ふっ、君は知っているかも知れないが再び至高神を再誕させる。」とアドヴェントは

3人を吸収し飛び立つ時、空間は晴れてスター・Oは幻夢コーポレーションのエントランスにいたそして自動ドアからは飛んでいるアドヴェントの姿がガラス越しに視認できた。

スター・Oも追うために外に出る、そして屋上の方から大きな音がする、上を見るとそこには巨大なバグスターウィルスがいた。

スター・O「おお、あれが新黎人社長から聞いていた。ゲムデウスか。だがしかし、アドヴェントをほっておくのもやばいからあつちちは龍璃くんに任せておくとしよう。」とマックスエリアCCCに急ぐが、バイクに乗って、マックスエリアCCCに向かい急ぐがマックスエリアCCCの方角から爆発的な光が走る。

更にスピードをあげて、マックスエリアCCCに到着するが、そこにはもうマックスエリアCCCはなく瓦礫の山となり海に沈んだ姿があつた。

聖アドヴェント「はっはっ！ここには厄介なものが色々とあつたのでね、私の邪魔をされても困るから、先に破壊させてもらったよ。」

聖アドヴェント「さあ、至高神Zの誕生だ。」

と聖アドヴェントは姿が至高神Zへと代わり、そして全長100メートル以上に及び高さになっていた。

スター・O「全く絶対絶命だな。だがなビクトリーロボやそこらだけだと思ふなよ。」とマンホールを剥がしそこにあつたレバーを引く。

すると地面が開き、ブラックマックスビクトリーが出現する。

ブラックマックスビクトリーから通信が入る。

レスキュー「スター、さっさと乗りなさい、この機体あんたも乗らないとパワーを完全に出し切れないんだから！」

スター・O「了解！」とブラックマックスビクトリーに乗り込んだ。

スター・O「さあ、こっちも最終決戦開始だ！」

第28話終幕

ブラックマックスビクトリーと至高神Zの激しいバトルが続く、至高神Zの攻撃の1つ、1つが壊滅的な力をもたらす何とか避けてはいるが、このままではギリ貧になりエネルギーが尽きてしまう。

いくらこのマシーンが5人の精神エネルギーと燃料のハイブリッドであろうともエネルギーには限りがあるのはどれも同じなのだ。

レスキュー「何なのよ、あいつめちやくちや、強いわよ。」

アクセル「こっちは使うつもりはなかった奥の手まで使ったというのに」

スター・O「しかし、決め手に欠けるな。」

スカイ「ノー、ここで迷ってたら負けネ、一気に畳み掛けましょう。」

コンドル「やるしかないのか。」

スター・O「よし、やるだけやってみよう、エネルギー炉を臨界点まで上げろ！」

レスキュー「了解！」

スター・O「臨界点まで上げたエネルギーはすべてブレイバーソードに回せ！機体制御は我々の精神エネルギーだ、的に命中後、すぐに脱出する。」

オツレー「剣よ!、光となれ!、ブレイバーソード!、モードプロミネンス!」

オツレー「ビクトリー!ブレイバー!」

そして至高神乙も負けじと拳をぶつけ、拳にエネルギーを送る。

そしてお互いが拮抗しあう中で、至高神乙がパワーをあげる。

そして次第に押され始めるブラックマックスビクトリー、

スター・O「ダメなのか、いやまだだ。」

スター・Oは自分の超力を最大まで込めるとそしてコクピットの中は白い空間に包まれた。

そこに英里はプリキュアとしての姿ではなく、変身前の姿で立っていた、他のみんなも一緒に

サヤ「英里ちゃん、皆!」

タツミ「サヤ!」

メリル「サヤさん!」

恭子「サヤ!」

ミナト「サヤちゃん!」

英里「サヤ……」

サヤ「英里ちゃん、そんな顔しないで、確かに私に残されたすべての力をこめるつもりでいるけれど」

英里「だが、サヤそんなことをしたら」

サヤ「うん、でも元からこの命はこの戦いが終わるまでだったから

早いか遅いかの違いだよ。」そしてサヤは今度こそお別れだねと呟く。

英里「サヤ、馬鹿を言うな、確かにサヤはいなくなってしまうかも知れない、だがお前の心は意志は思い出は私たちの心の中にある。」

サヤ「そうだね。それじゃ行くよ、6人の力を全て合わせた究極の力を見せてやろう。」

英里、サヤ「超、超力合体！」とすると英里たちとブラックマックスビクトリーはサヤと英里の超力、恭子のクルマジックパワー、タツミのレスキュー魂、メリルの天空の力、ミナトのバードニックウエーブ

が合わさり、今、1人のプリキュアが誕生する。

オルタナティブ「キュアオルタナティブ、天元突破、ここに降臨！」

至高神Zは自分と同じ大きくなったキュアオルタナティブに恐れおののく。

オルタナティブ「プリキュア！ファイナルバーニングブレイク！」

至高神Zはその攻撃を受けて消滅した。

そしてオルタナティブの変身もとけ、5人はもとの姿に戻り、サヤの力はいつの間にかなくなっていた。

こうして5人の戦いは終わりを告げた。

5人は約束していた通り、サヤの墓参りをした。5人だけで思い出の数々をサヤの墓前に話して聞かせた。

そして5人はそれぞれの場所に戻った。

タツミは世界平和守備機構の消防庁に、恭子は車会社から、世界平和守備機構の英里の担当する開発部門が開発する装備などのテストなどを担当している。

メルルは英里の助手となり、バルカンベースの研究室へ

ミナトは親から受け継いだ牧場に戻った。

そして英里は、クロニクル以降、英里の超力は休眠状態に陥り、キュアスターには変身することが出来なくなっていた。

玲央との関係も有効である。

こうして香川英里の戦いは一応幕を閉じたのであった。

そして事件から暫くして英里は新宿のバイオテロを調査すべく、新宿駅に降り立った。

そして新宿駅の英里の死角となる光が反射して鏡となったガラス窓に長い黒髪に茶色のコートを羽織る女性が英里を見つめていた。

暫くするとまるで興味を無くしたかの様に彼女は歩きだし、いつの間にか、その場から消えていた。

この女性が英里を再び、戦いへと導くことになるのをまだこの時、英里は知らなかった。

プリキュアバトル編

復活のプリキュアバトル

香川英里、先日のプリキュアクロニクルにおいて自らの超力が休眠状態に入っていた。

本来であれば、新宿駅で起こったバイオテロの阻止などにも参加しなければいけないのだが、彼女は予備の変身アイテムである、マジンモバイルをまだ修理できていなかった。

ようやく修理が終わり、新宿のバイオテロの調査である。

新宿駅は当然封鎖され、中には関係者以外たち入れないようだ。

そして今回そのバイオテロの解決に、当たったのがグランガードだった為に英里に調査の協力要請が来たのだ。

まあ、戦闘もなければ断る理由もない為、即承諾し、新宿駅の戦闘のあった場所にバグスターウィルスの血痕が残っていないかを探す。

そして半日以上迷宮の別名を持つ新宿駅の調査をした後、とりあえずこの件に関して是有力な何かは得られなかった。

そして駅を出てバイクを停めてある位置まで行くと、そこには1人の女の子がガラス張りの窓から出てくる場面に出くわした。

英里はその光景に覚えがあつた、何故ならそれは自分もかつて親友のサヤと一緒に体験したことだったからだ。

英里「見間違いだな、あれはもう私達がすでに終わらせた、流石に耄碌をするような年ではないか。がっ、一応調べてみるか。」

英里はその少女が出て来た鏡を調べてみることにした。

英里「んー、やはり特に見た所で変わらんか、だがあの世界への扉は資格がある者にしか開かない。かつての参加者のわたしに資格があるのかどうか試してみるか。」と今はすっかり修理が完了したマジンモバイルを取り出す。

英里「プリキュア、ファイヤーオン」

エンペラー「勇者皇帝、キュアエンペラーG」

そして鏡にふれる、するとエンペラーの体は鏡に吸い込まれる。

エンペラー「やはりか、だかしかし、こんな事が出来る奴がいるのだろうか、あいつ以外に」

? 「それはわたしのことか?」

エンペラー「神崎シロナ?!?、何故貴様が」

シロナ「今回は参加者でもないお前を招き入れたのは他でもない、お前が先の戦いでお前が獲得した疾風と烈火の力を返してもらおう。」

エンペラー「あれがお前の手に渡ったらどうなるかわからない訳でもない、貴様の無限のカードあれと私の二枚が合わさってしまえば世界を滅ぼすことだって、私はあれを覚えている数少ない人間の一人だ。だからかし何故お前が今更になってこんな戦いを再び始めた。お前はたった一人の妹を生き返らせる為だけにプリキュアバトルという馬鹿げた戦いをおこした、だがあの3つの力やタイムベントの力を使い何度繰り返し、何度勝者になろうとも彼女はその命を受け取ることができなかった、だからこそ貴様は迷い、私とサヤはお前に勝ち、お前は妹を諦めることができたのではないのか。」

シロナ「確かに私は妹のことはもう諦めている。だからこそ私はすべてをやり直す為に再びこの戦いを起こした。」

エンペラー「そうか、なら尚更私はお前にあの力を渡すことができなくなつたな。」エンペラーは元きた道に戻っていった。

新たな戦士達キュアサージ

キュアエンペラーは戦っていた。

鏡の中の世界ミラーワールドで、何故彼女がそんなことになっているのかと言えば、それは本日のお昼の昼食時にまで遡らなければならない。

今日は世界平和と守備機構の本部での仕事があつた為、弁当をつくり舞亜に持たせ車で舞亜を小学校に送った後、世界平和と守備機構、開発部門の会議やらなにやらだつたが最終的には各支部の開発室の自慢大会になつていた。

マッド揃いの世界平和と守備機構の開発部門において英里はわりとまともな部類だつた、自分で自分はマッドだと自覚していたにもかかわらず、自分より上はいるもんだと、こつそり会議室を抜け出し、中庭にて昼ご飯の弁当を食べようと鞆を漁つてみるが弁当がなく、忘れてきたことに気づき、本日の仕事がそれきりしか予定を入れていなかった為に今日はあとは何もする事が無い為、今日は久しぶりに外食をすることにしたらのだが、久しぶりにハンバーガーを買つて公園で食べて

いると

？「あんたが香川英里だな。烈火と疾風のカードを渡してくんない？」

英里「君は何を言ってるんだ、私はただの「キュアエンペラー」

・・・、戦いの参加者か？」

？「そつ、シロナから聞いたわ。あんた前回の参加者で強化の力を2つとも獲得したやつだつてね。」

英里「そうだな。君だけが私の名前を知っているのはフェアじゃない、すまないが自己紹介を願えるかな、お嬢さん。」

カナデ「高見沢カナデよ。」

カナデは皮肉のつもりだろうが、よろしく先輩といった。

英里「そうか、なら仕方ない、ここでは人の目につく、場所を変えるぞ」と自分が車を停めている、屋内駐車場に移動する。

そして英里はエンペラーに変身し、自分の車の窓ガラスから

カナデ「面白い、戦って手に入れろつてことね。」

面白い、といった表情で、ポケットから変身アイテムを取り出す。

カナデ「プリキュア、チェンジミラージュ！」

とカナデの体に緑のカメレオンをイメージしたプリキュアドレスが装着され髪が緑になる。

ヴェルデ「緑の暗殺者、キュアヴェルデ！」

ヴェルデもミラーワールドに入る。

そして場面は一番最初に戻る。

ヴェルデの戦法はカメレオンの擬態の能力を利用した奇襲戦法だった。

エンペラー「中々だな。まるで忍者のようだ。」

ヴェルデ「ふっ、前回の勝者にそう言われて悪い気はしないわね。」

エンペラー「だが、忍者なら私は貴様よりすごいのをしってるんでね。」とエンペラーは腰についているペイント弾を投げる。

そして緑のヴェルデが表れる。

エンペラー「まだまだ、甘いな後輩君」と英里も心を鬼にして武器をヴェルデに振り下ろす。がそれは何者かに止められる。

エンペラー「何者だ。」

ヴェルデ「出たわね。お邪魔虫」

サージ「お邪魔虫じゃありません。私はキュアサージ、この戦いを止める為に戦っているものです。」

新たなプリキユア達、最も危険な女、占い師とゲーム好きな女達

ヴェルデとの戦いはキユアサージ、諸星セラの介入により、幕を閉じた。

そして英里はセラとともに舞亜の迎えにきていた。

英里「はあー、というか、何故君がついて来とるんだ。」

セラ「そりゃ、カナデちゃんから守るためですよ。」

そんな話をしながら、舞亜の帰りを待っている

舞亜「お母さん、ただいま！」

英里「おかえり、舞亜、こっちのお姉ちゃんはセラだ。」

舞亜「よろしく、セラお姉ちゃん」

セラ「よろしく。」と3人は英里の家へと帰り、3人で夕食を食べて、布団につき寝る、

英里「おかしいだろ！」

セラ「どうしたんですか、英里さん？」

英里「なんで、君が普通に私のうちに泊まる流れになってるんだ。」

セラ「シロナさんから聞いたんです。ここってバトル参加者は駆け込み寺だって」
英里（おのれ、シロナの奴、余計なことを！）

英里「まあいい、明日には帰れ。」

そして英里達が寝静まった夜、一人の少女はビルの上に立ち、笑っていた。

？「楽しいゲームが始まるね。」

そして別の場所では眼帯をつけた少女がヤクルトを飲みながら歩いていた。

？「んー、やっぱりヤクルト最高、戦いと喧嘩以外でゆういつの楽しみをくれる。さあ〜て香川英里って奴は何処にいるのかな、壊しがいがありそうだ。」

そしてまた別の場所

？「ん、誰の知らないが、不吉な運勢だ。」

そして羽田で

？「ここが、新しいゲームの会場か、ゲームマスターの私が楽しければそれでいいけどね。」

そして翌日、香川英里はこのクロニクルの機関やそれ以降のたまった有給を消化するように言われて、今日から2ヶ月はほぼ休みなのだ。

ていうか、英里どんだけ働いてんだ。

そして今日は火曜日で有る。

舞巫を学校に送り、セラと英里は遅い朝食をとる。

そしてセラは帰っていった。

そして英里は街にでかけると英里はある、眼帯の少女と出会う

？「あんたが香川英里か、悪いけど、壊されてくんない？」

英里「なんだいきなり、えつと君の名前は、学校は」

？「私のことはどうでもいいんだよ。」

？は変身アイテムを鏡に向けて、変身する。

ジョーズ「キュアジョーズ！」

そして

？「さて、その勝負、私も混ぜて貰おう。その人、大丈夫、わたしは戦いをとめる
為に戦ってるの。」と？の少女その2も変身する。

ライア「キュアライア！」

ジョーズ「をつ、もう一人ぶつ壊せる奴がきたか、いいぜ、面白い。」とライアとジョーズはミラーワールドに入る。

英里「仕方ない、セラ、私達も彼女達を止めに行こう！」

セラ「はい。」と英里とセラもプリキュアに変身してミラーワールドに入っていくの

だ
っ
た。

ゲームマスターを名乗るもの、キュアライノス

ジョーズとエンペラー、ライアは戦っていた。

エンペラーとライアの攻撃を捌いて、攻撃をしてくるあたりそうとう戦いなれしている。

ジョーズ「やるな先輩！、戦いはこうでなくちや」

エンペラー「やりづらいな。なら」とカードを取り出す。

この戦いに臨むにあたり、変身アイテムやそこらの仕様をプリキュアバトルの時と同じ様にマイナーチェンジを施していた。

それは対プリキュアに特化した装備であり、英里の場合は特化し過ぎている為に出力などはプリキュアクロニクルの時より上なのだ。

そしてカードを取り出し、腕の機械でカードをスラッシュ、

『エンペラーブレード』

その電子音の後に二本の剣、エンペラーブレードが手元に召喚される。

ジョーズとライアもカードを取り出し、

『ジョーズブレード』

『ライアーウィップ』武器を召喚する。

ライアはライアーウィップを使い、ジョーズの武器を絡め取り、エンペラーはジョーズに斬りかかるがジョーズは絡め取っている、鞭を逆に手繰り寄せ、そしてライアを蹴り飛ばし、エンペラーにも、応戦するが、そこで3人の体が、粒子状になっていた。

ジョーズ「今日はこれまでか、また遊ぼうぜ、先輩。」

ジョーズは退散し、ライアとエンペラーもミラーワールドから出る。

そして、2人は自己紹介をした。

英里「香川英里だ。」

手塚「手塚みゆきです。」

そして2人はその場を後にした。

そして、その日のネットの動画サイトには、プレイヤー同士が殺しあい勝者が賞金を手にするといった動画がアップされていた。

そしてそれはバルカンベースや世界平和守備機構でも、その敗者の死体が発見されたことによる捜査が進められた。

だがしかし、何度も捜査してもそのゲームの主権者の情報は入ってこなかった。

そして場所は変わり、大学の寮にて1人の少女、ルル・ランペルージはパソコンをみて微笑んでいた。

ルル「もつとゲームを楽しくしなきゃ。」

そして彼女の机にはサイの顔をかたどったレリーフが掘られたカードの入ったケースが置かれていた。

ルル「その為には」と彼女が机の脇のホワイトボードに貼られた香川英里の写真にナイフを突き刺した。

ルル「邪魔者を排除しなくちゃ。」

とルルはサイの顔のレリーフのついたケースを鏡に向ける、すると彼女はプリキュアへと変身した。

ライノス「キュアライノス」

とライノスは鏡に入り、今宵も自分がプレイヤーとして参加する。

プリキュアバトル、史上最大のゲームの邪魔者を排除する為に

エンペラー対ライノス、ゲイラー、待っていたのは新たな世界への旅立ち

先日の戦いから2日が過ぎ、英里は英里奈の面会に来ていた。

キュアオルタナティブこと香川英里奈はプリキュアクロニクル後自分の罪を償う為、罪を犯したプリキュア達の入る、プリキュア監獄へと入監した。此処から出られるのはいつの日かはわからないが、今日も汗水垂らして、彼女は働いていることだろう。だがしかし、これは嵐山森夏長官の計らいによりいつでもでれたりするのは誰も知らないことであった。

英里奈「やあ、姉さん、こんなところにわざわざすまないね。」

英里「や、それは良いんだが、今日はお前にも今私が巻き込まれている事態についての説明をしておこうと思つてな。……」

と英里はこれまでの経緯を話していく。

英里奈「そうか、まさか本当にプリキュアバトルが再開されていたとは。」

英里「それじゃ」と英里は退室した。

英里奈「此処でうだうだとやってる暇はなさそうだな。」

と森夏長官に連絡する決意をした。

そして監獄からの帰り道、英里は2人の少女と出くわした。

ルル「貴方がこのプリキュアバトルのイレギュラーにして、強化アイテムの所持者ですか、でもゲームバランスを崩すものをゲームマスターである私は認めない、それを私以外が持つことを！」

？「そんなことはどうでもいい、さっさとゲームを始めようぜ。先輩よ。」

ルル「自己紹介がまだでしたわね、私はルル・ランペルージ」

ミコト「そしてわたしは仲代ミコトだ。」

ルル「これで最後になるでしょうがお見知り置きを」

とルルとミコトはそれぞれにエンブレムの入ったカードケースを取り出し、プリキュアに変身する。

ライノス「さあ、いきますわよ。」

ゲイラー「さあ、ゲームの始まりだ。」

2人はミラーワールドに入る。

英里「いくら、私が人気者でもさすがにこれは多すぎないか。」とエンペラーに変身して、ミラーワールドに入る。

そしてエンペラー、ライノス、ゲイラーの闘いが始まる。

エンペラーは巧みな技術により、二対一でめカウンターをいれていく。

エンペラー「よし！」カードを取り出しスラッシュ

『コール、エンペラーブレード！』と

ライノス「甘いですわね」とあるカードをスラッシュする。

『コンファイン！』とエンペラーブレードは消えた。

エンペラー「なにつ！」

ライノス「すごいでしょ！、無力化の力は」

ゲイラー「よそ見している暇は無いぜ。」と羽根ペン型のナイフで切り掛かってくるゲ

イラーをかわして蹴りを入れる。

そして現実世界ではキュアジョーズ、朝倉シンカがこの戦いを見つけていた。

シンカ「面白そうだな、私も混ぜてよ。」とジョーズに変身してミラーワールドに入る。

そしてミラーワールドで闘っているエンペラー達の元にジョーズ参戦、

エンペラー「貴様は!?？」

ジョーズ「ここね、祭りの場所は、私も混ぜてよ。」

ジョーズがカードで剣を呼び出すが

『コンファイン』

ライノス「無効化は一枚だけじゃ無いってことですわね。」

ジョーズ「ふつ、武器があるか無いかなんて関係ないわ。」と、ライノスを蹴り飛ばす
ゲイラー「面白い、乱入車って奴か」とゲイラーもジョーズに斬りかかる。

エンペラー「はあ、あんまりごちゃごちゃしたのは好きじゃない。」とエンペラーは
カードを取り出すそこには牛の紋章が入っていた。

エンペラー「北岡すまないが、お前のくれた、たった一回の力、借りるぞ。」とカード
をスラツシユする。

『ファイナル、エンド・オブ・ワールド！』と音声が流れて地面から巨大なまるでミノタ
ウロスを模したような銃火器やミサイルを搭載した Monster マシンが召喚され
エンペラーと一緒に召喚された銃をセツトする。

エンペラー「さらば！」と引き金を引く、そして3人に容赦のない火の雨が降り注ぐ。
そして煙が晴れたそこにはジョーズ、ゲイラーの盾にされたライノスが立っていた。
そして2人に突き飛ばされる。

ライノス「なつ、あなた達、なんで、ゲームマスターである私を」

ジョーズ、ゲイラー『側にいた、お前が悪い！』

ライノスは2人の息のあった、言葉と同時攻撃により消滅した。

そして3人の身体が粒子になって溶け出した。

ジョーズ「今日はここまでか、それじゃまたね。」

ゲイラー「そんなjana」とジョーズゲイラーは元の世界に帰り、英里もそのあと元の世界に帰った。

そしてその翌日、アメリカで起こったプリキュアクロニクルエックスの事件が片づいてブレイブソウルのメンバーが帰国するというので今日は未だに有給を消化しきれておらず、しかも舞亜も夏休みに入り、家にいるため、2人で空港に迎えに行くことになった。

そして2人は大型のワゴンに乗って空港に向かい、空港のゲートの近くで昼食を済ませてお茶をしていると、玲央達の姿が見えた。

英里「おおい、玲央！」

玲央「えつ、英里さん！、仕事はどうしたんですか。」

英里「なに、心配するな、働きすぎて舞亜の夏休みの期間中は休みをもらえているのだ。」

玲央「英里さん、どれだけ働いたらそんな風になるんですか。」

英里「まあ、それは置いて、皆を送っていきましょう。」

ブレイブソウル「よろしくお願ひします。」としかし、さいかいした7人と英里と舞亜

の2人、合計9人を巻き込む大事件にこのあとすぐ巻き込まれることをまだ知るものはいない

勇者の世界を回る旅、冥王ゆかりん編

世界

玲央達を乗せた英里の車が高速道路を走らながらアメリカでのプリキュアクロニクルXの時の話を聞いていた。

英里「そうか、ブレイブソウルの10人目の仲間か」

玲央「はい、英里さん、なんか懐かしそうな顔ですね。」

英里「ああ、メリルが仲間になった時のことを少し思い出したただけだ。」

玲央「メリルさんですか？」

英里「ああ、彼女は代々忍者の家系なのはプリキュアクロニクルの時に知っていたと思うんだが、彼女の家は代々傭兵のような家業を営んでいてね、初めてあった時は敵方の戦士だった。そのあといざこざがあつてあいつは始末されたと思われていた、あいつは度々、姿を変えキュアスカイに変身して私達の前に現れた、その時戦っていた相手の1つ、冥界忍者軍団の首領にしてメリルの父親との戦いだった。メリルはそれに勝ち、

父親は死んだその後、メリルは仲間になり、いつの間にか、私と主従の契約を交わす羽目になったと昔話はそれくらいだ。」

玲央「そんなことがあつたんですね。」

英里「まあ、それ以上にやばい奴がその後出てきたりしたんだが、昔話はまだ今度してあげよう。」

と久しぶりの恋人同士の会話に花を咲かせる2人、そしてそれを後ろで見せられている7人というところ

まどか「うへえー、甘い、甘すぎる！」

かなみ「おかしいな、車に乗る前に買った飲み物ブラックコーヒーなのにすごく甘い！」

葵「うえー」

舞亜「お母さん？」

と英里達の甘すぎて糖尿にでもなりそうな会話を聞いて悶えていた。

英里は車を運転していると車の前に1人の女性があらわれた。

英里「なっ！」 英里はすぐさまハンドルをきる。

そして英里達が車から降りると

？「久しいな、キュアオルタナティブ、いや今はエンペラーか」

英里「バカな、何故貴様が、ここにいる、田村ゆ〇り」

？「ちげーよ！、何、中の人のネタぶつ混んでんだ、つーかこの小説今まで声優ネタだのなんだのは使ったことなかっただろうが」

英里「すまん、すまん、改めて何故お前がここにいる、高町な〇は」

？「だからちげえーつってだろうが、だから中のひと関連でメタイ発言してんじゃねえよ！、もういい忘れたってんなら思い出させてやるよ、私はかつてプリキュアオツレーの6人を敗北寸前にまで追い込んだ黒幕にして死後の世界を司る2人の女神の1柱、冥王ゆかりんだ！」

英里「いや、思い出したけど、結局田村ゆか〇じゃないのか」

ゆかりん「だからちげえーつーの！」とゆかりん手にオーラを集中させて手を横に払うとブレイブソウルの7人から勇者のガシヤットと英里のマジンエンペラーのガシヤットが

宙に浮き、ガシヤットの中から光が飛び出した。

ゆかりん「まあ、取り敢えず今日はこの力が目的だったわけだし、ひいてやるが今度あつたらタダじゃおかねえぞ。」

とゆかりんはまるで透明のカーテンのようなものに包まれて消えた。

英里「うん、なんだか嫌な予感がする誰か勇者形態になれ」

まどか「じゃ、あたしが」とガシヤットを押すと

まどか「あれ、あれ、起動しない？」

英里「おそらく、先程あれでガシヤットの中に内包されている、力が全て抜かれたからだろ。しかしどうしたものかあのガシヤット無くしてあいつに勝てる手段は」

英里奈「いや、1つだけ力を取り戻す方法があるぞ、姉さん」

英里「英里奈、何故ここに」

英里奈「今はそんなことを言ってる場合じゃない、姉さん達のかつての敵の復活に冥界の女神のもう1人、キュアハデス様がお貸しくださるそうだ。」と英里奈が指を鳴らすと空中に投影モニターに1人の女性が映る。

ハデス「やあ、あなたが香川英里ちゃんかい、私はキュアハデス、冥界の神の1人だ、君たちにはゆかりんに、対抗する為に勇者の力を再び手に入れる必要があるそうだね、そこでだ、香川英里くん、香川舞亜くんとブレイブソウルプリキュアを入れた合計9名に勇者の世界を周り、勇者の力の意味、そして決して消えることのない不滅の勇気を学んできてほしい、君らがその旅を終えた時、ゆかりんを倒す力をもう手に入れていこうとに気がつくはずだ。」とそして一同は透明のカーテンに包まれ、その場を移動した。

英里「ここは？」

英里奈「おそらく、ハデス様が用意した異世界移動用の拠点だろう、さて姉さん、ここからは姉さん達の仕事だ、プリキュアバトルやこっちの世界のことは私がなんとかしておく、なるべく早く力を取り戻して戻ってくるんだぞ。」と英里にあるものを渡す。

英里「これは超力ブレス」

英里奈「スターには変身出来ないかもしれないがオルタナティブゼロには変身出来るように調整しておいた、それとハデスになんか知らないプログラムを書き込まれたみたいだから、その扱いには注意しろよ。」と英里奈は家を出た。

そして家を見てみると

玲央「まんま、デイケイドの写真館！」

佳子「これ東〇に怒られませんかね。」

玲央「まあ、それじゃ、取り敢えずどうやって世界を移動するのか一番心当たりあるもので試して見ましょう」と背景の絵を降ろす玲央

すると絵が降りてきてそこにはある勇者が描かれていた

英里、玲央「・・・エクスカイザー」

と部屋は光に包まれたのであった。

エクスカイザーの世界

世界の移動に成功した、香川母娘とブレイブソウルプリキュアの7人は1番最初に来た勇者の世界はエクスカイザーと呼ばれる勇者の世界で玲央の勇者の力のモデルが存在する世界である。

玲央「ここがエクスカイザーの世界なんですネ。」

英里「ああ、星川コウタという小学校3年生の少年が宇宙海賊ガイスターを追って地球にやって来た宇宙警察カイザーズの機械生命体のリーダーエクスカイザーと出合いガイスターと戦い、ガイスターとの戦いではガイスターのリーダー、ダイノガイストを除いて敵味方共に死者を出すことなく世界を救った少年のいる世界だ。」

陽奈「ねえ、玲央ちゃん、1つ聞いていい？」

玲央「うん」

陽奈「星川コウタって、確か・・・」

玲央「僕の父さんの名前だ。」

英里「そうか、玲央の勇者の力は並行世界の君の父親であるということか、とりあえ

ずこの世界について少し詳しく調べてみよう。」

英里は部屋にあるパソコンを使いカタカタとキーボードを鳴らし、必要な情報をハックキングしていく。

英里「どうやらこの世界はガイスターの戦いから2年後の世界のようだ。」

玲央「とりあえず、外に出てみませんか。」

英里と玲央の2人は外に出る。

すると2人の制服は変わる。

英里「これは!?!」

玲央「やっぱり」

英里「玲央、やっぱりとは?」

玲央「はい、この写真館を使って旅をしていた世界の破壊者ディケイドも別の世界に移動するたびに服装が変わり、その世界での役割を与えられていたそうなんです。」

英里「なるほど、この格好から察するに私の役割はどうやら教育実習生の大学生のようだ。」

玲央「僕は職場見学の中学生みたいです。」

そして一同は英里の教育実習先の小学校に来ていた。

英里「ここか」

玲央「行きましようか。英里さん」

英里「ああ」と校内に入り、職員室で挨拶をすませて全校集会での紹介と挨拶が終わり、英里と玲央は5年1組の教室についた。

そして英里と玲央は理科の授業を担当していた。

教科書の内容を坦々と子供たちにも分かりやすいように噛み砕いて説明しながら授業をこなしなんとか授業を全て消化して放課後、放課後の校庭ではサッカークラブの子達がボールを追いかけていた、その中には星川コウタの姿もあった。

英里「ああして見ていると、地球を救ったなんて思えないくらい無邪気な顔をしているな。」と微笑まじさを感じながら玲央の待つ車へと向かう。

すると爆音があたり一帯に響き渡る。

英里「なんだ！」

と玲央が走って来た。

玲央「英里さん！」

英里「玲央、いったい、何が起こってるんだ。」

玲央「これです！」と車に取り付けていた持ち運び可能なテレビをみせる。
テレビに映っていたのはブラキオザウルスだった。

英里「これは？」

玲央「地中に眠っていたガイスター最後の生き残りです。最終兵器だそうですね。」

英里「玲央、車に乗れ、急ぐぞ！」

玲央「はいっ！」

英里と玲央を乗せた車はブラキオガイストの元に向かう

そしてガイスターと戦い、地球を救った星川コウタ少年も爆音を聞き、クラブを抜けて市街地に来ていた。

コウタ「あれが、地球に眠ってた最後のガイスター」

コウタは右腕のカイザーブレスをみる。

コウタ（そうだ、もうエクスカイザーたちはいないんだ。いったいどうしたら）

徳田「おおい、コウタくん」

コウタ「徳田さん！」

徳田「コウタくん、ここは危険だ。避難するんだ。」

コウタ「でもガイスターが」

徳田「しかし、エクスカイザーのいない今の状況では」

徳田がブラキオガイストを見上げるとそこには

徳田「なんだあれは」

徳田が見た光景は、キュアオルタナティブ・ゼロとキュアカイザーがガイスター相手に戦いを挑んでいた。

徳田「なんだ、あの子達は」

そして視点はキュアオルタナティブとキュアカイザーへと移る。

オルタ「硬い、刃が通らない。」

カイザー「それに浄化技を撃とうにも相手が早すぎて、エネルギーをためる時間を作れない。」

オルタ「こう言う時はこれだ。」とオルタナティブ・ゼロは2つのガシャットを取り出してカイザーの体に刺す。

カイザー「これは!?？」

オルタ「エネルギーチャージ用のガシャットだ。余り予備がないんだ。一気に決めるぞ。」と自分にもガシャットをさしてエネルギーを補給する。

そしてオルタナティブ・ゼロはカードを取り出し、腕のリーダーにカードをスラッシュ、

『マーブルスクリュー、versionブレイブ』

オルタナティブ・ゼロとカイザーの手に稲妻が宿る。

オルタ「オルタナティブサンダー！」

カイザー「ブレイブサンダー！」

オルタ・カイザー「プリキュアマーブルスクリュー、ブレイブ！」

と2人の攻撃は直撃する、そして煙がはれると

傷を負いながらもその傷は修復を始めていた。

オルタ「なんと！」

そしてブラキオガイスターの上に魔法陣が現れる。そしてオルタと同じくらいの年齢の女性があらわれた。

オルタ「何者だ？」

？「私が何者かだって、私の名はグライス・エーカー、冥王ゆかりん様親衛隊に所属しているものである。そしてまたの名を！」

とグライスは羽織っていたマントを取り去るとそこにはグライスエーカーとしての彼女の姿はなく、そこにいたのは1人のプリキュアだった。

スサノオ「キュアスサノオだ！、さあブラキオガイストよ。この世界を破壊し、冥王ゆかりん様の全並行世界の征服の手助けをするのだ。」

と今まで無秩序に暴れていたブラキオガイストは東京の京浜工業地帯へと向かっていた。

それを追いかけるながら、スサノオに対してオルタは問いをぶつける。

オルタ「まさか、貴様の狙いは石油タンクだな。」

スサノオ「その通り、このブラキオガイストの火力は凄まじいそれを石油タンクの密集した場所で全火力をぶつけたらどうなると思う。」

カイザー「そんなこと、させない」とカイザーはスサノオに斬りかかるが

スサノオ「甘いわ!」とカイザー吹っ飛ばされる。

オルタ「カイザー!」とカイザーの飛ばされた位置に向かうオルタ、

そして視点は再び星川コウタに移る。

そしてブラキオガイストを追っている。徳田とコウタ、

コウタ「この先にいったい何が」

徳田「いかん、この先は京浜工業地帯の石油プラントだ。あんなのに暴れられたら、最悪そこら一帯が吹っ飛んじゃまう。なんとか先回りしてどうにかする方法を考えないと」

コウタ「なんとか、しないと」するといつの間にかブラキオガイストがちょうど真上あたりに来ていたのを2人は気づいていなかった。

そしてそれに気付いたコウタは

コウタ「徳田さん、曲がって!」

徳田もコウタの言葉で気づき車を急カーブさせた。

だがしかし、ついた先は行き止まりだった。

今度こそ、踏み潰されてしまうのかと、2人は目を瞑る。コウタはその時、カイザーブレスが輝いた。

そしていつまでたっても痛みの来ないことを怪しんだ2人かめをあげると2人は見覚えのあるコクピットにいた。

エクスカイザー「コウタ、待たせたな。」

コウタ「エクスカイザー！」

エクスカイザー「地球にガイスターの反応がキャッチされてな、急いで地球にやって来たんだ。そしてコウタの家の車に取り憑いていたら時間がないから、徳田さんの車に取り憑かせてもらった。」

コウタ「エクスカイザー」

エクスカイザー「コウタ」

エクスカイザー「行くぞ、コウタ」

コウタ「うん！」再び出会ったエクスカイザーとコウタ、この2人が揃い、1番最初の伝説が復活した時だった。

発現英里の新たな力、エクスカイザーとの共闘

エクスカイザーが再び地球に降臨したところをオルタナティブ・ゼロも先程の攻撃で意識を失ってしまい、変身が解けてしまった玲央を背負いながら見ていた。

オルタ「あれが、原初の勇者か」

そしてエクスカイザー達が戦っているのを見ていると目の前にスサノオが降りて来た。

スサノオ「その小娘も哀れなものだ。何を抱え込んでいたのかは知らないが、独断専行とは、かつて君に仲間に頼ることの大切さを教えたのが彼女であったことなど、まるで嘘のようだ。」

オルタ「確かに、だが彼女は私以上に辛い戦いを続けている、現在存在しているプリキュアの中での特長と言える、キュアカオスと並ぶ実力を持つものとされ、周りからの期待の眼差しはさぞかし強かろう

彼女は私が考えるよりはるかに、重いものを背負って生きている。間違いをおかすことだってあるだろう。」

スサノオ「ずいぶんと詳しいんだな、彼女について」

オルタ「それぐらい知ってなきや、彼女を恋人にするぐらいの想いは出来ないだろうさ。さあ玲央、起きるんだ。さつきから狸寝入りをこいているのは、私もその彼女もとつくの昔にバレてるぞ。」

玲央「知ってたなら最初から声をかけてください。」と玲央はプリキュアに変身する。カイザー「さあ、反撃開始と行きませうか。」

オルタ「ふっ、それでこそだな。」とするとオルタの前に3枚のカードが出現した。

そこにはエクスカイザーとキュアカイザー関連のカードだった。

オルタはキュアカイザーのカードを手に取り他のカードは消えてしまった。そしてオルタの腰にはカードケースの様なものが追加された。

オルタはキュアカイザーのカードをスラッシュする。

『チエンジ、キュアカイザー！』という音声がなりカードの形をしたエネルギーフィールドがオルタの体を通り過ぎるとそこには変身者やグローブ部分やブーツがオルタナティブのものになっている以外はキュアカイザーと全く同じ姿のプリキュアがいた。

カイザー・O「原初の勇者の代替え品キュアカイザー・オルタナティブ」

これこそが、キュアハデスが組み込んだ、ブレイブソウルプリキュアとそれぞれの勇気の意味と真の絆を育んだプリキュアに変身、そのプリキュアの強化などの力を使える、システムブレイブソウルである。

カイザー・Oは解放されたシステムの説明文を読んで上の文を説明した。

カイザー「そうなんですか、それでも英里さんと同じ姿なんて少し恥ずかしい様な嬉しいような。」

カイザー・O「まあ、それは置いて行くぞ」とカイザー・Oはカイザーブレードを取り出す。

カイザーもカイザーブレードを取り出してスサノオに攻撃するがその時、スサノオの体が一瞬紅い粒子に包まれたように見えたそして気がつくときスサノオは離れた位置に移動していた。

スサノオ「ほんの一瞬とはいえ、奥の手を使わせた君たちを今は、誉めたたえよう。私はいこれで失礼する、戦場でまた会おう。」とスサノオは消えてしまった。

カイザー・Oは元のキュアオルタナティブ・ゼロに戻る。

カイザー「あつ、元に戻るんですね。」

オルタ「まあ、当然といえば当然だな。それより、もうわかったただろ君が無くした勇気がなんなのか、それは本当に君が一番知ってる事なんだよ。」

カイザー「はい、私もようやく私の勇者の力の意味、失っていた勇気がなんなのか、そう、仲間を信じ仲間を頼るのもまた勇氣、ブレイブソウルのリーダーである私が一番忘れちゃいけない事だったのに」とその言葉のあとカイザーの持っていたあるガシャット

が光り始める。

そのガシヤットのタイトルは

カイザー「勇者エクスカイザー！」

オルタ「今なら行けるかもしれん、カイザー！、ガシヤットを起動させて変身スロツトにセツトしろ。」

カイザー「はい！」カイザーはガシヤットを押す。

『勇者エクスカイザー！』

カイザー「最終継承！」

『初代勇者エクスカイザー、誰にも一つ、自分だけの宝物があるはずさ！』

カイザーB「フォームアップ、キュアカイザーブレイブ！」

その頃、エクスカイザーとコウタはブラキオガイストのその巨大さに手を焼いていた。

コウタ「あいつ、でかい上にはやい！」

カイザーB「エクスカイザーさん！」

エクスカイザー『きみは？』

カイザーB「キュアカイザーです。それより」

オルタ「コウタくん、我々とエクスカイザーで何とかあのデカブツを上空に跳ね上げてみるのんだぞ。！」

コウタ「何で僕の名前知ってって、その声、英里先生！」

オルタ「おつ、教育実習のそれも今日一回授業した先生の名前を覚えてるなんて嬉しいよ。行くぞ！」

エクスカイザー「ああ、よろしく頼むよ。」とエクスカイザー、キュアカイザー、キュアオルタナティブ・ゼロがそれぞれの足を止める。

オルタ「行くぞ、せーの」

カイザー、エクスカイザー、コウタ「せーの！」

ブラキオガイストが持ち上がり、3人はそれを思いつき蹴り上げる。

そしてオルタナティブがアルカードをスラッシュする。

オルタ「カイザー、きみもこの展開、この言葉には聞き覚えがあると思うがそういう事だ、気にするなよ。ちよつとくすぐつたいぞ。」

とカイザーの背中に手を入れて開くするとカイザーの体に変形とかそういうのではなく、巨大なカイザーソードに変身したのだ。

これぞ、武器形態ソードカイザーである。

オルタ「エクスカイザー、フィニッシュは合わせていくぞ！」

エクスカイザー「オッケー！」

エクスカイザーもカイザーソードを出す。

オルタナティブ、エクスカイザー「ダブル真空桜吹雪！」と2人の必殺技は合わさりそれはとても巨大な桜吹雪吹雪となり上空でブラキオガイストの体を貫き爆発したのだ。

そしてそれを遠くから見つめる1人の少女、彼女の名はキュアロスト、忘却を司るプリキュアである。

ロスト「ブラキオガイスト、やられた。」とロストは右手をあげるとブラキオガイストの残っていた破片やらチリやらがロストに吸収されていく。

ロスト「……よし」とロストは消えてしまった。

そしてエクスカイザーとコウタ、英里と玲央達、

エクスカイザー「そうか、君達はそんな旅をしていたのか。」

英里「ああ、そしてこの世界の歪みが修正され、そして我々の目的も果たした以上我々はこの世界を去る。他の皆は忘れてしまうかもしれないが、コウタ君、我々と絆を繋いだ君だけは覚えていてくれるはずだ。」

コウタ「うん、英里先生の授業はわかりやかかったよ。」

エクスカイザー「コウタ、すまないな、私ももう行かねばならない。」とエネルギー状

態のエクスカイザーもいう。

コウタ「先生、玲央さん、エクスカイザー、またね。」

英里「ああ、またいつか。」

玲央「またね！」

というとき3人はその場を後にした。

そして車で写真館に戻る。

英里、玲央「ただいま！」

英里、玲央以外「おかえりなさい！」

まどか「どうでした。」

英里「ああ、何とかこの世界の歪みはもどりそして無事に玲央は不滅の勇気を手に入れることができた。」

そして皆で夕食を食べてこの世界であつたことを話して聞かせていた後

英里「さてと風呂でも入ってくるかな。」歩くとつまずいて背景を変える紐を引っ張ってしまふ。するとその背景が光絵が変わる。

まどか「これは」

英里「勇者特急マイトガイン」

英里

マイトガインの世界、まどかと旋風寺舞人

英里「ここが、マイトガインの世界か」

まどか「ここが、私の勇者の力の世界か」

英里がこの旅に出て二度目のハッキングをしている。

英里「マイトガインの世界、2次元世界と3次元世界の戦争から世界をすくい、そして旋風寺舞人と吉永サリーの結婚式から5年後の世界か」

英里「まどか、旋風寺舞人と吉永サリーというのは」

まどか「はい、私の父さんと母さんです。」

英里「前の世界からの反省点をあげるとすれば、この世界でもこの世界の力と同質のものを持っているものと私がこの家を出入り出来るわけだ。」

陽奈「なるほど、どうりでエクスカイザーの世界で私達は家から出られなかったわけね。」

英里「それじゃ、今回はまどかと舞亜だな。」

舞亜「うん！」

まどか「はい、行きましょう。」

とまどか、舞亜、英里は写真館を後にする。

すると英里とまどかの服装が変わる。

英里「これは、……研究員か、だいぶ着慣れた格好だな。」

まどか「私は清掃員ですか。」

舞亜「私、何も変わってない」

舞亜はつまらなそうに頬を膨らませる。

英里「とりあえずこの世界の旋風寺コンツェルンの社屋に向かおう。」とそこからやはり英里の車に乗り、旋風寺コンツェルンの社屋に到着した。そして英里とまどか、舞亜は旋風寺コンツェルンの社長室に通された何でもこの会社ではバイト、正社員関係なく入社直後、初日の勤務時に社長との顔合わせがあるという。

舞人「やあ、君が今日から我が社の研究室で働く香川くんと清掃員のバイトで来てくれた香川まどか君だね。」と舞人はまどかの顔を見て何か首を傾げていた。

まどか「あたしの顔に何かついてますか。」

舞人「いや、すまない君の顔を見てると何故か初めてあつたような気がしないんだ。いや別に下心のある意味で言ったわけではないんだ。僕にも妻と3歳になる娘がいてね。娘もまどかつて言うんだ。」

まどか（つて、それつて）

英里（恐らくは平行世界の同一人物と見るべきなんだろうな）

と英里とまどかが全く同じことを考えていると

舞人「ところで香川くん、そこにいるお嬢さんは」

英里「失礼、この子は娘の舞亜です。今日越して来たばかりでしてここには託児所があると聞いていたので申し訳ありません。」

舞人「いや、いいんだ、託児所といつても僕の妻が子育てと仕事を両立させたい母親の代わりに面倒を見ているだけなんだ。ちなみにもあまり、預ける人がいなくてね、今はうちの娘しかいないんだ。舞亜ちゃんにはうちの娘と一緒に遊んで貰おうかな。」

舞亜「はぁーい！」と英里達の仕事が始まった。

英里は初めてと言うことでデータ管理を任されたのだが、正直いつてその内容に感動していた。

その中でも超AIの技術はとて目を見張るものがあった。

英里（素晴らしい、これほどのものが）すると時間は過ぎてもう昼時になっていた。舞亜のいる部屋へと向かう。

英里「失礼します。」

サリー「そこまでかしまらなくて大丈夫よ。」

英里「すいません。あつ、私はこの度旋風寺コンツェルンの研究室に勤務することに

なりました。香川英里といます。」

サリー「私は旋風寺サリー、そっかあなたが舞亜ちゃんのお母さんね。そのわりに歳は私と変わらないのよね。」

と母親トークが始まるがそれを少し早く切り上げてまどかかと合流して昼食をとる。

まどか「ああ、つかれた。」

英里「やはり、普段から戦闘が本職の君達には少し辛かったかな。」

まどか「いえ、確かに疲れましたが、英里さんは書類や開発などで普段から戦闘に積極的に参加しているわけではないのに強さは未だに衰え知らずですね。」

英里「私はまだ20歳だからな、そんなに簡単には衰えてなるものか。」

すると昼休みも終わりという時間に超力プレスに警報がなる。

英里「まどか、舞亜行くぞ！」

まどか「はい！」

舞亜「うん！」

と3人は玄関に急いで向かう。

そしてちょうどそこに舞人とすれ違ふときそこで一番後ろを歩いていたまどかが財布を落とした。

舞人「おい、まどかくん、財布が落ちたぞ、つといてしまったか、とりあえず受付にでも預けておくか。」と財布を拾うと財布から一枚の証明写真そこには防衛組織グランガード所属、旋風寺まどかと書かれていた。

舞人「これは一体、そして彼女はまどかくんは何者なんだ。」

まどかと舞人、親子の絆が起こした奇跡

ブレスの緊急警報を聞き、英里、まどか、舞亜はその地点にやって来ていた。

英里「ここが、警報が示した地点は」

舞亜「誰もいないね。」

まどか「でも確かにここに反応があるのよね。」

？「貴女がキュアオルタナティブね。」

英里「何者だ！」

英里達はプリキュアに変身する。

？「キュアロスト」

オルタ「キュアロスト、だとお前はたしかキュアエピソードによって倒された筈だ。」

エクスブレス「オルタナティブは知ってるんですか。」

オルタ「ああ、正しく言えばキュアロストは初代キュアエピソードの成れの果てでな。

2代目のキュアエピソード、私の中学時代の先輩がプリキュアに変身する力を失うほど力を使い果たした末に倒したプリキュアなんだ。」

エクスプレス「そんな、それじゃ、そんな恐ろしい存在が蘇ったと」
オルタ「考えたくはないがな。」

ロスト「今日は遊んでる暇ない」とロストは消えた。

3人は旋風寺コンツェルンに戻って来た。

すると玄関には舞人とサリーがいた。

舞人「やあ、帰って来たね。早速で悪いんだがこれを説明してもらえるかな。」

舞人が取り出したのはまどかの財布とグランガードのライセンスだった。

まどか「ライセンスと私の財布!?？」

舞人「あまり、レディーのものを勝手に漁るなんて真似はしたくなかったんだが、偶然これを君が財布と一緒に落としていつてね。」

サリー「香川さん、説明してくれるわよね。」

まどか「英里さん」

英里「仕方があるまい、いいでしょう。やぶさかではあります但し事情を説明いたします。」と英里の説明タイムが始まった。

サリー「そんなことが」

舞人「平行世界とはいえ、自分の娘が悪と戦っているなんてことを聞くことになるな

んて」

サリー「それでも、まさか私達が出会った時と同じくらいの時の年齢の自分の娘に会えるなんて思わなかったわ。」

舞人「まあ、それでも君とは出会えてよかったと思う、まどか。」

英里「問題はいかにして不滅の勇気を手に入れるかだ。」

舞人「不滅かどうかは知らないがまどか、自分の勇気は常に自分の心の中にある、本当はもう知っていて思いがけない時に初めて自分の勇気を知るんじゃないかな。」

そして場所は変わり、旋風寺コンツェルンの工廠の近くの留置所、ここには將軍ミフネがここにはいた。

今日も1日の労働を終えて一息ついていたそこにキュアロストが現れミフネはロストに襲われ、ロストが持つて来ていた舞人に敗れたもの達の怨念の塊を体に入れてしまった。するとどうだろう、真冬の体からは闇のオーラが溢れた、彼の目からは正気が失われていたという。

そして留置所全体に警報になる。

そして英里達は舞人達の自宅に案内され、夕食をご馳走になっていた。

そして今日は泊まっていく予定になっていた。

そしてその翌日も何事もなく、英里達がこの世界に来て3日目の昼事件は起きた。英

里達はすでに現場へ、舞人は事情を聞くため、浜田の元にいた。

舞人「浜田君、一体何が起こったんだ。」

浜田「うん、実は3日前に脱獄したミフネがメンテナンスであちらにおいてあるマイトカイザーを強奪して街で暴れているんだ。」

舞人「なんだって、ダイバーズやボンバーズは！」

浜田「実は何者かによってハッキングを受けていてダイバーズやボンバーズの格納庫が開かないんだ。何とかサイバー攻撃で守れたのはガインとロコモライザーとマイトウイングだけだ。」

舞人「それだけあれば充分だ、ガイン、聞こてるな、久しぶりに勇者特急隊出動だ。」

ガイン『了解だ、舞人、勇者特急久しぶりの復活だな。』

舞人はマイトウイングに乗りガインとロコモライザーは連結状態で現場に向かう、一方その頃ミフネの乗るマイトカイザーを相手に奮闘する、オルタナティブ、エクस्प्रेस、ブラックマックスの3人

オルタ「強い、本来の乗りてではないと言うのにこれほどの力が」

エクस्प्रेस「それに3人がかりでも勝てないんですよ。」

ブラックマックス「何か、聞こえない」

オルタ「これは汽笛の音だ。」

エクスプレス「あっ、あれ」

オルタナティブ「なんだあれは、SLの化け物」

舞人『待たせたな、まどか、英里くん、舞垂ちゃん』

オルタ「社長！」

エクスプレス「舞人さん」

舞人『言つたらまどか、自分の世界に帰ることのできない君にせめて平行世界の存在であろうと親の顔をさせてくれ』

エクスプレス「お父さん」

舞人『いくぞ、ガイン』

ガイン「ああ、舞人」

舞人『レッツマイトガアイン！』

マイトウイング、ガイン、ロコモライザーが合体していく。

そしてここに5年ぶりに伝説の勇者が復活した。

オルタ「あれが、マイトガインなのか」

舞人「そう、その通り！」

マイトガイン『銀の翼をのぞみを乗せて灯せ平和の青信号、

勇者特急マイトガイン、定刻通り、ただいま到着！』

エクспレス「これが私の勇者の力の・・・」

舞人「まどか、俺とマイトガインでこいつを押さえておく、その隙にマイトカイザーからミフネを降ろすんだ。」

エクспレス「わかった。」

マイトガインはマイトカイザーを押さえる。

マイトガイン「マイトカイザー、今助けてやるからな。」

エクспレスはブレイブモバイルに送られたデータにあるコクピットの強制開閉装置を起動させる。

そしてミフネをコクピットから叩き出す。そしてマイトガインはマイトカイザーに膝を突かせた状態にした。マイトガインから舞人が降りてくる。

舞人「まどか」

エクспレス「お父さん」

するとミフネはまだ動けたそしてまどかに襲いかかろうと隠し持っていたナイフを構え、そして振り下ろした。

舞人「まどか、危ない！」と舞人はまどかを庇い肩をナイフで切りつけられた。

エクспレス「お父さん！」

舞人「大丈夫だ、これくらい」と言おうした時、ミフネに取り付いていた怨念が今度は舞人に取り憑いたのだ。

舞人は怨念によつて意識が完全に飲まれる前にまどかにダイヤグラマーを渡す。

舞人「これはお前が俺の後を継いで勇者特急隊になりたいと言われた時のために開発したダイヤグラマーIIだ。これを使つて俺を解放してくれ。」と手に付けられる。

そして舞人の意識が闇に飲まれ、舞人はマイトカイザーに乗り、マイトカイザーは再び街を破壊する兵器と成り果てた。

マイトガイン「まどか」

エクस्पレス「マイトガイン、力を貸して」

マイトガイン「任せろ！」とエクस्पレスはマイトガインに搭乗した。

再びマイトガイン対マイトカイザーの戦いが幕を開ける。

エクस्पレスの操縦は平行世界とはいえ、舞人譲りの天才的な操縦テクニクを使い対抗してはいるが、やはりそこは旋風寺舞人、闇に飲まれていようと操縦テクニクや戦術眼は衰えておらず、エクस्पレスとマイトガインは押されていた。

エクस्पレス「このままじゃ、やられる」

マイトガイン「諦めるな、諦めずに歩みよれば、必ず心を開いてくれるかつての舞人とジョーがそうであつたように」

エクस्प्रेस「ジョーって雷張ジョーさん」

マイトガイン「知ってるのか」

エクस्प्रेस「うん、私のお父さんの友達でよくお父さんとお母さんが授業参観とか来れない時はあの人の方が代わりに来てくれてたんだ。私の初恋の人だったけど、あの子の結婚式に呼ばれてからはもうそれっきりになっちゃったかな。」

マイトガイン「まどか、それは間違っている、いくら初恋の人だからと失恋したからといって顔を合わせづらいからといって合わないのか、君は親と喧嘩をしたとしてどうやって仲直りする。誰かが歩み寄り勇氣を出さなくてはいけないんだ。」

エクस्प्रेस「どちらかが歩み寄らなければ、仲直りも何も生まれない、自分から歩みよっていかなければ、自分も周りも変えていけない、なんでこんな簡単なこと忘れてたんだろ。」とするとエクस्प्रेसの持つマイトガインのガシヤットが光、宙を飛び、ダイヤグラマーイーに合体する。

エクस्प्रेस「これならいけるかも」とマイトガインから降りるエクस्प्रेस

マイトガイン「まどか!」

エクस्प्रेस「マイトガインは少しでいいから時間を稼いで」

マイトガイン「わかった。」とマイトガインはマイトカイザーを押しさえる。

エクस्प्रेस「お願い、これきりでもいいからお父さんを救う力を」

ダイヤグラマーIIが光を放つとエクस्प्रेसはダイヤグラマーIIの合体ボタンを押す。

エクस्प्रेस「プリキュア、ブレイブエポリキュオン！」

『エポリキュオン、キュアエクस्प्रेस！』とエクस्प्रेसにマイトカイザーのパーツが所々に装飾として追加される。

エクस्प्रेसGM「銀の翼にのぞみを乗せて、灯せない平和の青信号キュアエクस्प्रेसグランドマックス、定刻通りただいま参上！」

エクस्प्रेसGM「プリキュアパーフェクトキャノン！」と浄化の光が発射されマイトカイザーを包み舞人に取り憑いた怨念が飛び出し、怨念が黒い化け物となる。

マイトカイザーに乗る舞人は意識を取り戻し、そしてモニターに映る現状を把握した。

舞人「ガイン、あれをやるぞ！」

マイトガイン「いいのか、舞人その体で」

舞人「構わない、娘のピンチを救ってやれなくて何が父親だ、今の俺は通りを蹴っ飛ばして無理を通すぐらいのことは出来るつもりだ。」

マイトガイン「舞人……、わかったやるぞ！」

舞人「レッツマアアイト、ガアアイン」

マイトガイン「グレートダツシユ！」
マイトカイザーとマイトガインが合体して、グレートマイトガインとなる。
舞人、まどか「さあ、反撃開始だ！」

ROAD TO RURIの別世界は皆チグハグの世界 の香川英里編

ROAD TO RURI編

覇波龍璃がこの皆のポジションがチグハグした世界にやって来てキュアドラゴンに変身した時を同じくこの世界線の香川英里は自分の住む山の麓の家で薬の調合をしていた。

すると遠くからプリキュアの気配を感じたわ

英里「ん、この世界で新たにプリキュアが誕生したか。」

そんな気配を感じていると戸口から現在面倒を見ている弟子の1人、

響鬼明日香が入って来た。

明日香「先生、薪割り終わりました。

英里「そうか、ご苦労、さっ、それじゃ、あいつが帰って来たら久々に組手をしようか。」

明日香「本当ですか、久しぶりに先生にご指導いただけるんですね。」

そう言えばさっき何処かでプリキュアが誕生する時の爆大なエネルギーの流れを感じたのですが、先生、何か心あたりございますか。」

英里「ああ、大方予想通り、どおやら、この世界に新しいプリキュアが誕生した様だ、それにさっきの気配には覚えがある。カルージャ坊の奴、久しぶりにパートナーと巡り会えたようじゃな。」

明日香「カルージャって、あのキュアカオスのカルージャですか。」

英里「ああ」

明日香「先生だけですよ、伝説級の妖精や精霊にタメ口で話したりあだ名で呼んだらするのは」

英里「だって高々、200年くらい前の伝説になった妖精達だろ、私はそいつらのこの世に産まれ落ちた時から知つとるからの、私がお前達と同じ頃、私の師匠に修行を付けて貰う反面、産まれてきた妖精の育て親をさせられておった、カルージャ坊もその時の1人なんだがの」

明日香「へえ、それじゃ先生は初代のキュアカオスにお会いになったことがあるんですか。」

英里「ああ、確かあれはグライス、お前もわかる様に言えばキュアサノオをプリキュアにしたあとあたりの頃だった、ちょうど私も役目を終えてこの山に帰ってくるとそこ

にはカルージャ坊と当時のキュアカオスの変身者が家の前に立つておった。そいつらは帰つて来たばかりの私になんて言ったと思う、プリキュアとしての私をもっと強くしろなんて言つとつた最初はそいつ力に呑み込まれておつての、自分の力は何の為にあるか、よく考えてからまた来いとその時は追い返してやつた。それからあいつは考え抜き、自分の力の意味を知つた。私は特に何も教えることはなかった、プリキュアの力の本質に気付くことの出来たあいつは本当に強かつた。新たな十二闘志の迎え入れてもいいくらいにな。しかしその時にはすでに十二闘志の変身アイテムをそれに選ばれたものが来るまで保管する役割を得ていた私ですら知らなかった消された13人目の闘志の星座の力にあいつは取り憑かれてしまった、私としてもその存在を知らなかったばかりに本質に気付いていながらも力を求めていた心を当時のキュアカオスはその星座のプリキュアの暗黒の意思と力に呑まれそして敵は倒したものの、そいつは暴走し、その時はグライスと共にそいつを倒したがそれがいけなかった。そいつの体はすでにその星座の邪悪な力に蝕まれて体はポロポロ、意識を呼び覚ますための私の攻撃が最終的にはとどめをさしてしまった形になったのだ、キュアカオスはプリキュアの変身を維持出来なくなつたが体に残る全ての力を使い当時の敵が復活しない様に自分諸共封印した。その時のカルージャ坊の私を見る目は仇を見る様な目だった。当然だ、私の攻撃がなければあの子は自分の命を代償に自分諸共の封印なんかはしなく済んだんだから、そ

れからわしはしばらく弟子をとったり誰かを指導することをしなくなった。だからお前達には感謝しとるよ。」

ユウキ「師匠、ただいま！」

英里「おかえり、ユウキ、さてユウキも帰ってきたことだし、明日香、ユウキ、着替えて外にでろ、組手をするぞ。」

ユウキ「何だつて！、そりや本当か、師匠!?？」

英里「ああ、しつかりねっちよりしごいてやるから覚悟せいよ。」

明日香、ユウキ「望むところよ【だ】。」

と香川英里は今日も弟子と共に修行の時間が始まった。

香川英里と綺麗なキュアフェンリル、弟子の弟子キュアフェンサー

先日の新たなプリキュア誕生の件を受けて英里はそのプリキュアの顔を拝むべく、久しぶりに自分の住む集落を離れ、街に出てきていた。

英里「さて、目的地までまだだいぶ距離があるしなこころ辺は確かそうであいつらが住んでいた筈だ。ちよつくら挨拶でもしてくるか。」

英里の言うあいつらの住む家に到着し、インターフォンを押す。

？「はーい。」

英里「久しぶりじゃのう、八重！」

八重「英里様!?」

英里「あつ、これお土産」と自分の家で作ったジュースを渡す。

八重「ありがとうございます。」

英里「おう、ところで陽乃やシルヴァは元気にしてるかの。」

八重「はい、私達と7大魔王との戦い行こう力は使えなくなりましたが、あの時の戦いの傷も癒えてきていて、明日には退院できる予定です。」

英里「そうか、それは良かったところで小町はどうしておる。」

八重「はい、実の所、私達が変身出来なくなつて、ただ一人変身できる小町が私達の意味を継ぐと張り切つて修行に励んでいて私も偶に修行を見るのですが、私だけではどうも至らない点がございまして、それに小町は今年の夏から〇〇町の高校に行くことになつていまして私は陽乃やシルヴァが

いるためにあの子にはしばらくの間一人暮らしをさせることになるんですがそれがまた心配です。」

英里「そうか、そうかその街ならちようど私も行く予定があつてな、しばらくそこに滞在する予定だから小町の面倒もついでにみてやる。」

八重「よろしいんですか。」

英里「ああ、お主も感じたじやろ、先日プリキュア誕生の力の爆発を」

八重「はい、それは確かに」

英里「それがあつたと言うことはその街にプリキュアが誕生するだけの厄災が降りかかっていると言うことだ。何、心配することはない、小町の修行も小町もしっかり私が面倒をみてやる。」

八重「お願いします。小町はもうすでにその新居に行つてるので連絡をしておきま

すね。」とそして英里は八重の家を後にして、小町のいる、自分の目的地を目指し電車に乗った。

そして八重から教えて貰った住所にあるマンションに到着し、玄関で小町のいる部屋の番号を押す。

小町『はいはい！どちら様ですか？』

英里「私だ。英里だ。」

小町『英里さん！、どうしたんですかいきなり、とりあえず上がってきてください。』

英里「わかった。」

小町の部屋の扉の前につき、インターフォンを押す英里

小町「はぁーい、英里さんお久さしぶりです、つで俺になんかようですか？」

英里は自分の用事と八重から言われたことを話す。

小町「なるほど、姉貴め、心配するなっつってんのに」

英里「まあ、それほどお前さんがかわいいだろ。さて小町明日の準備をせい今の実力試してやる。」

場所と日時は移り変わり、翌日のマンションの屋上

小町「はぁーっ！」と小町は拳を当てようと飛びかかるがそれを英里は人差し指一本でとめる。

英里「威力は申し分ないが体制や視線で何処にくるのかバレバレだぞ。」と英里は小町にデコピンする。

小町「いったあああ！」とおでこを抑えて転がり回る。

そんなことをしていると街から闇のオーラを感じた。

英里「これは!?？」

小町「英里さん、これって」

どうやら小町も感じたようで、

英里「何かあつては困るからな。」とキュアアリブラへと変身する。

小町「俺もやる、プリキュアウルファッブ！」

フェンリル「鮮烈の神狼、キュアフェンリル！」

リブラ「フェンリル、無茶はするなよ。」

フェンリル「リブラ様、それはわたくしに戦うな行っているようなものでしてよ。」

リブラ「相変わらず、変身後と変身前の性格が変わりすぎじゃ」

フェンリル「まあ、そんなことより今は現場に急ぎますわよ。」

そしてビルから降りるそして現場近くの河川敷に着くと

リブラ「フェンリル、気付いたか」

フェンリル「ええ、さっきまで充満していた闇の気配が消えましたわ。」

リブラ「んっ、近くに誰かの気配がそこか！」

とリブラは後ろを振り返ると

フェンサー「キュアリブラ様ですね。」

リブラ「お主は？」

フェンサー「はい、私はフランス、パリのプリキュア、五代目キュアマリア様を師に持つものです。」

リブラ「そうか、お前はメリルの弟子か。」

フェンサー「日本にいらっしやるとは聞き及んでおりましたがこんなところでお会いするとは」

リブラ「まあ、思いがけない出会いじゃったの」

フェンサー「とりあえず、場所を変えましょう、わたくしの部屋に」

リブラ「わかった」

フェンサー「承知しました。」とリブラ達は変身を解き、小町のマンションに向かった。」

英里と龍璃の修行、早まるな龍璃

先日 of 戦いから一変した、翌日再び戦いが起こっていることを知った、英里とその日、偶然帰国していたところを再開した弟子のキュアビルドとともに、戦場へと急ぐ、リブラに変身した英里とビルドは向かうがなんだか英里が登場した瞬間に戦いが終わってしまった。

— さして昔の弟子にして今は同じ12闘士の1人となった。覇波蓮華の娘、覇波龍璃は母からカプリコーンの指輪を受け取ったのを見て覇波龍璃を新たな弟子として迎え入れた。

— そしてその帰り、留守番させていた、明日香とユウキに電話をかけてある場所の貸切と上京させる。

— そして翌日、龍璃をある場所へと案内する。

英里「ついでに、龍璃、ここが暫くお前さんの修行場所だ。」

龍璃「ここはバッテリーセンター」

英里「まあ、まずは入ろう、説明は後からする。」

— 中に入るとそこは無人のバッテリーセンターだった。

英里「まずは、お前さんの変身するプリキュアについての説明だ、キュアカプリコーン、12闘士最速のプリキュア、12闘士は基本光速で動くことができるのだが、カプリコーンはそのさらに上の神速と言われる速さで動くことができる。まずはお前さんにはその早さになる為にはまず光速の動きを見極めるための反射神経とスピードを養ってもらおう。そこでお前さんにやってもらうのはこれじゃ。」と英里がスクリーンバツタボックス側に立ち、手を挙げると5個あるピッチングマシンからボールが最大球速で射出される、それを英里は全て瞬きの間にキャッチしてボールを抱えた状態で立っていた。

英里「これがお前さんにしてもらうことの最終段階の一手前じゃ、お前さんに最初からあれだけの数をこなすのは無理じゃからな。まずはこれをこのピッチングマシンの最大球速の半分150キロから初めて

最大の300キロのボールを変身せず素手でキャッチできるようにするのが第1段階、本来はこれを半年くらいやらせてから第2段階へと移るのじゃが、お前さんには倒すべき敵もいることだ、1週間以内にこれをマスターしてもらおう。」

龍璃「そんないきなり150からなんて無茶苦茶よ。できるわけないわ。」

英里「ほうならばやめるか、それならそれで一向に構わん、その場合はその指輪を置

いてとつとここから立ち去るのじゃ。」

龍璃「そこまでいうなら、やってやるわよ。」

英里「ならばやって見せよ。ちなみに最初の修行のヒントは感覚を最大限研ぎ澄ませ、今回使うのは1つだけだから、反射神経の訓練じゃな。」

龍璃は早速修行を始めた、最初は酷いものだった反射神経が追いついていないから、すぐに取れないし、手で取ろうとして吹っ飛ばしても逆に勢いを殺しきれずにすつ転んだりしておつた。

そこで英里はボール全てにペンで赤い目印を入れ、そしてそれを目と体全体でおつてみろと言つたら途端にコツを掴みかけたのかボールを掴んで見せたが衝撃を吸収しきれずに転んでしまった。

そして今の感じでもう一回やってみろと言つて、150キロのボールを再び発射した。すると龍璃はそれをギリギリではあるがキャッチに成功していた。そしてそれを10回成功させてからだんだんとコツを掴んできて、カーブなどの変化球にも対応してきた、スピードをだんだんとあげて、そして一旦食事を取り、夜も続けるなんと英里の言い渡した消灯時間になる直前に龍璃は300キロをキャッチして見せたのだ。

そして翌日、次の段階の説明をした。

英里「次は昨日のピッチングマシンを5台用意した。その5台からボールが一斉に発

射されるその中の1つにこの前と同じ赤い目印が入つとるものだけをキャッチせよ。」

とその課題は2日間であらうやく体が動くようになって目印の入ったボールがどれかを見極め、目印のないボールを避けながら目印の入ったボールをキャッチしていく。

そして修行を始めて4日の夜、英里は皆が寝静まつてから、1人で考えていた。

英里「覇波龍璃、我が弟子ながら恐ろしいほどの才能を宿したやつじゃ、だがしかし奴のように力に呑まれるようなことがないといいいんじやがのう。」

そして5日目

英里「私の投げる光速ボールを全て避け切つてもらおう。これでお前が光速の領域に至り、神速の世界へと辿り着けるかの重要なステップじゃ、心してかかるように。」

龍璃「はい！」

龍璃の快進撃のペースもどうやらこの特訓にはどうにもならず1週間の5日目を合わせた、2日間龍璃はうたれっぱなしだった。

そして6日目の夜、龍璃の精神も限界がきていた。

龍璃「先生、一体私はいつになつたら、実戦やそれに近い組手の修行をさせてくれるんですか、私は本当にこの修行を完遂できるんでしょうか。」

英里「なあに、心配することはない、ちゃんとお前さんは成長しとるよ。その証拠に……」指にエネルギーを凝縮させる。

英里「龍璃、お前にはこのエネルギーを凝縮した塊からエネルギーの流れを感じる事ができるか」

龍璃「本当だ、何だろうこの感じ、先生の手にあるエネルギーが螺旋状に収束してこの形を保っている。」

英里「龍璃、これがお前の修行の成果だ。お前が何故こんなにも早く私の出した課題を突破できたのかそれはお前が無意識のうちにエネルギーの流れを感知することができていたからに他ならない。」

龍璃「それじゃあ、私は成長してるんですね。」

英里「ああ、明日も早い、今日はもう寝なさい。」

その翌日、龍璃は朝、顔を洗いに行っていた、龍璃と英里は龍璃の仲間達がまた誰かと戦っているのを感じた。

そして英里は様子だけ見てこようと席を立つと、龍璃を探しに出ていた明日香とユウキが帰ってきた。

ユウキ「師匠タイヘンだ！」

明日香「龍璃さんがいません、おそらく先ほどの邪悪なエネルギーの発生した下にむかったものと」

英里「もういいわかった、龍璃は私が連れ帰る。」

英里はリブラに変身して、その場所へと向かう。

そしてその途中、龍璃の母の変身したと思われるキュアカプリコーンの気配が消え新たなカプリコーンの気配が現れただがその気配には狂気とバツトエンドに包まれていた

リブラ（龍璃、今のお前は真の力と誠の勇気の意味を履き違えてあるのだ、幾ら変身できるようになったとしてもそれを知らぬものに12闘士のプリキュアの力は真に正しき力を貸すわけがない、龍璃がそれを気付ければ良いのじやが、龍璃待っておれよ。）
龍璃のもとへとスピードをあげて向かう。

英里とルナ、12 闘士を起こしに行く。

キュアカプリコーンとなった自分の弟子の正体が別世界の龍璃と判明した後の小町の自宅ではかつてソルドレイク・カルージャ共に英里のもとで育ったルナドレイク・カルージャを龍璃やソルドレイクの居場所についてやインキュベーターについての話をするために英里は連れてきていた。

英里「久しぶりじゃの、ルナ」

龍奈「お久しぶりです。義母さん」

英里「お前さんも聞いて驚いたのではないか、別世界の龍璃、つまりはわしの弟子について」

龍奈「義母さん、正直に言わせてもらいますが、最初から龍璃ちゃんの素性に気付いていませんでしたか。」

英里「さあてのなんのことだか」

と英里は笑みを浮かべながら知らん振りをする。

龍奈「全く、義母さんは、それで私をわざわざ呼び出しのはそんなことを話すため

じゃないですよね。」

英里「さすがルナじやの、物分かりが良くて助かるわい。あいつもいずれはあいつの世界に帰らなければならぬ。わしはジャミールに行き、あいつを連れてくる。お前はカノン島にいるあいつを呼びにいつてくれ、そこにはあいつもいるはずじゃ。」

龍奈「そんなに重大なことなのですね。わかりました。」と龍奈は家を出た。

英里「さて、小町は学校じゃし、しょうがない手紙でも書くか。」

と英里は手紙を残し、ジャミールへと旅立った。

そしてそれから、3日後、双子座の12闘士の住まう島、カノン島、そこに、ルナドレイク・カルージャ龍形態は降り立ったそして人間態へと変わる。

龍奈「ここが、カノン島、悪の側面と正義の側面とを持ち合わせる双子座の12闘士の住まう島、確か、あの双子の火山の火口のどちらかにいるんじゃないか、さして行きましようか。」

その頃、英里もジャミールに到着していた。

英里「やはりここは変わつとらんの。」と霧のかかったつり橋を見るそして手を振りかぶり、そこにあつた霧を霧散させる。

霧が晴れると谷底はよくみえた、そこには何百といった白骨死体があつた。

英里「相変わらずのようだな。」

そして牡羊座の12闘士のいる塔にまでたどりつく。

英里「おーい、私だ、この声を覚えているのなら姿を表せ。」

サヤ「英里、何のようです。」

英里「うん、実はのサヤ……」

英里はこの世界に起こっていることを話す。

サヤ「なるほど、ようは戦力増強ですか、他ならぬ英里の頼みです。

了承するのも吝かではありません。」

サヤが英里の言葉を遮る。

英里「それでは、サヤ「ただし！」と

サヤ「条件があります。貴女が断り続けてきたプリキユア達を束ねる女教皇の席に貴女が付くのです。もちろん戦いが終わってからですが」

英里「うー、わかった、嫌だとも言ってられない、状況じゃ、何でもやってやるわい。」

サヤ「わかりました。貴女に協力しましょう。プリエステス。」

英里「やめい！、今はまだ教皇ではない！」

サヤ「そうでしたね、それでは次はどちらに向かうのですか。ですが貴女の話聞く限り、私達2人と現地にいる、新しい山羊だけでは辛いかもれません。ギリシヤに

行つて今現在、存在している12闘士に協力を仰ぎましょう、ほとんどが貴女のお弟子さんだったはずだ、それに弟子でなくとも貴女のことを敬うプリキュアは大勢いるはずです。」

英里「わかった。行くぞ。」

サヤ「それでは捕まっていってください。」英里はサヤの肩を掴む

サヤ「転移！」とその一言だけを告げると2人の姿はその場所から消えた。

そしてカノン島では、

龍奈「ようやくついた。こんなに遠いなら、龍形態で飛んでくればよかったわ。」

？「この静かな、カノン島に誰かと思えば、英里にあやされていたお嬢ちゃんか。」

龍奈「貴女は？」

カノン「私はカノン、プリキュアの最高位にある12闘士が1人、双子座を司るプリキュアだ。元が付くがなり」

龍奈「それって」

カノン「ジェミニに変身する力はずいぶん前に弟子に譲っちゃった。」

龍奈「えっ、それじゃあ、私は全くの無駄足つてこと！」

カノン「そういうことだな。」

龍奈「それとさっきの口振りからして私を知っている様子でしたか？」

カノン「ああ、200年ほど前、まだ12闘士が全員揃い、その下にプリキュア達が揃っていた時代、英里も私もまだ未熟なひよっこだった。

英里は当時、プリキュアの妖精となり得るかもしれない親のいない妖精の育て親をしていた。私はある理由で幽閉されていな、そんな時、英里がお前さんや他の妖精達を連れて遊びにきたんだ。」

龍奈「そうだったんですか、私はここにきたことがあるんですね。」

カノン「して、ここに来た理由は、この世界に起きていることは把握してはいるが何分、この島にしか最近はいないからな。」

龍奈「そうですか、それでは私の方から説明を……」
とカノンにも話して行く。

カノン「なるほど、英里はサヤの下に向かったか、ならあいつらは次にギリシャに向かい、今いる12闘士をできるだけ集めてくるだろう、そしておそらく、もう少ししたら、このカノン島にくるはずだ。」

英里「呼んだか！」

龍奈「速っ！」

カノン「うん、サヤのテレポーションか。」

龍奈「つてそれどころじゃなくてですね。大変なんですよ。！」
と龍奈は英里に事情を話す。

英里「なんじゃ、要はもう一度戦えるようにすればいいじやろ」と懐から紅い液体の入った小瓶を取り出すとカノンに渡す。

カノン「これは？」

英里「私が聖戦の後、キュアアテナ様の血と禁断の果実の1つ、命の実を使つてつくつた、弟子に変身アイテムを受け継ぎ先代か現世の12闘士が死んだ時にのみ変身アイテムがついになる。弟子が12闘士として覚醒したその時に失われたプリキュアの力を蘇らせる。蘇生力薬」

カノン「そんな薬を一体どこで!?、私はそんな薬の存在を今まで知らなかった!」
英里「知らなくて当然だ。これは私がアテナ様の直々の願いによつて私が薬を調合したのだから、来るべき時、変身できる能力を失い、受け継いだものだけではどうしようもない危機に陥つた時にこれを使うようにとその薬を12個、私につくらせた。だがこの薬には最悪の副作用がある、それは枯れてしまったプリキュアの力を再びもとに戻すだが命の実の力は人の身にはとても強大な力を持つている。それを私の中で枯れてしまった残りカスの力が増幅され、プリキュアの力と私達の体は融合を続け、そして寿命や老で死ぬことはなくなるんじゃ、言ってみれば不老不死の薬じゃ、そして塵ごと全て

消しとばさねばおいそれとした怪我でも死なぬ体になる。寿命に関してはいつまでもなくこれを飲んだ場合、私達は永遠ともいえる時の中で生きていかなければいけない、永い時を一人で生きる虚しさはカノンお前もよう知つとるじやろ。だから私は止めんさお前が世界の為に戦うことを放棄したところで私は、永い時を生きていかねばならないのは私もお前も同じだ。少なく共私達が寿命で死ぬのはまだ先だ。それをこれからずっと味わわなければいけないなどそれはもはや死んでいるのと同じや、だからお前にはよく考えて、飲むのはそれからしろ。」

カノン「……………」

カノンは無言で薬を受け取り一気に飲み干した。

英里「お前もシヤナも相当なアホじゃ！」

何故こんな辛いことを受け入れられる。」

いつも凛々しく豪快な英里のあんな泣き顔を初めてみた龍奈は驚いた。

カノン「英里、おまえは、大切なことをわすれてる。」

カノン「我々はキュアアテナ様に使える、12闘士だ。地上の愛と平和を守る戦士だと私がスニオン岬の牢獄に閉じ込められていた時、それをお前はわたしにおしえてくれたその時はばかばかしいと思つたか

私がキュアアテナのもとで戦うようになってからその意味を知ることが出来たん

だ。」

英里「カノン・・・、行こう！」

カノン「ああ、ところで連れてくるなら、シヤナやアリオスも一緒に飛んでくると思ってたんだが」

英里「ああ、日本で動きがあったんでな、現場にシヤナを送った。そしてこれから行くところに先にサジタリウスを送った。」

カノン「そうか、サヤもあるのだろうから私も先にそこに行こう。」

カノン「プリキュア！、クロスアツプジェミニ！」カノンはキュアジェミニに変身する。

ジェミニ「アナザーデイメンション！」と時空の裂け目が開き、ジェミニはその穴に消えたそして穴は閉じる。

英里「さて、最後の仕事じゃ、現存する最後の12闘士を迎えに日本に向かうぞ。」

龍奈「えっ、日本？」

英里「ああ、奴がいるのは、島根県、黄泉比良坂の入り口、黄泉の穴に奴はいる。」

サヤ「英里、急ぎましょう。」とサヤは英里の後ろに現れた。

英里「相変わらず、いつもいつも突然ワープしてくる奴じやの、では行くか、蟹座の

「12闘士を求めて」

英里と龍奈はサヤの肩に捕まり、日本の島根へとワープした。

黄泉比良坂 死を司る蟹達

島根県、出雲地方黄泉比良坂、黄泉の穴入り口前に英里達はワープした。

英里「あいも変わらず、ここは不気味じゃの」

とそんなことをぼやきながら洞窟の中に入ると、洞窟から石が飛んできたそれも光速のスピードで

英里「危ないの」

？「何者だ！」

英里「お前さんこそ何者じゃ？、私の知らない気配を出しおつて！」

？「その御人名を名乗られよ。」

英里「12 闘士が1人、キュアリブラの英里だ。私が来たとマヤに伝える。」

？「これは失礼を、お師匠様と同じく12 闘士の方でしたか。」

英里「何を言うておら、お前も12 闘士じゃろ。」

？「いえ私は、変身は出来るんですが、完全に力に覚醒していなくて未だに師匠にも変身能力が残っていました」

英里「そういえば、弟子が完全に力を継承しきつてないときは先代はまだ変身出来る

じやったな。」

？「申し遅れました。私は東堂シオンと申します。」

英里「ところでお前さん、ずっとここにおるのか。」

シオン「はい、私は捨てて子で物心つく前から師匠が育ての親のようなものですね。」

英里「マヤの奴が母親か、中々面白いな。」

マヤ「それはどう言う意味でしょうか。英里様。」

英里「げっ！、マヤ」

マヤ「はい！、貴女の愛しの愛弟子マヤちゃんです！」

英里「なーにが、愛しの愛弟子マヤちゃんです。私たちの歳を考えんかこら！」

マヤ「でも、ここに來たつていうことは等々私にプロポーズですか、それとも告白で

すか！、結婚式ですか！」

英里「違う、お前に力を貸してほしい、実はの……」

英里はマヤに事情を話す。

マヤ「へえ、そういうことですか、それじゃあ、今回の件が終わり次第、英里様が教皇になれるんですね。わかりました、不肖このマヤが教皇補佐を務めさせて頂けるのなら、今回の件、お手伝い致しますよう。」

英里「わかった、そのときはよろしく頼む、それとこれを渡しておく。」とカノンに渡したものと同じものを渡す。

英里「もし、シオンが完全に覚醒した時に飲むといい、変身能力を戻す。副作用もある。言ってしまうえばほとんど不老不死だ。死ねない苦しみを味わう覚悟があるのなら。」

マヤはそんなこと御構い無しにその薬を飲んだ。

マヤ「これ前飲みでも大丈夫ですよね。」

英里「ああ、問題ない。」

マヤ「これで英里様と永遠の時を」と、まるで我が子を授かった母親のような顔をしていた。

英里「ハアーーーー」と盛大にため息を吐く。

英里「そういえばアリオスが来ておったじやろ。あいつはどうした。」

マヤ「ああ、あの人なら、この洞窟の寝床にいますよ。案内しますね。」と英里達はマヤに付いていくすると

龍奈「いや、おかしいでしょ、なんで、こんなくらい洞窟に一軒家があるんですか。ここ一応国の自然遺産ですよね。」それに龍奈はスマホを取り出すと。

龍奈「なんでWi-Fi通ってるんですか。」

マヤ「気にしたら負けですよ。固定資産税とかかかりませんし」

龍奈「そりゃ、そうでしょ国残ってる洞窟とか遺跡に家を建ててるなんて思わないですから」

アリオス「師匠、お疲れ様です。」とアリオスが出てくる。

英里「さて全員揃ったところで、カノン達と合流するぞ。」

サヤ「行きますよ！、転移！」

とその場の全員は転移した。

聖戦を生き抜いた奴らの実力

黄泉の穴からカノンの気配のする場所に転移した、英里達12闘士組

英里「ふー、付いたか、つて龍璃達のいる場所ではないな住んでいる場所ではあるようじゃが」

カノン「英里、ようやく来たか。」

英里「カノン、これはいったいどうなってるのじゃ。」

カノン「おそらく、龍璃達が街を留守にした時に、奴らの本拠地とは別に戦力を送り、この街を占拠しておくつもりだったのだろう。」

英里「しかし、1つの街を占領するのにどれだけの戦力を送つとんのじゃ、目で確認出来る限りで1万を超えとるぞ。」

サヤ「まあ、我々が5人いれば充分なのではないですか、1万人くらいは」

カノン「しかし、せめてあと何人かは、戦力が欲しいところじゃな。」

シヤナ「老師、我々もいますよ。」シヤナの傍にはミリア、アイリス、タリア、アフロデイテ、カミナがいた。

英里「お前達、あのお方の愛したこの地上を守らなくため、再び集まってくれたか。」

カノン「それにしても、これだけの人数が揃うのは聖戦の時以来か」

英里「行くぞ、お前ら！」

11人『プリキュアクロスアップ！』

英里「リブラ！」

サヤ「アリエス！」

タリア「タウラス！」

ミリア「スコープオン！」

カノン「ジエミニ！」

アイリス「レオ！」

マヤ「キャンサー！」

カミナ「アクエリアス！」

シヤナ「ヴァルゴ！」

アフロディテ「ピスケス！」

ここにカプリコーンを除いたプリキュア界における、最高位12闘士のプリキュアが

11人が揃った。

敵は見る限り1万を超えている。

ここに11人对1万人オーバーの人数との戦いが幕を開けた。

レオ「まずは私から行くぞ！、プリキュアライトニングプラズマ！」

レオの雷電を纏った拳が光の速さで数百の敵を通り過ぎ、一気に敵を葬った。

ヴァルゴ「天空破邪魑魅魍魎！」ヴァルゴの周りには大量の悪霊が相手を攻撃して行く。

タウラスの黄金のオーラが荒ぶる猛牛の形に変わる。

タウラス「グレイトホーン！」と巨大な猛牛の突進が敵をもろとも吹っ飛ばす。

そして別の場所では、スコーピオンとアリエス、サジタリウスが戦っていた。スコーピオンが前衛をつとめ、後衛でスコーピオンが倒し損ねた敵を黄金の矢で確実に戦闘不能にして行く。アリエスはクリスタルウォールでサジタリウスに飛んでくる攻撃を防いでいる。

また別の場所では、リブラとジェミニ、アクエリアスが戦っていた。

リブラ「廬山昇竜波！」

ジェミニ「プリキュアゴールドトライアングル！」

アクエリアス「プリキュアオーロラエクスキューション！」

またまた別の場所では既にピスケスのピラニアローズとキャンサーの積尸気冥界波により大量の敵が死に絶え、あの世へと送られていった。

そして敵の数が半分をきったころ。

レオ「老師、姉さん、アリエス、ジェミニ、ヴァルゴはカプリコーン達のもとへ行ってください。我々も後から追いかけます。」

リブラ「よし、アリエス、頼む」

アリエス「わかりました。転移！」

リブラ達11人の内5人は龍璃達のもとへとむかった。

決着とその後

英里とその現場に送られた、先代12闘士達はその場に集結していた。新たな12闘士となったもの達を見ていた。

そしてすぐあと、他の闘士達もこちらにやってきた。

英里「まさか、新しい世代での12闘士達がここまで揃うとは」

サヤ「我々の時もそうでしたが、中々ですな。」

タリア「本当に全員、金色に覚醒してしまふとは」

シャナ「本来なら、こんなに一齐に覚醒することは無いのだが」

マヤ「英里様、我らの力を彼女達に」

英里「ああ」と英里、サヤ、カノン、アリオス、マヤは変身を解き、自分のプリキュアの力が込められた指輪を自分の星座を受け継いだ戦士達に投げる。

そして指輪を受け取った彼女達には歴代の12闘士の経験と技が継承される。

しかしその直後、一度は消えたはずの邪気が集まりまた1つになろうとしていた。

アイリス「老師、どうやら指輪を渡すのは早計だったようですよ。」

英里「どうやらそのようじゃ。」

タリア「まずい！」

その頃、新世代の12闘士達は戦いを終えて変身が解除されていた。

指輪を渡していない他の先代達プリキュアに変身し、そして6人は新たな12闘士の前に立つ。

タウラス（先代）「いいか、新たな12闘士達よ。君達の倒したソルキュベレイターがこの世界に充滿する負のエネルギー吸収し、今、正に巨大な怨念の塊となって君達を呪い殺そうとしている。」

アクエリアス（先代）「今の君達は先程の戦いで力を使い果たし、変身はしばらくできないだろう。」

ヴァルゴ（先代）「だが、薬を飲み無理やり変身出来る様に戻した私達の体も既に限界」
スコープピオン（先代）「いくら不死身に近いとはいえ、この今の我々の状態では元のソルキュベレイターより数千倍大きくなった奴と戦えば死んだしまうだろう。だが同じ死にしても我々は負けて死んだらする事はけっしてしない！」

ピスケス「今から君達に見せる技は、12闘士に伝わりし、掟破りの影の闘法、プリキュアエクスクラメーション、12闘士3人で行う宇宙を創造したビックバンにも匹敵する破壊力を持つ、12闘士最強の技だ。」

レオ「だがこれを使えばプリキュアの力や称号は剥奪され、死してなお、未来永劫鬼

畜にも劣る賊の烙印を押される。」

リオン「まあってそんな愚かな技を私達のために使ってくれて言うの!?？」

ピスケス「かの聖戦から200年以上の時が立ち、もうすぐ新たなキュアアテナ様がこの世に降臨なされる。私達は君達にならアテナ様を任せられると思うからこそ、思い残す事なくこの技を放てるのだ。」

レオ「いくぞ！」と6人は半分ずつに分かれてかまえる。

レオ、スコーピオン、タウラス『プリキュア!、エクスクラメーション!』

ヴァルゴ、ピスケス、アクエリアス『プリキュア!、エクスクラメーション!』

と同時に放たれる技が融合し怨念の巨大なゴーストソルキュベレイターに直撃し、今度こそ戦いは終わった。

変身を解き、6人は自分の星座の闘士達に指輪を渡す。

アイリス「さて、そろそろ我々も限界の様だ。受け取れ新たな12闘士よ。これこそが真に12闘士を受け継いだ証と知れ。」

そして6人の体は消えかけていた。

消えていく中で6人の声はそろいこう言った。

アイリス、シャナ、タリア、カミナ、ミリア、アフロデイト

『貴女達にアテナを託す!』それだけを言い残し、6人は完全に消滅した。

そしてその翌日、この戦いのあと、すぐにカプリコーンの指輪を残し、元の世界へと帰っていった龍璃以外の12闘士は皆、英里の下に集まっていた。

英里「12闘士となったお前達はキュアアテナ様をお守りする本拠地、ギリシヤの聖域の十二宮を守護する役目が与えられる。だがしかしお前さん達はまだ子供、学校に通っているものも多い、そこでだ。せめてその学校を卒業するまではその役目は免除とする、その代わり日本で起きた案件に関しては必ず協力する様に、このまま私達とついてくるものは家族と過ごす時間を3日間与えるその3日のうちに私はお前さん達の家族に説明をする、そして三日後、日本を発つ予定じゃ、良いな。これは新たな女教皇となった私からの最初の厳命である。」

12闘士『わかりました。』

と12闘士達はそれぞれの家に帰っていくのだった。

ROAD to RURI編、完

英里と玲央のデート 別世界に飛んじやつた。

英里は久しぶりに仕事が開き、舞亜も修学旅行に行っているため

今日は久しぶりに玲央と2人きりのデートである。玲央はこの前、龍璃の精神だけが別の世界にいったという話を聞いていた。その時の龍璃は心肺停止状態で英里も一応診察に行つたくらいだ。

玲央「それでですね。龍璃ちゃんの話だと別世界にはマナちゃん達も行つていたそう
で！」

英里「そうか。」

玲央「なんで驚かないんですか！」

仕方がないのだ。英里のこれまでの経歴を考えれば

英里「玲央くん、よく考えてみたまえ、今の私がどうやってここにいるのか。」

玲央「あつ！」

英里「精神だけが別の世界に行つたり、別世界の自分にあつたり、そんなネタはすでに私がメインのあの太陽戦姫とブレイブソウルのコラボ回の時も、話がこのシリーズなつてからもやり尽くしているネタなんだ。だからこそ、私はあわてない。」

そんなことを玲央に話していると玲央が音を出すことなく久しぶりのアレを取り出し、思いつき英里の頭にむかつて振り下ろす。

英里「いったあああああああ！、久しぶりに何をするんだ玲央！」

玲央「英里さん、いくらこれがシリーズ的にまだ関わらない、日常話だからってメタい話は禁止です！」

英里「いや、玲央くん、私は何も自分にだけ行ってるんじゃないぞ。それは君にも当てはまることなんだから玲央くん！」

玲央「うっ！」

英里「それにどさくさに紛れて玲央もメタい発言してるし」

玲央「そんなことありませんよ。僕もそのなんというかスカル以外で別世界の私をみてみたいんです。」

英里「そんなに別世界に行ってみたいか？」

玲央「はい！」

英里「いや、玲央、実際に行ってみたり、あってみればわかる。別世界の自分だの、なんだのはろくな目に合わないことに。」

玲央は聞いていなかった。別世界にいけるかもしれない、英里ならふつうにそれを

やってのける装置くらい作っていいそうだ。とかそういう妄想を膨らませて目をキラキラさせていたんだかんだ行つて玲央もまだ子供なのである。

英里「はあーつ、わかつた、私の第4研究室に行こう」ともうだいぶ前になるがサヤが死ぬ原因となつたあの件で発見されたラボやブラックマグマが所有していた地下施設を英里の管轄下に入れて英里のラボや隠し金庫にしたりしていた。その中には発明品の物置や、メカの格納庫も含まれている。プリキュアクロニクルの時に沈んだ、ベイエリアCCに格納されていたメカは再び英里の仕事の片手間にしている株により、増え続けている彼女の預金学により、再びロールアウトされ更に出力上昇や各種のパワーアップ改造が施されている。新型開発をしていたり、している最近の研究開発中のものは勇者の世界を回ることにより、各世界で英里が集めた超AIのデータをもとに英里が超AIを製作しようとしていたりなど、それぞれの各種用途別のラボが存在する。

英里「取り敢えず、私もついて行つてなんとか、面倒ごとに巻き込まれないうちに帰つて来ればいいか。」と英里は玲央を第4研究室に招待するのだった。

ボクっ娘玲央対サキモリツシュ玲央

前回、玲央の突然の思いつきで英里のラボにあるという異世界を渡る装置を使い異世界へのプチ旅行にきていた。

英里「ついたか。」

玲央「着きましたね。つて、あれ服が変わってる。め

英里「原理は勇者の世界を回っていた時とおなじだ。ここにいられるのは精々2日かといったところか、紙幣も身分証明書もあるし」

玲央「2日ですか、結構長いですね、というか此処、普通に日本じゃないですよね。」

英里「ああ、それなんだが異世界の私達のいる場所という地域で検索をかけていたからなら、外国にいてもたいして驚かんさ。」

玲央「それで此処は何処なんですか。」

英里「ちよつと待ってる。」と端末を取り出してこの世界について調べていく。

英里「どうやらここは私達の世界でいう、ギリシャのアクロポリスの市街地のよう

だな。」

すると何者が英里の前にテレポートしてくる。

「見つけましたよ。教皇、玲央もです、見つからないと思えば貴女が私の力に干渉して見つけるのを阻害していたわけですか。」

英里「サヤ！」

玲央「サヤさん!？」

サヤが現れたことにより相当混乱しているとそこにまた誰かが、テレポートしてきた。

玲央（チグハグ）「サヤさん、教皇を捕まえましたよ。」と教皇英里を捕まえた玲央が現れた。

サヤ「どういうことですか、教皇と玲央が2人？」

玲央「えっ!、あれもしかしなくても僕!。」

玲央（チグハグ）「なんだそこなボクっ娘!、貴女私に似てる?。」

英里「はあ、さっそくめんどくさいになってきたな。」

そしていつの間にか玲央（チグハグ）の拘束を解いていた英里（チグハグ）が英里に話しかける。

英里（チグハグ）「お前さん、誰なんじゃ、私に似とるようじゃが」

英里「この世界の私は随分と年寄りくさいな。」

英里（チグハグ）「年寄りとはなんじや、私はまだ265だ。」

英里「えっ！」とあまりの驚愕の年齢に驚くどころから、ちよつぴりひいている英里であった。

玲央（チグハグ）「おのれ、この前、陽奈が言っていたようかいいうおうちの妖怪と
いうやつらだな。」

とそんなことを呟いやっていた。

玲央（チグハグ）「私に化けて、要らない騒ぎを起こすとは、そこへ直れ！」

玲央「何ですか!? 僕は何もしてませんよ！（英里さんの言ってた事ってそれだったんだ……）」

英理（この世界の玲央くんは、何処かの防人系女子なのか……、って、どれだけ心がピュアなんだ。この世界の玲央くんは見た目からして19歳か、それくらいだなその歳にもなつて、アニメの存在がいると思っっているのか。）

玲央（えっ！、この世界の僕、どんだけ心がピュアなの、ていうかこの世界の陽奈に
対して無性にはらがたつてきたよ。）

とそんなことを思う2人に対して誤解を続ける玲央（チグハグ）

玲央（チグハグ）「クロスアップ！、アリエス！」とプリキュアに変身して玲央に攻撃

してくる。

玲央「もう、こうなったら戦って誤解をとかしかない。プリキュアブレイブコンバイン！」とブレイブモバイルを取り出してキュアカイザーへと変身する。

アリエス「まさか、あのボーイツシユ少女がキュアカイザーになるとは……………それにしても、何ででかさなんだ……………」↓カイザーの胸を見て

カイザー「私の胸あんまり見ないですよ。恥ずかしい……………」

チグハグ世界の玲央は、実は貧乳。

何とか誤解を解いた二人

玲央（チグハグ）「そうか、六花から聞いたもう一人の私はお前だったのか？ 済まなかった」

そして翌日

帰ろうとした二人に最大級の災難が

なんとその日、英里達が泊まった聖域にはある一人の人物が訪れていたその人物は英里達の世界でも頼りになる人物だった。

冴島（チグハグ）「ほう、異世界から来たプリキュアはお前たちだな。帰る前に私と手合わせしてやらないか」

と冴島はプリキュアに変身する。

玲央「えっ！、冴島さん！」

ユニコーン「さあ、かかってこい2人とも！」と2人に攻撃を仕掛けるユニコーン、英里と玲央もプリキュアに変身して応戦するのだった。

……一時間後、キュアユニコーンにボロボロにされたところで装置の効果が切れて元の世界のラボに戻ってきた。

英里「冴島聖奈、化け物にも程がある……」

玲央「もう異世界なんてこりごりですよ。」と2人して小一時間ほどラボの中で意識を失った。

その翌日、英里の自宅にて

英里「なっ、だから言ったら。異世界なんて見るもんじゃないって」

玲央「はい！、もうこりごりです。異世界の存在なんてスカルが出てきた時点でもう充分でした。」

そして2人が朝食を食べているとある人物が訪れた。

玲央「えっ！、那由多博士！」

彼女はグランガードの那由多零奈だった。

英里「ほう、グランガードの技術者の1人じゃないかじゃないか、此処に何かよう

かな。何も用がないならおひとときと願おう。」

零奈「そんなこと言わないでください。英里お姉ちゃん」

玲央「英里お姉ちゃんって?!？」と英里の顔を睨む玲央

英里「違うぞ、私は彼女の姉と知り合いでな大学時代の技術者の集まる、テクノロジ―サミットでよくあったものさ。そのつてもあつてかサヤの生きていた時にこの娘の面倒をみていたのさ。」

玲央（あきらかに英里さんを見る目が違ってるじゃないですか、どんだけ英里さん、女の子からもてるんですか！）と心の中で一人呟く玲央であった。

Z E E D編マガキュアサイド

これは世界がクライシスインプクト呼ばれる災害に見舞われる直前の出来事である。

1人の科学者、香川英里がこの日本から姿を消した、そしてそれと入れ替わりにスマツシユを名乗る怪人やベリアル融合獣というプリキュアと怪獣の力を併せ持つ怪物達が現れ始めた。防衛省は一度は世界を救った彼女を容疑者として疑う強硬派の面々により、別世界の香川英里であり、この世界の英里の妹ととして刑期を終え生活する香川英里奈を再び逮捕したのだった。これを受け、世界平和守備機構極東方面軍伊豆基地の司令へと昇進した嵐山森夏は抗議するが統合参謀本部にその抗議ももみ消されてしまふのだった。

世界で初めて科学により、プリキュアの変身システムを構築し、量産タイプのプリキュア、キュアゲシユペンをこの世に生み出したマガインダストリー社の社長室にてそんなゴシップ記事を読んでいる1人の女性がいた。

？「あの香川英里がスマツシユやベリアル融合獣を生み出し、日本を征服しようとした張本人？、妹である香川英里奈を事情聴取の為に連行ねえ、相変わらず防衛省の強

硬派はおつかないことするわね。」

そんな飄々とした態度でゴシップ記事を読んでいると社長室にもう一人女性が入ってきた。

？「イルミ、やはりここにいたか、社長室はお前の私室じゃないんだ。平然とサボりに使うんじゃない。それにお前は私の秘書だろうに」

イルミ「リン、じゃなかった、社長」

リン「リンでいい。お前に社長などと言われるのは公共の場だけで充分だ。」

イルミ「悪かったわよ。それでこの記事、リンはもう読んだかしら」

リン「ああ、ひどい話だ。一時は英雄扱いして感謝状まで送った防衛省が今度は犯罪者扱いか」

イルミ「私達の後任も不憚でならないよ。」

リン「まあなつて、そんなことを言ってるんじゃない、社長室を私用で使うな・・・」とリンを抱き締めてリンを黙らせる。

イルミ「悪かった、この埋め合わせに今日は食事でも！」

リン「ふん！、私がそれで機嫌が直るとでも思ったのか、私は社長でお前は私の秘書、思いつがるのもいい加減にしろ。」

イルミ「あらそう、リンのお仕置きも怖いし、クビになって路頭に迷う前に仕事に戻

るとしましうか。」とイルミは立ち上がったて社長室を出ていこうとすると

リン「さて、お仕置きはなくならんが食事に行かんとは言つてないだろう。」

イルミ「ええ、最近は何もしてないんだけど」

リン「まったく、また女性社員の間でお前の噂が回つてる。お前また、私の以外の雌に尻尾を振りおつて、今日は朝まで寝かせんからな。」

イルミ「そんな」

そしてそれから夜になり、レストランに向かう途中、公園からひどく高い爆音が聞こえた。

イルミ「なんだ、なんでこんなところでドンパチやつてんのよ。」

リン「それに、敵対勢力との戦いではないな。となると残るはプリキュア同士の戦いか、あまりこんなことしたくはないんだが」

イルミ「ああ、喧嘩両成敗と行こうか。」

リンとイルミはお互いのキュアデヴァイスを取り出してプリキュアに変身してその公園へと向かう。

英里の逃亡生活

香川英里は国外へと逃亡したのは、玲央と一緒に別の世界に行つて帰つてきたばかりのことだった。那由多零奈との再会を果たしたあと英里の前に現れた直後、防衛省強硬派が香川英里に接触した。

英里「それで、貴方がたは一体何の為に私に接触をしてきたのです。」

強硬派の防衛省幹部「貴女も少しはさっしているんじゃないですか？、現在の地球や日本のありさまを見れば、本来なら妖精族などという種族と我々は接触するべきではなかったのだよ。」

英里「というと？」

強硬派防衛省幹部「たしかに今現在の日本を支えていたのは伝説の戦士と言われたプリキュア館だ。だがそれはあくまで伝説に選ばれしものが必要な力だ。この世界の現状ではワンオフの力など我々は求めていない、それに大半のワンオフをグランガードや世界平和守備機構が確保している。我々に必要なのはオンリーワンよりプロダクションモデルな量産型なんですよ。そして今現在、日本は謎の勢力が入り込んでいます。だが徹底的な交戦を良しとしない現在の日本政府では日本を守りきることはできないで

しよう。それに私は思ったのです。幻影帝国との長年の戦いの際にやむなく結ばれた妖精族との協定は他勢力を刺激して敵対勢力を呼び寄せているのではと思つてね。私はこの国に革命を起こし、まずはこの国から妖精族を排除するつもりだそれに伴い伝説の戦士プリキュアの力を持つ妖精達、グランガードやその他組織に所属するプリキュアからアイテムを取り上げ、我々が管理し、量産型プリキュアを持って今の勢力を徹底排除する。そして我々最大の目的は妖精界をつなぐ転移門の破壊にある。だがその為には貴女のような多岐にわたる科学の才を持った人が必要なのです。協力いただけませんか。」

英里「悪いがその話はお断りさせていただきます。私は存外この妖精達との共存社会を気にいつていましたね。」と英里は言う。と幹部達は少し怪訝な顔をするがまあいいだろうという感じで笑顔を浮かべる。

強硬派防衛省幹部「まあいいでしょう。ですが貴女の決断によってこれからどうなるのかしっかり考えた上でもう一度考えてもらいたい」

強硬派幹部は帰っていった。

そしてその夜

英里の目の前にある2人が現れた。

英里「お前達は!?!?」

？「わたし達を知ってるんでしょ、アドヴェントを倒した貴女なら」

英里「楽しみのテンプテイ、怒りのドクトリンか」

ドクトリン「そうだ。この世界にアドヴェントがいて我々がいないわけはあるまい。テンプテイ「楽しそうだから、君には死んでもらうよ。」

英里は変身しようとブレスレットを構えようした時、テンプテイとドクトリンが手首とポケットに指先から光線を出して攻撃した。

英里「ぐっ、まさかマジンモバイルや超力ブレスが破壊されるなんて」

ドクトリン「貴様は人間の身でありながらも真化の道に偶然とはいえないった。だがその覚醒をうながす力を絶って仕舞えばいいことだ。」

テンプテイ「変身アイテムを失った貴女がどれくらい戦えるか楽しみにしてるよ。今日のところはまたね。」テンプテイとドクトリンは消えていった。

そして、香川英里はその翌日、キュアゲシユペンストType SとRを持ち出し、娘の香川舞亜、メリル・天海とともにゴーストライナーに乗り姿を消したのだった。

鬼教官、北村静対ブレイブソウルプリキュア

ベリアル融合獣が出現したことにより、日本は今てんやわんやである、政府直属の防衛組織は量産型のプリキュアの編成を進めていた。グランガードにも量産型のプリキュアのキュアゲシユペンストーイのカスタムタイプの試験運用をするべく、かつてキュアゲシユペンストの攻撃モーションのパターンなどの構築をしていたグランガード現教導隊、隊長。北村静にかつてと同じくキュアゲシユペンストのデヴァイスを使うことになるのだった。

静「まさか、量産型プリキュアとしてはすでに旧型になりつつあるキュアゲシユペンストーイのハロウィンプロジェクトのカスタムタイプを送ってくるとはギリの奴は随分物好きだな。さて、久しぶりのゲシユペンストだ。教え子達で肩慣らしといか。」

そして数時間後

静「やあ、ブレイブソウルプリキュアの諸君久しぶりだね。」

玲央「北村教官!?、なんで此処に」

静「聞いていると思うが、私はこの度、再び、キュアデヴァイスを与えられることになったのだ。だから君達には私の鈍った腕を取り戻すために手伝って欲しいのだ。」

陽奈「ええ、そんな生身でも勝てないのに同じプリキュアって言う土俵に立ちやつたら勝てる気がしないのに」

静「何をいうか、オリジナルの君達と違い私は量産タイプのカスタムタイプ出力やポテンシャルで言えば君達の方がよっぽど上なのだよ。それに君達は数々の戦いで実力も増してきている、グランガードに来たばかりの頃とは違うんだよ。」

静「さあ、訓練場に来い。始めるぞ。」

静は訓練場に入る。そして玲央達も訓練場に入るとキュアゲシユペンストⅡに変身して待っていた。

ゲシユペンストⅡ「来たか、ブレイブソウル」

ポリス「すごい、昔の資料で見たことあるよ、あれ」

カイザー「そうでしょうね。量産型のプリキュアって大体の場合は登録された攻撃モーションや回避のパターンモーションをデヴァイス内蔵のAIが最適化して選択す

ることでも一般人もある程度戦える力をつくるわけだしね。まあ、それは装着者のカスタムによって変えられるし、ましてや北村教官はその格闘パターンのモーションパターンを製作していた。格闘能力においては私達オリジナルと言われるブリキユアの中にもほぼ頂点に立つくらい強い。」

エキスプレス「それに私、一回なぎささんと北村教官の格闘訓練の模擬戦見たことあるけど、あのなぎささんがボコボコになっていたよ。」

ゴルティ「ちよつとなんだかすごいおっかなくなつて来たんだけど」

ゲシユペンストII「何を無駄話をしている。いくぞ！」

北村静の實力

ブレイブソウル7人とキュアゲシユペンストIIの7対1のタイマンは続く。

ゲシユペンストII「どうした、お前達、始めた頃の勢いが落ちてきてるぞ。」

カイザー「教官、強すぎます。　はあ、はあなんで強化ガシャットまで使つて

るのにこんなボロボロなんですか!？」

ゲシユペンストII「それは単純にトレーニングの差だと思うがな、最近は実戦ばかりで基礎的なトレーニングが組み込まれた訓練には参加できていなかったろう。確かに実戦にまさる鍛錬はないかもしれないが、日々の積み重ねによる万の努力は実戦能力をさらに上の次元へと

昇華させる。君達はゆえにもつたいないのだ。」

ブレイブソウルプリキュア「・・・」

ブレイブソウルプリキュア全員はたしかに黙りこくってしまった。確かにブレイブソウルプリキュアは最初の結成して初期の方でしか、訓練を実施できていなかった。ブレイブソウルプリキュアが結成してまもなく、幻影帝国との苛烈な戦いに巻き込まれていったために任務を受けることがほとんどで模擬戦などは何回か行っただけだが、それ

も数えられる程度であった。

ゲシユペンストⅡ「さて無駄話が過ぎたかな。……続きを始めようか。」ううーと警報がなる。

ゲシユペンストⅡ「これは」

カイザー「敵の襲来を告げる警報、しかも敷地内に侵入者」

そして一同は敵のいる場所へと移動した。

そこにいたのは

カイザー「貴女達は、キュアスサノオ！、田村ゆ●り」

ゆかりん「だからチゲエって言ってるんだろ。覚えてねえってんならもう一度名乗ってやる。私は冥界を治める女神が、一柱、冥王！、ゆかりん！」

フィーニクス「やっぱり田●ゆかりじゃない。」

ゆかりん「だからチゲエってんだろ。ゆかりんだよ。ゆかりん！」

スサノオ「まあ、ゆかりん様は置いておいて、久しぶりだな。ブレイブソウルプリキュアの諸君、キュアオルタナティブはいないようだがまあいい、君達には私と戦ってもらおうかな。」

カイザー「まさか、そんな目的の為にここまで」

スサノオ「いや、その気になればすぐにでもこんなところには来れるんだという牽制に近いかな。」

ゲシュペンストⅡ「全くさつきから聞いて入れれば、無粋な奴だ。教え子との鍛錬も最後までやらせて貰えんとはな。」

スサノオ「君からは強者の匂いがする。今の消耗したブレイブソウルよりは君のほうが楽しめるかもな。さあ、やろうか、何、今回は小手調べさ。」

ゲシュペンストⅡ「なら、私のとっておきを見せてやる。」

ゲシュペンストⅡ「プリキュア　ゲシュペンストキッツク！」

ゲシュペンストⅡの最強の格闘モーション、ゲシュペンストキッツク、その破壊力は装着者にもよるが、静の場合は開発者であり、格闘能力抜群の静の蹴りは凶悪なものだった。半径100メートルの範囲のアスファルトをぶっ壊した。スサノオの張ったバリアーフィールドもギリギリで耐えきり粉々に砕け散った。

スサノオ「これほどとは、まさにわたしの好敵手にふさわしい、今日は満足したし、これでお暇させてもらおう。さらばだ。」とゆかりんとスサノオは帰っていった。

変身を解いた静は、膝をつく。

静 「キュアスサノオ、恐ろしい相手だった。」

だがこのとき、ブレイブソウルの面々にはスサノオやゆかりんより、あの強大な大地を破る蹴りを見せた静が恐ろしか見えたとか

キユアカイザー 新たな強化形態

先日のグランガードのゆかりん襲撃から一日、玲央達は久しぶりに基礎訓練を行い、ブレイブソウルの面々は静の映画でみたひたすら辛そうだからという理由で追加された訓練をさせられその結果ぼろぼろになっていた。

玲央「静の教官の鍛錬ってなんなんだろう。竹馬に乗りながら組手をしたり、自分の周りに来た蜂だけをはたき落したり、卵でリフティング、10キロの装飾品をつけての奉仕活動に格闘術の型、一万回」

陽奈「玲央ちゃん、やめて思い出したくないわ。特に最後の方」

まどか「私もあんまり」

佳子「それにあの人が毎日あれをやってるのか、聞いたら飯食って映画見て寝るで女の鍛錬は充分だそうよ。」

葵「あれを子育てしながら、あの強さなんだからすごいわよね。」

まどか「それを言ったら、英里さんだつてすごいんじゃないかな。舞亜ちゃんを育てながら多分、静さんと同じくらいには戦えるんじゃないかな。」

玲央「そこは場数の違いとかそこらへんだと思うんだよね。でも僕も将来的には

英里さんと一緒に家計を切り盛りしていくわけだし、どっちもお母さんだけど、言葉遣いだけで言ったら僕の方がお父さんのなポジションなのかな。最近では細胞学も発達して女性同士の妊娠や結婚なんかも認められるケースが多くなってるらしい」なんて赤くなりながら玲央は自分の妄想が声に出ていることにも気付かず一人喋り続けた。

陽奈「うぬぬぬ、また英里さんって、絶対奪い返してやるんだから」

陽奈は悔しそうな顔でハンカチを噛み締めていた。

そして今日はこの後はみんな非番になっていたので、解散となった。

玲央はその日の午後、夕飯の買い物に出ようと外に出ていた。そこにブレイブモバイルに緊急の連絡が入る。

玲央「はい、直ちに現場に向かいます。」

玲央「はあ、買い物は後回しかな。」玲央は現場へと向かう。

そこには1体のベリアル融合獣とそいつが召喚した雑魚敵がいた。

玲央「うそ、あのベリアル融合獣、キュアオルタナティブ！、ゼロじゃないってことは英里奈さんのほうか、なんで防衛省に事情聴取で連れていかれたって聞いてたけど、そうか確かベリアル融合獣はカプセルを使って召喚しているんだっけ」

カイザー「それにオルタナティブの色がいつもより黒くなってる。確か、ビルドのハ

ザードトリガー、オルタナティブのカプセルとハザードトリガーのカプセルを使ったハザードオルタナティブってところかな。」カイザーに変身してそういうと、ハザードオルタナティブに向かっていく。

カイザー「はああ！」

ハザードオルタ「・・・」ハザードオルタナティブは無言のままカイザーを薙ぎ払い、カイザーは壁に叩きつけられる。

そしてハザードオルタの召喚した使い魔を倒しながらハザードオルタに近づこうとするが、使い魔達は倒しても次々と再生して戦線復活していく。そして、しばらくして漸くカイザーはハザードオルタナティブに近づけた。

カイザー「やああ！」と拳をぶつけるがハザードオルタナティブは

びくりともせず再び攻撃を撃ち合うがカイザーの攻撃はハザードオルタナティブにことごとく相殺されるのか対してハザードオルタナティブの攻撃は強大でカイザーに確実にダメージを与えていく。

カイザー「くっ！」と何度目かの打ち合いで等々、カイザーは膝をついてしまった。それを好機と思ったハザードオルタナティブは使い魔を大量に召喚する。だがそこでハザードオルタナティブに異変がおこる。

ハザードオルタ「……ぐああ！」と突然超えをあげる。そして今日が真っ赤になっていた。

カイザー「まさか、ハザードトリガーの暴走。まずいどうやら、使い魔と敵の区別はビルドと違ってつくみたいね。

ハザードオルタ「がああ！」とハザードオルタがカイザーに襲いかかろうとした瞬間、カイザーの周りに10本の何か札のついたクナイがささり、爆発する。そしてそのカイザーのいるところに1人の女性が降って来た。

メリル「ハロウ！、カイザー、苦戦してるデスね。」

カイザー「見ての通りよ。それでなんで貴女が、英里さんと一緒に日本から来たって」

メリル「のん、のん！、それは秘密デス。今回はカイザーに英里様からプレゼントを持ってきたよ。」とメリルはカイザーにプレスレッドを渡す。

カイザー「これは？」

メリル「それは英里様が開発していたカイザープレス、カイザーの強化変身ツールね、それにはあるガシヤットのデータが移植されていてより、カイザーに近い形でフツティングされています。」

カイザー「ようするに私と相性抜群ってわけね。」

メリル「イエース！」とカイザーはカイザーブレスをつけてそれを起動させる。

カイザー「プリキュア！、カイザーコンバイン！」とカイザーをブレスレッドから放出される光が包み込んでいく。そして光と爆風が同時に晴れる。

ハザードオルタは姿の変わったカイザーを見て驚いていた。

カイザー「キュアカイザー！モードマシンカイザー！」とカイザーの姿が変わり、カイザーは別の世界で魔神皇帝の名を冠した神にも悪魔にもなれるマシンを模したものになっていた。

そしてそこからすぐ近くのビルの屋上では片目に傷がある玲央が見ていた。

玲央？「すごいな、この世界の僕もあんな力を持つてたんだ。なら僕もこんど会う時はとっておき、使わせてもらおうかな。」と手に持っていたガシャットに書かれた名前は最凶のゼロと書かれていた。

戦いの報告

キュアカイザーはマジンカイザーのガシャットのデータを移植し造られたカイザーブレスを使い、キュアカイザーモード魔神皇帝へと変身した、キュアカイザーは圧倒的だった。

カイザー「雑魚を蹴散らす。プリキュアターボスマツシャーパンチ！」カイザーのグローブに竜巻が収束してグローブの上に黒い装甲が展開される。そしてそれを打ち出す。竜巻の回転とエネルギーによるブーストによってドリルのように貫通力を持ったパンチは雑魚敵を一斉に蹴散らしていく。

ハザードオルタナティブはさらに自分の使い魔を召喚していく。

カイザー「まだ、まだいくわよ。プリキュア光子力ビーム！」

カイザーの目から光線が発射され、前方の敵を蒸発させる。

カイザー「ショルダースライサー！」とカイザーの両肩部の装甲が展開して剣の柄の部分が出てきてカイザーはそれを引き抜いて二刀流でハザードオルタナティブの使い魔を切り倒していく。

カイザー「よし、ようやく懐に入った。トドメよ。プリキュアファイヤーブラス

ター!!?!!?!」カイザーの胸部にある放熱板の役割をもつリボンからすさまじい温度の熱線が放射され、ハザードオルタナティブをドロドロに溶かしていく。

玲央「すごい、これが魔神皇帝の力、まさに神にも悪魔にも力英里さんが渡してくれたこの力、僕は本当に使いこなせるのだろうか」と唐突に渡されたあまりにも強大な力に戸惑う玲央だった。

玲央「とりあえず、基地に行つてこのことを報告しよう。」

玲央がグランガードの香川司令の部屋にやつてきた。そこには最近、世界平和守備機構極東方面軍伊豆基地司令に就任した嵐山森夏がそこにはいた。

玲央「森夏長官。いらしてたんですか。」

森夏「ええ、久しぶりね。玲央さん」

香川「玲央くん、先程はすまなかつたな。さつ、報告を聞かせてくれ。」

玲央「はい、それじゃ・・・」玲央は先程の戦いの一部始終を話していった。

森夏「メリルさんが来ていたんですね。メリルさんには現在、統合参謀本部の保管庫からプロトタイプのゲシユペンストタイプのS型のデバイスを持ち去つた容疑がかかっているんです。それに最近、世界平和守備機構でも防衛省の人間が外向してきているんです。私が司令に昇格になったのも何か、裏がありそうなんです。私の後任でバ

ルカンベースの長官に任命された人も防衛省所属の人間なんです。そこで太陽戦姫のプリキュア達の太陽ブレスの没収をしたんです。その時は私の管轄の伊豆基地預かりになっていたので4人も伊豆基地へと転属扱いにして私の庇護下に置くことでなんとか4人を変身者として守ることが出来たんですが、他に所属になっていたプリキュアオツレーのメンバーの大半は英里さんについて日本から出ているようなんです。ですが所属していない人達はすでに防衛省の役人達がデバイスの

没収を行ったようなんです。それを拒否したミナトさんは公務執行妨害で身柄を拘束されているそうです。」

玲央「そんな、ミナトさんが」

森夏「私もそのことに関しては再三抗議したのですが、門前払いをくらってしまってます。」

香川「世界平和守備機構の基地司令である森夏くんの抗議を日本の一省庁である防衛省が却下できるだけの後ろ盾があるのか」

森夏「ええ、なので前々から英里さんにはある艦船をつくってくれるようにたのんでいたのです。」

玲央「艦？」

森夏「ええ、英里さんはおそらくそれを使って数々の発明品のピークルと一緒に日本

からたったのでしよう。あれはステルス機能もついたものだったので消息を絶つたままなので連絡のとりようがないんです。」

香川「わかったこちらでも、拘束されたプリキュアの行方や英里君達の動きを探ってみる。」

森夏「お願いします。」と言って森夏は基地を後にした。

そしてグランガードの司令室の隣の部屋で今の会話を聞いていたものがいた。

??? 「・・・」果たしてこの人物は一体誰なのか

カイメラ隊の襲撃、黒い竜巻の実力

黒い竜巻、それはかつての世界平和守備機構の特殊戦気味教導隊のメンバーであり後にグランガードに移籍し、グランガードイギリス支部に所属していたプリキュアチームの隊長の異名である。そのプリキュア 黒、赤、金のカラーリングが特徴であり、射撃の腕に関しては世界で5本の指に入る腕前の持ち主であったという。件の彼女は現在、幻影帝国との戦争の際、起こったとある組織が世界平和守備機構に宣戦布告を仕掛けたさい、その組織にいたことにより彼女や彼女の部隊はグランガードを除名処分となった。そしてその彼女は今現在、英里と行動を共にしていた。

そして英里達は英里が開発したスペースノア級参番艦クロガネの会議室にて、メリルの持つて帰った情報について話し合っていた。

英里「まずいな、日本での防衛省の動きが段々と過激になってきている。」
タツミ「まずいどころの話じゃ、ないのよ。こっちはミナトがすでにパクられてんだから」

英里「別に私についてこなくても良かったんだぞ。最悪、アイテムは没収されたとしても役職としてはそのままなんだからな。」

恭子「そういう訳にはいかないだろう。我等も散々抗議書を送ったが返答は決まって変身アイテムを提出せよだったからな。」

メリル「それに英里奈さんまでが、取り調べという名目こそあれど事実上の軟禁に近い状態になっているデスよ。」

英里「それに英里奈のオルタナブレスを没収されていてはどうしようもないからな。」

タツミ「それ大丈夫なの、オルタナブレスって私達の変身アイテムのベースになったやつだったはずよね、オルタナタイプを量産されでもしたら、それにアンチプリキュアシステムを解析されちゃったら相当やばい気がするのよ。」

英里「だが、それを搭載するにあたって私はプリキュアシステムのアップデートも行なっていたからな、だが変身システムに関してはオルタナブレスはブラックボックスのかたまりと言ってもいい、あれには当時から今現在に至ってもその全容を把握するに至っていないシステムが多々あるんだ。数々の戦いでかつてにインストールされた機能なんかもあるしな。」

ゼラス「それでは、しばらくはこちら側、香川博士の技術が流出する恐れはないということだな。」

英里「だが、私は那由多の行方を懸念している。私のシステムやブラック

ボックスを解析できるとしたらあいづくらいのもんだよ。」

メリル「そういうえば、近くの哨戒任務に出たらエルザさん、遅いですね。」

ゼラス「エルザのことだ、食材の確保も担当していることだし、遅くなるのも仕方あるまい。」

タツミ「まあ、エルザさんのことだし。何かあつてもたいしよできるでしょ。」

メリル「イエース、黒い竜巻の異名は伊達じゃない德斯。」

そして、噂のエルザさんは近くの島で敵と遭遇していた。

エルザ「私に何か用かな。カイメラ隊のシエル・オペル中尉」

シエル「黒い竜巻と言われた貴女に名前を覚えていただけているとは光栄です

よ。エルザ少佐」

エルザ「なんのことかな。わたしはレーツェル、レーツェル・ファインシエメツ

カー」

シエル「謎の食通？、ふつ、料理好きな貴女らしいコードネームだ。」

エルザ「どうやら、君はわたしのことを大分ご存知のようだな。」

シエル「カイメラ隊にも元教導隊のメンバーがいてね。」

エルザ「ほう、それは興味深い話を聞いた、是非お聞かせ願いたいな。」

シエル「ここから先は、我々と一緒に来てくれたらお話ししましょう。ついてこら

れないのであれば、力づくでも」バキューン！とシエルが変身アイテムを起動させようとした瞬間、そのアイテムは撃ち抜かれていた。

シエル「なっ、なんだと！」

そして今、目の前にはプリキュアに変身して、銃をこちらに向けているエルザ、いやキュアトロンベの姿があつた。

トロンベ「悪いな、私は黒い竜巻と言われ女だ。私の弾丸はメーデーをうつ信号より速い。」

シエル「悔っていたのはこちらか、さすがは元特殊戦技教導隊のメンバーだ。今日のところはひかせていただく。貴女のお相手はまた次回といたしましょう。」とシエルはその場をさり、キュアトロンベも光学迷彩を使い、クロガネへと帰還するのだった。

諜報部の女

ギリリー・イエーガー、特殊戦技教導隊に所属していた過去を持ち、現在は世界平和守備機構、諜報部の責任者である。ギリリー・イエーガーはキュアゲシユペンストIをハロウインプロジェクトにより近代化改修がなされたキュアゲシユペンストRVの変身者である。

ギリリーはついで、素性の知れぬ女でギリリーの全てを知っているのはギリリーだけなのである。彼女は決して弱味を自分が不利益になる情報の開示しないのである。

そんな彼女は現在、世界平和守備機構伊豆基地の配属となっており、森夏司令のもう一つの懐刀として動いていた。

ギリリー「以上が、現在のところ判明している今回に関連した一件を裏で操っている疑いのある面子です。」

森夏「ありがとうございます。ギリリーさん、いつもすいません。」

ギリリー「いえ、現在の統合参謀本部と日本の防衛省のやり方には私も不満を持っているのは確かにですから、司令と私の知りたいことが合致しているだけです。ですの
でお気になさらず」

森夏「そうですか。いつもすいません。」と森夏は資料に目を通す。

森夏「これは、カイメラ隊のベルナー准将や最近創設された独立部隊ガイアセイバーズのアルテウル司令、私の後任でバルカンベースの長官に就任した高条さんまでが」

ギリー「ええ、それとこれは諜報部が極秘裏に手に入れた情報なのですがアメリカの転移門から謎の部隊が出現したとのことです。確証はまだ持てませんがその部隊は秘密裏に回収されガイアセイバーズに編入されたとの事です。」

森夏「異世界から来た謎の部隊、それにガイアセイバーズ、今回の件にはとても大きな闇が潜んでいるのかも知れないですね。」

ギリー「ええ、幻影帝国襲来時の宇宙での拠点を落とすべくホワイトスター攻略戦、幻影帝国とは別の勢力がこの地球に入り込んでいるのかも知れませんね。」

森夏「幻影帝国とは別の勢力ですか。」

ギリー「ええ、それに当時私達が倒したのもほんの一部の勢力なのかも知れませんが、いつも幻影帝国の脅威が復活するかも知からないですしね。」

森夏「そうですね、今回の一件余程おおごにならないかというのですが」

ギリー「そうですね、明日でしたね。スペースノア級の進水式は」

森夏「ええ、本来なら容疑のかかった英里さんのつくったものですから本来は開

発は中止、もしくは解体が望ましいはずなんですが」

ギリー「何せ、新型の万能航行戦艦、あれを力を欲している統合参謀本部や防衛省が欲しがらない理由はありませんから」

森夏「ええ、防衛省から2隻とも譲渡しろと言われていたんですがなんとかハガネだけでも我々の基地の配属にすることはできましたので」

ギリー「積んでいる武装で言えば、ハガネの方が戦略的にはあちらは欲していると思っていたのですがね。」

森夏「いえ、スペースノア級のスペックはハガネの搭載武器を抜きにしてもすさまじいものです。それが一隻とはいえ、防衛省に渡ってしまうのはわたしとしては好ましくないですね。」

ギリー「ええ、そう言えば、3番艦の行方は我々の方でも探っています。」

森夏「ええ、所在が分かり次第接触のほうをお願いします。」
ギリー「了解です。失礼します。」とギリーは部屋を出て行った。

森夏「これは至急、戦力を整えなくては」と森夏は電話を繋ぐ

森夏「もしもし、私です。レフイーナにとりついで貰えますか。」

偉大なる勇者の誕生

英里は現在、徹夜の真っ最中だった。

英里「あははは！、やっと完成したぞ！、私の使う新たな変身システム！、あははは!!」

タツミ「うるさいわ！、今何時だと思ってるの、舞亜ちゃん起きちゃうでしょ！」
タツミはハリセンを使い、英里をしばく。

英里「なんで、お前が持つてるんだ。それは玲央が持つてるはずなのに」

タツミ「これはスペアよ！」

英里「スペア！、なんでスペアなんてあるんだ。」とサヤの意思は彼女が死んだ今でもしつかりと受け継がれている。

タツミ「全く、母親になって少しは落ち着いたと思ったのに、日本を抜け出してから昔に戻ったみたい。」

メリル「そうですね。妖魔連合と戦ってた時みたいで懐かしいです。」

タツミ「そうそう、あの時は勝てない敵が出てくるたびに、私達のデバイスに調整いれるために毎日徹夜してたんだっけな。」

英里「さて、私は明日、少しは出かけてくる。」

タツミ「出かけるって何処に」

英里「少しな、野暮用で出かけてくる。」

メリル「でも、英里様は国内では手配がされてますし、隠密行動を得意とする。わたしは」

英里「いや、今回ばかりは私が行かなければいけないんだ。」

タツミ「どういうことよ。」

英里「ミナトの居場所を調べるついでにそのコンピュータの危機がどんなもんかを調べて起きたくてな。ついでにマガ社に」

タツミ「前者はわかるにしても、マガ社はなんで」

英里「T— Linkシステムという、人の念に感応するシステムデータの受け取りにな。それに舞亜の嗜好品も買わなきゃいけないし、あの子のお気に入りのおぬいぐるみを忘れて来ていたらしくてな。セツプククロウサギとカンデンヤマネコなんだが」

タツミ「ああ、あれね。舞亜ちゃんの趣味つてだいぶかたよつてるわね。」

英里「そうかな。」

タツミ「まあ、いいわ。」そして翌朝英里は変装して用意した偽の身分証明書を持ち、そしてその身分証明書に記された名は

英里「剣　華火か、悪くない名前だな。」と英里は二週間ぶりに大地に足をつけたのだった。

英里はとりあえず、まずはマガ社に顔を出して、Tー Linkシステムのデータとリンが調べていた監禁場所、さらにそれらの管理プログラムを調べていく。そしてあらかた調べ終わり、そのデータをメモリスティックに読み込んでいく。

そして英里はカフェに入り、コーヒーを飲んでみると

玲央「へえ、ココが噂のカフェか」

英里「ぶろう！」と英里はコーヒーを吹き出してしまった。

マスター「お客様!？」

英里「失敬、失敬すまない。台拭きを貸してもらえるかな。」

マスター「はいどうぞ。」

英里「すまない。」と英里はテーブルを拭いてマスターに返す。

マスター「お客様、当店はただいま混雑しております。相席のほうよろしいでしょうか。」

英里「ああ、構わんよ。」

と相席を許可して相席をしたのは

玲央「すいません、お邪魔してしまって」

英里「いや、こちらこそ、なるべく早く居なくなるから」英里はさっさとコーヒーを飲んで、店を出るのだった。そして英里の座っていた席にはある手紙と箱が置いてあるのだった。

玲央「あれ、さっきの人の忘れものかな。」

そこに置かれていた手紙の宛先には星川玲央へと書かれていた。そして箱を開けるとそこには指輪が入っていた。

玲央「まさか！、英里さん！」と玲央が外を見るとすでに英里の姿はなかった。

英里はこうして玲央の誕生日プレゼントを渡したあと、自宅に入つてぬいぐるみを回収して帰路につこうと道を歩いていると

英里「おい！、そこに隠れてるやつ出て来い！、尾行してるのはわかってるんだ。」
そこに出てきたのは

英里「防衛省の回し者か」

役人「香川博士、日本に戻つて来たということはこうなることも承知のはずだ。」

英里「結局それか、私はなんと言われようがお前達の企みには加担せんぞ。」

役人「そうですね、残念ですね。では発表は明日ですが、特別にあるものをお見せしましょう。」と役人はジェラルミンケースからあるものを取り出して装着する。

英里「それは太陽プレス?!？」

役人「真・太陽プレス、太陽プレスのオリジナルを基に制作された量産モデルですよ。真イーグル！」と役人は量産タイプのキュアイーグルへと変身した。

英里「あれが新型のプリキュアシステムか、太陽戦姫のベースか、逮捕されたプリキュアの中にはミレイ達もいたか、だが、そんなもの

出したんだ。遊びじゃあ、すまないぞ。」と英里はキュアデヴァイスを起動させる。

英里「プリキュア！、ファイヤーオンツ！」

「私は、偉大なる勇者。キュアグレート！」ここにブレイブソウルプリキュアから数えて12番目の勇者が生まれた。

我は悪を断つ剣なり

ゼラス・ゾンボルト、世界平和守備機構の北米ラングレー基地ほ

プリキユア部隊の隊長をしていた。元教導隊メンバーの一人である。薩摩示現流免許皆伝の腕前を持つ。ゼラスの剣技はまさに薩摩示現流の二の太刀いらず。一の太刀を疑わずを体現した一撃必殺の戦いを得意としているが、継続した状態での剣術など身につけている。剣の腕は飛羽ミレイをはるかにしのぎ、幻影帝国の兵士一万人を一人だ倒したほどの強者である。

ゼラスはエルザ同様に幻影帝国との戦いの中盤に起こった世界平和機構やグランガードと敵対した組織に一時所属していたため、グランガードを除名処分となっている。現在は英里達と共に万能航行戦艦スペースノア級三番艦クロガネに乗り、潜伏生活をしていった。

ゼラス「……」ゼラスは鍛錬の後、精神を落ち着かせる為に坐禅を組んで瞑想を行っていた。そしてゼラスが坐禅を組んでいると部屋にエルザが入ってきたのだ。

エルザ「ゼラス」

ゼラス「なんだ。エルザ」

エルザ「英里が定時を超えても戻らんのだ。少し様子を見てきて欲しいのだ。」

ゼラス「承知した。香川博士を迎えに行ってくる。」

ゼラスはクロガネを出て、英里の反応があつた場所へと向かうのだった。

そして場所が変わり、英里はキュアグレートに変身して防衛省の役人の変身した。

量産タイプのプリキュア、真キュアイーグルと戦っていた。

グレート「なんて奴らだ。単純な出力ならオリジナルに迫るほどのパワーがあるぞ。」

真イーグル「人工プリキュアを開発の第一人者である、香川博士にそう言っているだけとは光栄です。」

グレート「恐ろしいな。太陽プレスは世界平和守備機構のトップシークレットに当たる。それを解析したのは、那由多か、ユルゲン博士あたりかな。」

真イーグル「ほう、流石のご推察恐れいたします。」

グレート「どうせ、他にもいるのだろう。」

真イーグル「お気付きでしたか」

グレート「私を付けていた気配は複数あつたからな。」

真パンサー「はああ！」と後ろから恐らくはキュアパンサーの量産タイプ真パン

サーが遅いかかる。グレートはブレードを二本コールすると右手の剣で真イーグルを左手でパンサーの攻撃を止める。

真イーグル「流石だ。香川博士、二対一からでもこれ程とはだが三対一ならどうでしょう！」ともう一人、真シャークが現れて攻撃を仕掛ける。

がつ、ここでも英里は反射的に足で防いだ。

グレート「はああ！」と力で3人を押しつける。

グレート（流石に3人相手では部が悪い。あの人なら部が悪いのは嫌いじゃないと言うんだろうな。）

真イーグル「かなり善戦していますが、三対一、この状況、予想していたより早く限界がくるはずですよ。」

グレート「やはり、部が悪いすぎたか」

ゼラス「私を呼んだか！」

BGM 悪を断つ剣

ゼラス「キュアグレート！」

グレート「ゼラス少佐」

真イーグル「教導隊のゼラス・ゾンボルト ですか、待っていないさ。香川博

士を倒したら貴女も私達と共に来ていただきます。」

ゼラス「黙れ！そして聞け！、我が名ゼラス！、ゼラス・ゾンボルト！、我は悪を断つ、剣なり！」ゼラスはデヴァイスを起動させる。

グルンガスト参「3人目の超闘士、キュアグルンガスト参式、見参！」

真イーグル「1人増えたところで変わりはない、やるぞ」

三人がキュアグルンガスト参式に襲いかかる。

グルンガスト参「チエエストオオオ！」

キュアグルンガスト参式が武器である斬冠刀を横に薙ぎ払う。

すると三人の武装が横に縦に切れていき、3人は爆発する。そして変身が解除された状態で倒れていた。

キュアグルンガスト参式は変身を解除する。

ゼラス「香川博士、立てるか」と英里に手を差し伸べて立ち上がらせる。

英里「すまない、少佐」

ゼラス「詳しいことはあとだ。今はクロガネに戻るぞ。」

英里「はい」とゼラスと英里はその場を離れるのだった。

英里の2人目の娘!?、クスハ

香川英里は調査の為にクロガネに入った中国にあらわれた謎のアンノウンのことを調べるため、中国に来ていた。そして英里はある女の子と出会った。出会ったと言っても英里の入った遺跡の最深部に倒れていたのだが

? 「ここ、どこ?」

英里 「君は一体?」

? 「お母さん?」 と英里を見てその子はどう?

英里 「はあああ!」

そして2人の周りに2匹の妖精が現れる。

英里 「君達は?」

「私は龍王族の妖精リンリンなのだ。」

「私は虎王族の妖精ランだ。」

英里 「それでなんで私はこの子に母親と勘違いされているんだろ?」

リンリン 「この子に母の記憶はないのだ。」

ラン 「この子を生み出したのは、かつて、天空島のプリキュアの悪魔と戦った龍

虎姫の末裔、そして敵は悪魔だけではなかった。」

リンリン「バラル、百邪なのだ。」

ラン「そうだ。かつてアクーニンと名乗る悪魔と数人が目覚め、封印から脱け出したのだ。そしてしばらくしてアクーニンの気配が完全に消えた。だが最近になって世界に怨念などの人の悪感情が集まり、等々奴らは封印を破り、世界中に散らばってしまった。恨みを持つ人間に憑依して今もこの世界に暗躍している。」

リンリン「そこでこの子は代々封印を守ってきた巫女の家系の娘なのだ。」

ラン「母親はこの子を産んですぐ他界して、他の親族も祖母がいたがもう死んでしまった。そしてそれからは私とリンリンで面倒を見ている。」

リンリン「本当に偶然なのだ。だから気にしないで欲しいのだ。この子からしたらほとんど顔も知らない母親が作った恋しかったのだ。」

英里「そうか、ありがとう、さてこの子をこれからどうするか。」

ラン「迷惑じゃなければ、この子を連れて行ってもらえませんか。」

英里「それは構わんよ。」と英里はその子の前に行つてしゃがむと

英里（見た目から判断してこの子は舞巫より少し上くらいか）

その子に話しかける。

英里「やあ、君は何て名前なのかな？」

? 「私?、私、クスハだよ。」

英里 「クスハか、いい名前だ。」と英里はクスハの頭を撫でる。

クスハ 「えへへ」

リンリン 「それじゃ、行くのだ。」

ラン 「これからよろしくお願いします。」

英里 「さてとそれじゃあ、行くか」と結局はこの遺跡で見つけたのはクスハとリンリンとランランだけだった。

クスハ 「うん！」

とクスハは寝台から降りて英里に抱きつく。

英里 「おっと、危ないから手を繋いで行こうか。」

と英里はクスハの手を繋ぐ。

そして遺跡の外に出ると見たこともない魔獣が大勢が待ち構えていた。

リンリン 「バラル、暗闇獣！」

英里 「暗闇獣?、聞いたことの無い名前だな。だが」と英里はデヴァイスを構えるがクスハが前に入る。

英里 「クスハ？」

クスハ「リンリン、ラン！」

リンリン「うん。」ラン「わかった。」

クスハ「龍虎顕現、龍虎姫！」とクスハとリンリン、ランが合体して1人の戦士となる。

龍虎姫「無敵青龍！、龍虎姫、顕現」

英里「あれは、プリキュア、いや違うまた別の」

龍虎姫は印を結ぶと呪文を唱える。

龍虎姫「龍虎姫、移山法、神州靈山、移山召喚、急急如律令！」

龍虎姫は敵の真上に山を落とすのだった。

龍虎姫「まだまだ、雷精大帝、来たりて我らの敵を撃て、急急如律令、直、直、直！」と今度は五芒星を描き、その陣から攻撃をかける。そして敵は全滅した。

クスハは変身を解いた。

クスハ「お母さん、お腹すいちゃった。もう行こう。」

英里「凄まじいな。クスハの力は」

クスハ怒らせた場合、最悪、山が降ってきたりするのかと娘にすると聞いた傍ら、すでに恐ろしさを感じていた。

マガ社襲撃

キュアヒュッケバインやゲシユペンストを生み出した。マガインダストリー、ブレイブソウルプリキュアのメンバーの一人である葵は先日の真太陽戦姫のお披露目の襲撃時にひどい損傷を受けたダメに彼女のブレイブモバイルは現在フルメンテ中のため、香川司令からの勅命でマガ社へと赴くことになった。

葵「ここが、マガ社か、前から来てみたかったんだよね。」
葵が自動ドアをくぐり、ビルの中に入る。

受付に香川司令からの依頼書を提出して、職員用のエレベーターに乗せられ、社長室のある階に通された。

そしてその階のエレベーターの前にある人が立っていた。

葵「あなたは、風原イルミさん？」

イルミ「なんだ、私の知ってんのか、まあいいや、香川司令から話は聞いてる、とりあえず、ついてきな。」

イルミ「そういえば、お前さん達が幻影帝国の戦いに参戦したのは結構終盤の方だったらしいな。」

葵「はい、たしか、宇宙にあった幻影帝国の拠点の1つのホワイトスター攻略戦の後だったと思いますけど」

イルミ「へええ、あの戦いの後なのか、そういうえば、お前達が戦ってたのは地球の侵攻部隊の連中だったな。」

葵「でも、あの頃は地球に残っていた部隊だけでも強力な奴らが多かったけど私達は色んなプリキュアの協力のおかげでなんとか倒すことが出来たんです。」

イルミ「そうかい、お前さん達も、わたし達と同じように仲間に恵まれたんだな。さて長話なんだし、そろそろ、社長室に行きましようかね。」

イルミが扉をノックする。

イルミ「社長、お客様をお連れしました。」

リン「ご苦労、入ってくれ。」

イルミ「失礼します。」

葵「失礼します。」

社長室に入ると元防衛省の黄金タックと言われた先代2人はマガキュアの1人、凶鳥リンがいた。

リン「やあ、待っていたよ。君が葵くんだね。」

葵「はい、プレスソウルプリキュア、キュアアースの高杉葵です。香川司令から

の文書を持ってまいりました。」

リン「うん、ご苦労、早速見せてもらえるかな。」

葵「はい、こちらです。」

リン「ふむふむ、なるほど、わかった。書類の内容に関して承諾した。後日正式な書類と注文の品はお届けしよう。」

葵「ありがとうございます。」

リン「ところで君は過去に何回か、我が社で行われていた人工プリキュアのデザインコンテストに参加していなかったかね。」

葵「はい、恥ずかしながら、何回か、全部一次予選で落ちてしまいましたけど」
リン「そうか、でも君の熱意は確かに企画書から伝わってきたしな。そうだ、もしその気があるならいずれ、我が社の開発スタッフにならないか。」

葵「本当ですか！、でもいつかその時が来たら是非お願いしたいくらいです。」

リン「そうだ、少し、協力してもらえないか。」

葵「わたしでよろしければ」

リン「よし、それじゃあ、シュミレーシヨンルームに行こう。」そして、シュミレーシヨンルームに着くとスタッフの人にキュアデヴァイスを渡される。

葵「これは」

リン「これは新たな凶鳥の眷属、キュアエクスパインの武装テスト用のフツティングデバイスだ。これの調整を頼みたい。君には念動力者の素質があるんだろ、ならこれに積まれたT—LINKシステムが使えるはずだ。それを少し試してみてください。」

葵「わかりました。」葵はデバイスを起動させて変身する。

エクスパイン（これが、キュアエクスパインか。人工のプリキュアの出力ってこんなに高いの？、これって下手したら普通のプリキュアと同じくらいの出力がある、）

リン『気に入ってもらえたかな、我が社の人工プリキュアは』

エクスパイン「はい、とつてもすごいです。これでフツティング用のデバイスなんて、製品版はどれだけ強くなるのか。」

リン「まあ、あくまでヒュッケバインの経列はあくまで我が社の独自のプロジェクトで制作しているワンオフだからな。それに月での事故のことがあったせいでワンオフのヒュッケバインは売れてないんだ。売れてるのは量産タイプのmark IIだけなんだよ。」

エクスパイン「大変なんですな。それじゃ、初めていきます。T—LINKシステム起動！」とキュアエクスパインのシステムを使って様々な武装テストをこなしていくった。

リン「おつかれ様、『ビー、ビー!』。なんだ何があった。」

『社長、大変です。我が社の上空にガイアセイバースの部隊が』

リン「何のようだ。一体、相手側の要求は」

『社長のキュアヒュツケバイン008Lの受け渡しを要求しています。』

リン「何、渡す気はないと答えて帰っていただけ。」

『要求に応じない場合はマガ社の強制押収を敢行すると、風原秘書長がその要求を断りに出向いたんですが、風原秘書長が撃墜されました。』

リン「なに!、イルミが!?、あくまで目的はヒュツケバインのデバイスということか」

エクスバイン「社長、私が行きます。」

リン「すまない。」

エクスバイン「キュアエクスバイン、行きます。モジュールはガンナーを」エクスバインはAMガンナーを選択して、カタパルトからガンナーごと出撃した。

香川英里、出生の秘密

東郷桜、特機タイプのプリキュア、キュアグルンガストの剣戟モーシオンを開発を担当している御年66になる女性だ。その姿は歳に似合わず、見た目は二十代後半の女性である。そして桜は今、

桜「どちらを選ぶべきか、カスタードと粒あん、迷うところよの」
シヨツピングモールのたい焼き屋の前にて悩んでいた。

桜「よしこうなれば」とやっと決まったのか、桜は店員に注文を言う。

桜「カスタードとクリームを4つづつ頼む。」

店員「かしこまりました。」

そして桜はニコラ・ライヒ研究所に帰ってきた。

所長室には珍しい顔がいた。

桜「今、戻ったぞ。お、なんじゃ、来ておったのか、孝次」

そこにいたのはグランガードの司令官、香川孝次であった。

香川「これはこれは、東郷先生、お久しぶりです。」

桜「なんじゃ、昔みたいに義母さんとは呼んでくれんのか。」

そこにニコラ研の所長である。ジョナサン・風原が口を挟む。

ジョナサン「そういえば、お二人は香川司令の高校卒業までとはいえ、義理の親子として過ごしていたのでしたね。」

香川「昔の話です。没落した香川の家、そしてすでに無くなっていた両親に行方不明の兄、そんな中で私を引き取ってくれたのが東郷先生でしたから」

桜「ずいぶん、昔の話になるがな。それで孝次、私に何かようか。」

香川「実は、な。現在指名手配中の香川英里という人物についてなのだが」

桜「ほおー、それで何が聞きたいんだい。」

香川「はい、香川英里とは何者なのかを知っておいでなのではないでしょうか。」

桜「何故そう思う。香川という名字は別段珍しいものではないと思うが」

香川「いや、私も最初は偶然や他人の空似だと思っていました、何故が彼女を見ていると写真で見た兄さんの姿を思い出して閉まって」

桜「そうか、ほんとうに何も知らないんだな。私があえて話でこなかつたといわれればその通りなのだがな。」

香川「ではやはり、彼女は」

桜「ああ、お前の兄、香川英行の娘なのじゃ。そして私はお前が私の元を離れた

後にこのことを知った。」

香川「そうでしたか、それで英里君はこのことは」

桜「知らないだろうな。中学までは施設で育つて高校からは纏博士の家に居候じゃ、大学時代は研究室に寝泊まりしておつたらしいからな。」

香川「英里君は変わらないな。」

桜「ああ、英行を知っておるわしからみてもあのこの性格は英行にそっくりだ。」

香川「15も離れている兄さんの子供か」

桜「だが、よくも悪くもあの親子は正義の為に科学を愛した。それが戦うかと思ひ、得られない平和であってもな。」

ニコラ研襲撃

クインシー・ラックフィールド、特機タイプのプリキュアの剣術モーションを制作している東郷桜の弟子の一人、彼女は東郷桜の弟子の中では一番の未熟者と言われている剣で言えば年下のキュアゴルティなどにも劣り、射撃戦も平均といわゆるずば抜けた才能を持たない。

だが彼女の性格からすれば射撃タイプよりは特機タイプのプリキュアの方が向いているらしい。東郷桜もクインシーの未熟さはしっているが彼女の愚直なまでの鍛錬や精神力を知っているためか、未熟者と言われていてもそこそこには戦えるし、彼女のそんな一面をかっているのである。

そんな彼女は現在、世界平和守備機構のラングレー所属のATXチームに所属しているのだが、所用でプリキュアシステムの開発や別世界の技術、*extra over technology*、通称EOTの研究機関、ニコラ・ヴィルヘルム研究所を訪れていた。

クインシー「風原所長、どうですか、式式の調子は」

風原「ああ、君の式式の調整はもうすぐ終わるあとは、調整後のフツティングだ

けだ。」

クインシー「それじゃ、やっと復帰できるんですね。」

風原「ああ、デバイスのオーバーホールも終わったし、3ヶ月とご苦労様」

クインシー「いえ、熱くなりすぎた頭を冷やすにはちょうどいい期間でした。」

風原「そうだな。」

と話している時、警報が鳴る。

風原とクインシーのいた所長室に警報が鳴り響く。そしてモニターに通信が入る。

『我々はガイアセイバーズのシャドウセイバーズ司令、ヴィンデル・マウザーです。ニコラ研所長、ジヨナサン・風原さん、ガイアセイバーズの国務部隊権限により、このニコラ研の施設及び、キュアデバイスの押収に参りました。』

風原「何だと！、政府からの申し出ならともかく、1部隊の独断でそんなことを決めて言い訳がないだろう！」

クインシー「所長、私が時間を稼ぎます。その間にプロジェクトTDのメンバーと一緒に脱出を」

風原「私はここの所長だ、最後まで個々と運命を共にするつもりで生きてる、私がガ

イアセイバーズに掛け合っている間にプロジェクトTDのメンバーと一緒に脱出するんだ。早く！」

クインシー「……わかりました。」

風原「クインシー君！、これを」

クインシー「キュアデバイス」

風原「君の式式だ。」

クインシー「ありがとうございます。」

プロジェクトTDのメンバーが用意している輸送機に急ぐ。

クインシー達を乗せた輸送機が飛び立とうとしていた時、ガイアセイバーズが研究所や輸送機に攻撃を仕掛ける。

クインシー「あいつら、ツグミさん、ここは自分が時間を稼ぎます。そのうちに離陸してください。」

『その役目、私が請け負った！』

とその言葉とともにガイアセイバーの量産プリキュア達に射撃が当たる。

B G M・T r o m b e

そして輸送機内のモニターに映ったのはなんと

クインシー「あの声、あのカラーリング、もしかして」

？「今のうちに離陸したまえ！」

そして、そのプリキュアを見た、シャドウセイバーズの隊長の変身したキュアツヴァイザーを驚いていた。

ツヴァイザー「何者だ。」

？「私はキュアガーバインMKⅢトロンベだ。」

ツヴァイザー「ガーバイン？、見た目やカラーリングだけで、私はごまかせない、こんなところにも凶鳥の眷属の生き残りがいたなんてね。なら、早速で悪いけど、それを渡していただけるとありがたいんだけど」といった瞬間にツヴァイザーの顔を弾丸がかすめていった。

ツヴァイザー（私が反応出来なかったっていうの、なんてすごいのかつちの世界の黒い竜巻は）

ガーバインT「今よ、一気に離脱する。」

とキュアガーバインは空域を離脱するのだった。

チームSRX

SRX計画、幻影帝国との戦いの終盤に開発された究極汎用型一撃必殺型プリキュアの開発を目指して発足したプリキュア開発プランである。SRX計画にて開発されたRシリーズと呼ばれたプリキュアデバイスにはT-LINKシステムという念動力という力の素質を持つ者達のためのシステムとトロニウム鉱石を媒介としたエネルギー機関を搭載されたプリキュアシステムであるが変身者を三人必要とする、1つのデバイスでは処理しきれないなどの問題点が生じるなど開発は難航し、試行錯誤の末に三人のプリキュアが融合することによって目指した目標へと到達できるという結論にたどり着き、そしてRシリーズを運用すべく世界平和守備機構には新たなプリキュア特殊部隊SRXチームが誕生、幻影帝国との戦いでL5中域に陣取る宇宙要塞ホワイトスター攻略戦、通称L5戦役時にSRXチームは多大な戦果を挙げたのだった。

そしてその件のSRXチームはというと

サリア「リアア、まったくこのところ、遅刻が多いわよ！、これが続くようならあなたのKTYUAの会員カードは没収します。お部屋にあるDVDもです。」

リアア「そんな、そんなのってないよ。ねえ、サリア姉さん、ちゃんと遅刻も

夜更かもしないからそれだけはやめてよねええ！」

サリア「いいえ、今度こそ許しません。大体、貴女は前もそう言つてたのに今こうして怒られてるじゃない。」

レヴィ「まあまあ、サリア姉さん、リーアも反省してるんだし」

サリア「ダメよ。そもそもレヴィ、貴女がリーアを甘やかすから」

レヴィ「なんだとー、そういう姉さんこそ、リーアと買い物に行つてお菓子買つてやつてるの知ってるんだからな」

そしてそのやりとりを部屋の隅で見守るライア

ライア「はあー、結局話が進みませんね。」

そしてその部屋に北村静が入ってくる。

静「なにやつてるんだ。お前たち」

そして少ししてなんとか落ち着いた2人は静の持ってきた命令書を読む。

リーア「へえ、グランガード日本支部に出向ね。」

サリア「それっていいんですか？」

静「ああ、世界平和守備機構でもわたし達の鋼龍部隊のほとんどか出向命令が嵐山司令から出ている。」

レヴィ「そうか、嵐山司令は鋼龍戦隊の所属の伊豆基地の司令だしグランガード

と一緒に行動することによって事件を解決せよということですね。」

ライア「それじゃ、今日はもう解散にしてそれぞれ準備をしましょうか。」

サリア「そうね。明日からグランガードに出向だし、今日は解散といきましょう。」とここで一時解散となった。

ブレイブソウルプリキュア達の100人組手

壮絶な訓練の土曜日を乗り越えたブレイブソウルプリキュアの面々そして翌日の朝7時、ブレイブソウルプリキュアの面々はシズカの訓練が始まる2時間前にシユミレーションルームに集まっていた。

玲央「本当にBPFをするのかしら？」

陽奈「でも軍用チューンの筐体だって言ってたけど」

まどか「それ故に心配だ。確かに今の私達ならキュアガリーオンとの100人組手はこなせると思うけど、今回変身するのは私達があまり馴染みのない人工プリキュアなんでしょう。」

ほむら「それだよ。普段のならまだしもな」

リオン「それでもやるしかないわ。」

葵「そんなこと言ってるけどなんだかんだ言ってるリオンは北村教官の訓練についていけるし」

龍奈「妖精族の私も根をあげるなんてどれだけ、強いんだろ」

そしてそれから色々と話しているうちに北村教官がやってきた。

シズカ「なんだ皆、まだ開始30分も前なのに全員揃ってるなんててつきり時間ギリギリに来るものだと思ってたが」

玲央「流星に僕たちもそこまではルーズじゃありませんよ。」

シズカ「さて、今回お前達にやつてもらうのはBPFの軍用チューン筐体だ、しかも3年ぶりのアップデート版ver3だ。ただ軍用だけにそのverの期間で使われているものしか使えないのが一般のゲームコーナーに置いてあるものとの違いだ。」

玲央「そっか、僕の使い慣れてるものはあまり使えないのか」

陽奈「私はあまりやったことないんだけど」

シズカ「さて、それでは」とシズカがくじの箱を取り出す。

シズカ「今からくじを引いてその名前のプリキユアで戦ってもらおう」

と皆くじを引く。結果こんな感じ

ゲシユペンストMkⅡ2 typeSがリオン

エクスバインが静

グルンガスト式が葵

ゲシユペンストMkⅡ2 typeCが佳子

量産型ヒュッケバインMkⅡ2が陽奈

シユバインがほむら

ラプターが翼

ヒュツケバイン009が龍奈

アインスがまだか

参式がかなみ

アシユセイバーが玲央

シズカ「さて、それでは各自、筐体に入ったらVRヘルメットをかぶってスタートボタンを押すんだ。プリキュアセレクトはそのプリキュア 名前の書いた筐体でスタートすることでセレクトできる。それでは諸君の健闘を祈る。」

そして続々とブレイブソウルのメンバーがシユミレーションをスタートさせていく。

シズカ「さて、とあいつらはどうなってるかな」とモニターをつけるモニターにはキュアガーリオンの倒した数が表示されている。

シズカ「ほう、開始2分やそこらでまだそんなに倒せないか」

とシズカはリモコンを操作してリオンのシユミレータの映像を見る。

リオンは初めて使うプリキュアシステムであつても比較的に使いこなしていた。どうやらリオンはカウンター戦法で敵の攻撃をかわしつつ確実に攻撃を当てていつて撃退判定を出しているようだ。

シズカ「ほう、今の世代であのタイプSをここまで使いこなす奴がいるとはそれにタイプSの燃費の悪さをよく理解した動きだ。ブレイブソウルの中で一番戦い慣れているだけはあるな。」

とそれで満足したのか次は静の名前をタッチする。

シズカはグラビトンライフルで的確に撃ち抜いて敵を倒していき、フアングスラッシュャーを使うことで効率的に敵を撃破していく。

シズカ「静はエクスパインか、なるほどAMパーツのデータはいれてなかったが中々うまい。自分の手元にある武器で最大限のパフォーマンスを発揮する戦い方はよしだな。」

シズカは次に葵の名前をタッチする。春獄剣や爆連打などの大技を連発せず、遠距離の武器を使い、自分の不利な状況を自分に有利な状況に変えていく。

シズカ「T-LINKシステムを積んだ試験的な意味合いの多いキュアグルンガスト式、少ない遠距離武器を的確なタイミングや自分の発想によって戦局を変えている。式爆連打や本命殺も使いどころを謝らずに使っている。」

そして次は佳子の名前をタッチする。火器を多く搭載したタイプC、傾向のハンドガンなどで敵を打ち倒していく。

シズカ「火器の扱い、射撃の腕はブレイブソウルの中ではピカイチだな、こいつは鍛

えようによつてはエルザに迫る力をつけるかもしれないな。」

次にシズカは陽奈の名前をタツチする。

シズカ「ほう、これは量産型のキュアヒュツケバインは今回のプリキュアの中では一番スタンダードな性能を発揮する。器量の良さや武器の特性の把握能力も高いか」

そして次はほむら

シズカ「キュアゲシユペンストとキュアヒュツケバインのちようど中間に存在するあのプリキュア、特徴的な武装もあまりない、これはどれだけ基礎能力が高いかによつて使い勝手も変わってくるな。」

シズカ「次は、翼か、ほう、今も現役のキュアラプターか、あいつを思い出す。そういうえば今日あいつがここに出向してくるんだったな。」

そして翼の次は龍奈

シズカ「そうか、緑か、あれは凶鳥の眷属の中でも比較的におとなしいタイプだ。エネルギー源が違うからな。戦う時のペース配分を考えて変えているな。」

次にまどかのチャンネルをつなげる。

シズカ「ほう、龍奈はキュアアインスカ、今回は武装も最低限にしたがるブレードトンプアーだけでよく立ち回れているもんだ。」

次はかなみ

シズカ「かなみはキュアグルンガスト参式か、獅子王刀だけであそこまで動けるとは見事だ。前回、村田武見との接触はあいつにいい傾向をもたらしたらしい。」

シズカ「最後は玲央か、ん、こんなプリキュアインストールしてあったか？、だがこの武装だけに頼ることはせず基本的には射撃、近接なんでもこなせるタイプだな。」

そしてそれから5時間後

ブレイブソウル「はあー、疲れたああー」

シズカ「おお、お前達、よくやったな。」

救世主編 天空島の襲撃、プリキュウス対キュアゴツ

ド

ここは天空島、プリキュアの光をそれぞれの妖精の国にもたらした全てのプリキュアの祖と言われる存在、キュアゴツドを祀る空に浮かぶ島、ここには千年間、島を守り続けてきたキュアゴツドの分霊に分類されるこの島の守護者 ホーリーナイトプリキュアがそこにいます。彼女達はよつぼどのことがない限り地上の危機には干渉しないようにしているため、あまり地上の戦いには顔を出すことはない。それでも地上が危機に瀕した際には島を離れ、人々を守る為に必ず現れる。

パラデイン 「んー、今日はいいい天気だな。」

デューク 「そういえば、ここ最近、何かと忙しかったからね。百邪

、バラルの封印が解かれたし、鋼龍隊が何体か撃破したみたいだし、私達も何人かは倒したけど全員を倒したわけじゃない。あの時みたいに900年前みたいにゴツドの力を使いこなせてなかった時とは違うはずなのに仕留めきれないなんて」

グラデウス 「たしかにな。私達は何も出来ていない。」

パラデイン 「……………」

デューク「パラディン、まだ小町ちゃんのこと」

先の戦いにおいて封印されていた悪魔の中には当然、キュアパラディン、人としての名を比企谷八重というそしてまだ八重が人間としてプリキュアに変身して戦っていた時に妹の小町は敵として闘っていたのだ。そして先の戦いにおいてパラディン達が封印した悪魔達が解き放たれたその封印されている悪魔の中には当然小町も存在している。だかパラディン達は先の戦いにおいて小町と遭遇することはなかった。

パラディン「大丈夫よ。私もあの時とは違うし、戦いに私情は挟まないわ。それに私たちは人間界や妖精界の抑止力となる為に本体から分離して確固とした自我を持たされているわけだしね。」

デューク「まあ、それもそうツ！・・・、これって」

デュークがパラディンの言葉に賛同しようとした時、空が紫色に包まれる。そして覚えのある気配を感じる。

グラディウス「まさか、ここ最近この世界を包んでいた邪気は悪魔達のものではなく」

パラディン「だけど、あれはここまで強大な力を持っていなかったはずだ。」

☒「おや、どうやら。目的地はここであっているらしい。」

パラディン「なッ!?」

デューク「嘘でしょ!」

グラディウス「そんな馬鹿な」

パラディン「邪神プリキュウス」

プリキュウス「キュアゴッドの分霊か、創造主である私に反旗を翻したお前を分霊とはいえこの手で始末できるのだから」

デューク「ふん!、飼犬に手を噛まれる間抜けに私たちは負けない」とデュークの言葉を皮切りに3人は構えを取る。

プリキュウス「私はあの頃よりさらに強くなっている。1500年前は不覚をとつたが今度は負けはしないぞ。」

グラディウス「はああー!」とグラディウスがプリキュウスに殴りかかるがプリキュウスはそれを片手で受け止める。

プリキュウス「なんだ。これがキュアゴッドの分霊の力か?、この程度で私を倒そうとは片腹いたいわ!」とプリキュウスは衝撃波を発生させてグラディウスを吹っ飛ばす。

パラディン、デューク「「ぜええやああ!」」

パラディンとデュークがダブルキックを放つがそれもガードされ、素早くつぎの攻撃へとシフトする。パラディンとデューク2人の最高速度の拳の全力ラッシュすらも余裕で受け、プリキュウスはカウンターを2人に入れる。

パラディン、デューク「きやああ！」

プリキュウス「つまらんな、そして私を馬鹿にしているのか？、お前達3人も、傷も癒えておらぬ体でむかつてくるなど」

パラディン「うるさい、ブレijingグファイヤー!!」と炎を守ったライオンファングをお見舞いする。

デューク「破邪聖獣球！、邪気玉砕！」

グラディウス「ファルコンブレイク！」

ほかの2人も

プリキュウス「うくん、今のはちよびつとばかり聞いたな。それでも私が思っていたよりはほんのちよびつとばかり届かんかったようだがな。」と

パラディン「そんな、全く効いてない」

プリキュウス「お前達の攻撃は私の薄皮をちよびつと焦がしたに過ぎん。さてどうするどのみち今のお前達では勝てない、さっさと合神した方が身のためだと思うがな。」

パラディン「そこまで言うなら：、グラディウス「まで、流星に迂闊すぎるぞ。」

グラディウス」

パラディン「でも、現状、悔しいけどあいつに對抗できるのはキュアゴッドやキュアハンターBM、キュアイカロスになるしか方法はないのも事実でしょ」

グラディウス「仕方がないか」とパラディン、デューク、グラディウスは手を合わせる。そして3人を中心に光が現れる。

そして光がはれるとそこには先ほどまでとは比べものならないほどのオーラ。神々しい力に溢れた3人が立っていた。

ゴッド「天空島の守護神、キュアゴッド」

ハンターBM「天空島に満ちる蒼き月、キュアハンター・ブルームーン」

イカロス「燃える烈火の鳥神、キュアイカロス！」

プリキュウス「ほう、お前達もそこそこ成長しているようだな。よもや私のいぬ間にお前達までもがそこにいるとはな、キュアイカロス、キュアハンターBM」

ハンターBM「私はゴッドに気付かされたのだ、我々がどれほど愚かな行いをしてきたのか」

イカロス「だからこそ、自らの罪を消せずとも、その因果を終わらせることは出来る。」

ゴッド「2人とも、破邪聖断剣を使うぞ。我々の全ての力を込めてここであいつを倒すのだ。」

プリキュウス「ほう、なら私もそれ相応の力で返すとしよう。」

ゴッド「いくぞ！」

ゴッド、ハンターBM、イカロス「愛の心にて、悪しき神を断罪す、その名も破邪聖断剣・神打、邪気残滅！、はああああ！」

プリキュウスも特大のエネルギー弾を飛ばす。

プリキュウス「はああああ！」

お互いの威力が拮抗し合う。だがお互いの威力が完全にお互いに同じであり、威力を打ち消しあってしまった。

ゴッド「そんな、馬鹿な」

ハンターBM「そんな、あれを相殺されるなんて」

イカロス「化け物め」

プリキュウス「ははは、嬉しいぞ、まさか、私の全身全霊を相殺できるとはいい、それでこそだ。お前達の力は全て、私のものだ。」と

プリキュアのエネルギー弾が3人にぶつかり、エネルギーフィールドを形成する。そしてそれを3人は破ろうとするが壊すことはできなかつた。

プリキュウス「無駄だ。それは内側からはけして破れない、そのダメージがお前達に帰るだけだ。さて、そろそろ完了か」とプリキュウスがエネルギーフィールドを解除するとそこには石像と化した3人がそこにいた。

太陽戦姫プリキュア キュアイーグル対アナザープリキュア

飛羽ミレイ達、太陽戦姫プリキュアはゼロフォウル軍の侵攻の際ゼロフォウルの力によって復活したブラックマグマの勢力を吸収しらの科学力を手に入れた。ゼロフォウル軍の送り出したダークプリキュア達のクローン体との戦いに明け暮れていた。

世界平和守備機構、極東方面軍伊豆基地にて太陽戦姫プリキュアやその指揮官の面々は会議を行っていた。

ミレイ「最近アナザープリキュアなる新たな敵が暴れまわっているらしいわ。それをブレイブソウルプリキュアや救世主のプリキュアが筆頭になって最前線で戦っているらしいし、英里さんはラボにこもりつきりだしな。」

カナ「ゼロフォウルに舞亜ちゃんがさらわれ、意識不明の状態で英里さんが取り戻ってきて以降、英里さんがラボから出ているのを見かけませんからね。」

アサヒ「でも、大丈夫だよ。英里さんならさ。あんなに強いんだから」

ルカ「今は彼女が出てくるのを待ただけよ。舞亜ちゃんの回復も」

ミレイ「でも、なんだかんだ言って、私達が戦いの最前線に立たなくなつてから久しいけどやっぱり、私達のプリキュアって旧型になりつつあるのかな？、防衛省の一件で太陽プレスを没収された時結構な量産型太陽プレスが製造されたって話だけど」

ルカ「それも前防衛省解体の時に全てが処分されらしいけどね。」

カナ「でも、それを製作したユルゲン博士の行方が最近になつて消息がつかめなくなつたらしいわ。」

アサヒ「それでも、私達の出番少ないのは作者つてやつせいなのだ。」

ルカ「こら、メタい発言しないの」とアサヒをこづく。

その時、バルカンベースに緊急アラートが鳴る。

『緊急通報、緊急通報、伊豆市街地にゼロフォウルおよびモンガー反応発生、太陽戦姫は直ちに戦闘準備を・・・』

ミレイ「みんな、いくよ！」

他3人「「おぉー！」」

と太陽戦姫のメンバーは生身での戦闘用装備を装着し、現場へ急行する。

到着した4人を待っていたのはアナザープリキュアの一体と量産型のダークプリキュアのキュアモンガー達だった。

ミレイ「あれって、キュアモンガー？、だけど何か違う？」

カナ「まさか、あれが巷で噂のアナザープリキュアというやつなのでしょか。」
アサヒ「他にもいっぱいキュアモンガーがいるのだ。」

ルカ「さしずめ、アナザーキュアモンガーってどこかしら、ミレイ、ザコは私達に任せて、あなたは親玉を頼むわ。」

ミレイ「オツケー、ルカちゃん、それじゃ、いくよ。」

4人「プリキュア！、シャイニングチェンジ！」

と4人のブレスが光り、4人をプリキュアへと変身させる。

イーグル「キュアイーグル！」

シャーク「キュアシャーク！」

パンサー「キュアパンサー！」

レイヴン「キュアレイヴン！」

イーグル「輝く乙女！」

4人「太陽戦姫プリキュア！」とここに太陽戦姫プリキュアが降臨する。

4人はそれぞれの担当する敵へと向かう。

イーグルはアナザーキュアモンガーと対峙する。アナザーキュアモンガーはイーグルに殴りかかるがそれをイーグルは避けて、拳を叩き込むがそれを受け止められ、すかさずカウンターを決めらるが自分から後ろに下がることよってダメージを減

らす。そして後方にあつた街路時を足場に着地、イーグルは刀を取り出してアナザーキュアモンガーに斬りかかる。アナザーキュアモンガーも剣を振らせまいと前に出て攻撃を仕掛けようとするが流石はミス武士道の異名を持つ彼女の剣技は凄まじく、アナザーキュアモンガーは彼女の間に常にいるような形となつてしまった。

イーグル「秘剣流れ十文字」とイーグルは得意の型を決めてアナザーキュアモンガーにダメージを与える。

イーグル「飛羽返し!」とイーグル最大の必殺剣を叩き込み、さらに追い討ちをかける。

イーグル「とどめ、プリキュアプロミネンスイーグル」と炎の翼を羽ばたかせた火の鳥となつたイーグルがアナザーキュアモンガーを倒した。

戦いも終わったのでイーグルは変身を解いた。

ミレイ「手強い敵だったな。」

ルカ「そうは見えなかつたけどね。」

アサヒ「ミレ姐もまだまだ鬼ツヨだな。」

カナ「さて、帰還しましょう。」

ミレイ「そうだね。行こうか」

と4人の帰還する後ろ姿を見つめる片目に傷を負つた少女の姿があつた。